大阪府埋蔵文化財調査報告2013－６

禁 野 本 町 遺 跡

－都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に伴う発掘調査－

大 阪 府 教 育 委 員 会

禁 野 本 町 遺 跡

－都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に伴う発掘調査－

大 阪 府 教 育 委 員 会

序　　文

禁野本町遺跡は、主体が奈良時代から平安時代の集落遺跡です。都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に先立って、平成19年度から順次、発掘調査を行ってきました。

禁野本町遺跡の南側には、奈良時代から平安時代にわたる百済王（くだらのこにきし）氏の氏寺と考えられる「百済寺跡」があり、本遺跡はその一族の居住域と推定されています。百済王氏は、かつて朝鮮半島で栄えた百済国の王族の末裔です。それを示すように、これまでの本遺跡の調査では、正方位に近い方形区画や道路わきに掘られた側溝、その中に計画性を持って配置された建物がたくさん見つかっています。以上のことから本遺跡は、一般的な集落ではなく、都市的な景観の広がるエリアと考えられています。

今回の調査では、道路に沿う非常に狭い範囲にもかかわらず、予想以上に多くの成果がありました。見つかった２条の溝は、やはり正方位に近い方形区画あるいは道路の側溝と考えられますし、たくさんの掘立柱建物も見つかりました。特に調査区西側の交野台地縁辺では、多数の大きな柱穴が密集して見つかり、その中には庇を備えた立派な建物も含まれています。これらの内容は、過去の調査成果とあわせることで、禁野本町遺跡の内容や性格をより明らかにするとともに、都市的な景観復元に役立っていくことでしょう。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様、ならびに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　荒井大作

例　　言

１．本書は、都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に伴い実施した枚方市禁野本町２丁目に所在する禁野本町遺跡の発掘調査報告書である。

２．本調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。

３．現地調査は調査第一グループが行い、平成19年度は主査 岡本敏行、平成20年度は副主査 横田 明、平成22年度は副主査 林 日佐子、平成23・24年度は主査 山田隆一を担当者として実施した。また、整理作業は平成24・25年度に、調査管理グループ主査 三宅正浩、副主査 藤田道子を担当者として実施した。

４．本調査の調査番号は、平成19年度が「07039」、平成20年度が「08024」、平成22年度が「10049」、平成23年度が「11014」、平成24年度が「12060」である。

５．調査の写真測量は、平成22年度が株式会社エイテック、平成23年度が株式会社日建技術コンサルタント、平成24年度が株式会社南紀航測センターに委託した。撮影フィルムは、各社で保管している。

６．出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

７．発掘調査および整理作業にあたっては、地元自治会、枚方市教育委員会、公益財団法人枚方市文化財研究調査会、大阪府枚方土木事務所の協力を得た。

８．本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。

９．本文の執筆は、第３・４章を岡本敏行、第５章を林 日佐子が行い、その他の執筆および編集は山田が行った。

10. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。

11. 調査および本書の作成にあたっては、以下の方々より御指導・御教示をいただいた。
西田敏秀、桑原武志、井戸竜太、岡島俊也、大竹弘之、竹原伸二、奥田尚、森村健一、
宮崎泰史（順不同、敬称略）

12. 本書は300部作成し、一冊あたりの単価は935円である。

凡　　例

１．本書に用いた標高は、東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．値）による。座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅵ系によるもので、方位は座標北を示す。

２．土層の記載に用いた色調は、『新版　標準土色帖（23版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001.1によった。

本　文　目　次

序　　文
例　　言
凡　　例
第１章　調査にいたる経緯と経過
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……2
第２章　位置と歴史的環境……3
第３章　平成19年度の調査成果……5
第４章　平成20年度の調査成果……8
第５章　平成22年度の調査成果……9
　第１節　地形と層序……9
　第２節　遺構と遺物……11
第６章　平成23年度の調査成果（東区）……13
　第１節　東区の層序……13
　第２節　東区の遺構と遺物……17
第７章　平成23・24年度の調査成果（西区）……34
　第１節　西区の層序……34
　第２節　西区の遺構と遺物……37
第８章　まとめ……48

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……1
第２図　調査区箇所図……2
第３図　周辺の遺跡分布図……4
第４図　平成19年度Ａ地区平面・断面図……5
第５図　谷10出土遺物実測図……7
第６図　平成19年度試掘調査（上：Ｂ地区、下：Ｃ地区）……8
第７図　平成22年度調査区平面図・北壁土層断面図……10
第８図　近・現代の遺物……11
第９図　平成23・24年度調査区割り図……13
第10図　東区土層断面図……14

第11図　平成23年度東区遺構平面図……15－16
第12図　東・西区上面遺構平面図……18
第13図　竪穴建物６平面・断面図……19
第14図　竪穴建物６出土遺物実測図……19
第15図　掘立柱建物１平面・断面図……20
第16図　掘立柱建物２平面・断面図……20
第17図　掘立柱建物３平面・断面図……21
第18図　掘立柱建物４平面・断面図……22
第19図　掘立柱建物５平面・断面図……23
第20図　掘立柱建物７平面・断面図……24
第21図　掘立柱建物８平面・断面図……25
第22図　掘立柱建物７・８出土遺物実測図……26
第23図　溝16・26平面図……27
第24図　溝16遺物出土状況実測図、溝16・26断面図……27
第25図　溝16・26出土遺物実測図……28
第26図　東区その他遺構平面・断面図……29
第27図　東区その他遺構出土遺物実測図……31
第28図　東区包含層出土遺物実測図……32
第29図　平成23・24年度西区遺構平面図……35－36
第30図　西区東半土層断面図……37
第31図　掘立柱建物６平面・断面図……38
第32図　掘立柱建物６出土遺物実測図……39
第33図　西区溝34・229出土遺物実測図 ……39
第34図　西区その他遺構断面図……41
第35図　西区その他遺構出土遺物実測図……42
第36図　西区上層出土遺物実測図……42
第37図　西区包含層他出土遺物実測図……43
第38図　落込み群平面・断面図……45
第39図　落込み41遺物出土状況実測図……46
第40図　落込み群他出土遺物実測図……46

図　版　目　次

表　紙　禁野本町遺跡遠景(南西から）
図版１　平成23年度、東区西部
図版２　平成23年度、東区中央部
図版３　平成23年度、東区東部
図版４　平成23・24年度、西区西部
図版５　平成23・24年度、西区東部
図版６　平成19年度調査１　ａ．Ａ地区西半部遺構検出状況（東から）
ｂ．Ａ地区柵15周辺（北から）
ｃ．Ａ地区土坑01（西から）
図版７　平成19年度調査２　ａ．Ａ地区西半部全景（西から）
ｂ．Ａ地区東半部上面全景（西から）
ｃ．Ａ地区東半部上面全景（東から）
図版８　平成20年度調査　ａ．１区全景（東から）　ｂ．２区全景（東から）
ｃ．３区全景（東から）
図版９　平成22年度調査１　ａ～ｃ．１区北壁土層断面（南から）
ｄ．２区北壁土層断面（南から）
ｅ．３区北壁土層断面（南から）
ｆ．４区北壁土層断面（南から）
図版10　平成22年度調査２　ａ．１区全景、第３面（北から）
ｂ．３－１・２区、地山面全景（東から）
ｃ．４区、地山面全景（東から）
図版11　東区、土層断面　ａ．１－１区西半土層断面（南東から）
ｂ．２－１区土層断面（南西から）
ｃ．１－２区土層断面（南東から）
図版12　各調査区全景　ａ．１－１区全景（東から）　ｂ．５区全景（東から）
ｃ．１－１区東半部（西から）　ｄ．２－１・２区全景（東から）
図版13　竪穴建物６　ａ．竪穴建物６検出状況（南東から）
ｂ．竪穴建物６掘削状況（南東から）
ｃ．東側壁溝掘削状況（南から）
ｄ．柱穴38断面（西から）
ｅ．柱穴42断面（西から）
図版14　溝16・26（１－１区）ａ．溝16遺物出土状況（南東から）

ｂ．溝16掘削状況と掘立柱建物１（南東から）

ｃ．溝16・26掘削状況（南西から）

図版15　溝16・26（１－１・５区）ａ．溝26断面（北から）　ｂ．５区、東半部（東から）

ｃ．５区、溝26掘削状況（南から）

図版16　溝280、掘立柱建物２　ａ．５区、溝280断面（北から）

ｂ．２－１区、掘立柱建物２・溝50（東から）

ｃ．２－１区、掘立柱建物２・溝50掘削状況（北西から）

図版17　掘立柱建物３・５、溝58　ａ．２－１区東半、掘立柱建物３他（南から）

ｂ．２－１区東半、溝58断面（北から）

ｃ．５区西半、掘立柱建物５（西から）

図版18　掘立柱建物４他　ａ．１－２区、掘立柱建物４（北東から）

ｂ～ｈ．掘立柱建物４柱穴断面

（b.163、c.164、d.166、e.165、f.29、g.33、h.28）

ｉ．溝27・落込み30断面（北東から）

図版19　６区遺構掘削状況　ａ．掘立柱建物４他掘削状況（西から）

ｂ．溝58他掘削状況（西から）

ｃ．溝158断面（南から）　ｄ．溝155断面（西から）

図版20　その他の遺構　ａ．５区西半、上面遺構（西から）

ｂ．１－１区、土坑３検出状況（南から）ｃ．左同 断面

ｄ．５区、土坑281検出状況（北から）　ｅ．左同 遺物出土状況

ｆ．５区、柱穴266断面（南から）　ｇ．同 遺物出土状況

ｈ．６区、土坑152掘削状況（南から）

ｉ．１－１区、溝４断面（北から）

図版21　西区、土層断面　ａ．７－１区、北壁断面、右は池（南から）

ｂ．７－１区、南壁東端断面、左は池（北から）

ｃ．７－１区、南壁断面（北東から）

図版22　３・７－１区、遺構掘削状況　ａ．７－１区全景（東から）

ｂ．７－１区全景（西南から）

ｃ．３区東端、溝79（北西から）

図版23　３・７－１区、各種遺構　ａ．３区、溝79（北から）

ｂ．７－１区、溝34断面（北から）

ｃ．３区、土坑113（西から）

ｄ．３区、柱穴126遺物出土状況（南から）

図版24　４区、溝229他　ａ．溝229・228掘削状況（西から）　ｂ．同（東から）
ｃ．溝229他掘削状況（東から）
ｄ．溝228断面（東から）　ｅ．溝229断面（東から）

図版25　４区、掘立柱建物６　ａ．掘立柱建物６（東から）
ｂ～ｉ．掘立柱建物６柱穴断面
（b.97、c.194、d.100、e.99、f.201、g.202、h.237、i.236）

図版26　８－１区、落込み群（１）　ａ．微低地確認状況（北西から）
ｂ．落込み群掘削状況（北西から）
ｃ．落込み群掘削状況（東から）

図版27　８－１区、落込み群（２）　ａ．微低地北壁断面（南西から）
ｂ．落込み群刃先痕検出状況
ｃ．落込み41他掘削状況（北西から）
ｄ．落込み41遺物出土状況（南から）

図版28　東・西区、陶磁器１　ａ．東区、包含層出土陶磁器
ｂ．東・西区、包含層他出土陶器

図版29　東・西区、陶磁器２　ａ．東・西区、包含層他出土陶磁器　ｂ．同上（外・底面）

図版30　東・西区、陶磁器３　ａ．東・西区、包含層他出土磁器　ｂ．同上（外・底面）

図版31　平成19・22年度遺物　ａ．平成19年度出土遺物
ｂ．平成22年度出土遺物

図版32　東区、竪穴建物６他出土遺物　ａ．竪穴建物６、柱穴281出土遺物
ｂ．竪穴建物６他出土鉄滓

図版33　東区、掘立柱建物出土遺物　ａ．掘立柱建物７出土遺物
ｂ．掘立柱建物８出土遺物

図版34　東区、溝16出土遺物　ａ．溝16出土遺物（１）
ｂ．溝16出土遺物（２）

図版35　東区、溝16・26他出土遺物　ａ．溝16・26他出土遺物
ｂ．その他遺構出土遺物

図版36　東区、柱穴266出土遺物　ａ．柱穴266出土石器　ｂ．同上（裏面）
ｃ．敲石38細部　ｄ．石錘37細部

図版37　東区、包含層他出土遺物　ａ．溝、包含層出土遺物
ｂ．包含層他出土遺物

図版38　西区、掘立柱建物他出土遺物　ａ．掘立柱建物６出土遺物
ｂ．柱穴213・233・241出土遺物
ｃ．柱穴126出土遺物　ｄ．柱穴193出土遺物

図版39　西区、遺構・包含層出土遺物　ａ．溝229他出土遺物

ｂ．包含層他出土遺物

図版40　西区、整地土出土遺物　ａ．整地土出土遺物　ｂ．同上（裏・内面）

図版41　西区、遺構・包含層出土遺物　ａ．各種遺構他出土遺物

ｂ．包含層他出土遺物

図版42　西区、落込み出土遺物１　ａ．落込み６出土遺物

ｂ．落込み41出土遺物

図版43　西区、落込み出土遺物２　ａ．微低地、落込み出土遺物

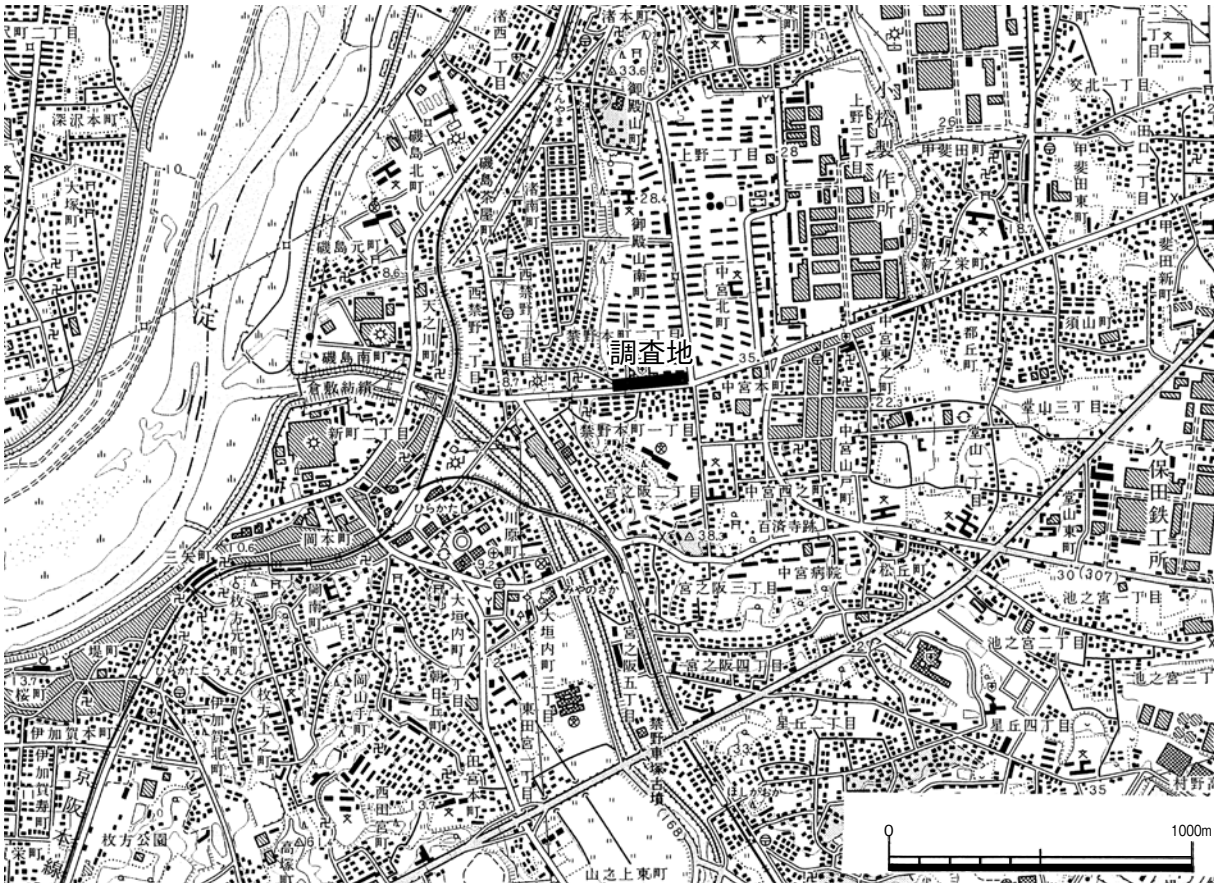
ｂ．落込み出土瓦他

第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

禁野本町遺跡は、枚方市禁野本町、中宮北町、中宮本町、御殿山南町に所在する弥生時代から中世におよぶ複合遺跡である。また明治から昭和初期にかけては、遺跡範囲の北半には旧日本陸軍禁野火薬庫が存在した。今回の発掘調査は、都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に伴うものである。工事範囲は、西は市道禁野第三号線との交差点から、東は禁野交差点までの約550mの間であり、西禁野二丁目・禁野本町一丁目・禁野本町二丁目に所在する。現地は交通量の激しい部分であるにもかかわらず、道路の幅は狭く、特に東半は歩道もない状況であった。そこで事業主体の大阪府枚方土木事務所は、道路幅を北側に拡幅し、あわせて新たに歩道を設置する事業を計画したものである。

歩道を設置する部分は、西半が交差点部分から交野台地にのぼる坂道、東半が比較的平坦な交野台地西縁辺部である。当該地の東半は禁野本町遺跡の範囲であるが、西半は周知の埋蔵文化財包蔵地ではない。しかし後者も禁野本町遺跡に隣接するので、大阪府枚方土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課は、その取り扱いについて協議を行い、西半についても部分的に試掘調査を実施することになった。以上の結果のもとに、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部から依頼を受けて、調査を実施することになったものである。



第１図　調査地位置図

第２図　調査区箇所図

第２節　調査の経過と方法

発掘調査は、第２図のように平成19年度から24年度にかけて実施している。

平成19年度の調査地は、禁野本町２丁目、禁野交差点西側の長さ約32m（Ａ区）である。また、事業範囲東端の低地部２か所（Ｂ・Ｃ区）においても遺跡の広がり、遺構の有無を確認するための試掘調査を実施した。調査によって、Ａ区で遺構・遺物の存在が確認された。

平成20年度の調査地は、禁野本町２丁目で、府道が交野台地上面にさしかかるまでの坂道部分、長さ約58mの範囲である。当地は枚方市立保険センターの南方であり、本遺跡は1986年の当センター建設に先立つ発掘調査で発見された遺跡である。よって本調査区への遺構の広がりが予想されたので調査を行った。現状では交野台地の縁辺部に相当するが、調査によって大きく削平されていることが判明した。

平成22年度の調査地は、禁野本町２丁目で、枚方市民病院の南方である。調査地の東端は坂道の上端部分、長さ約46mの範囲である。現状は台地縁辺部であるが、調査によって、大きく削平されていることが判明した。なお人力掘削が終了した時点で、トラッククレーンによる写真測量を実施した。

平成23・24年度の調査地は、禁野本町２丁目で、台地上面の長さ約129mの範囲である。現地は府道と北側の市民病院・民家・店舗・駐車場の間にあり、東西方向の歩道としても利用されている。よって歩道を確保しつつ、南北の間にも人と車両の出入りを確保することが求められ、８調査区12分割にして実施した。調査によって、ほぼ全面で遺構・遺物の存在が確認された。なお各調査区で、トラッククレーンによる写真測量を実施した。

第２章　位置と歴史的環境

禁野本町遺跡の所在する枚方市は、淀川東岸に位置しており、その周辺の地形は生駒山地から淀川に向かう山地・丘陵台地からなる。そして枚方市域の大部分は、「交野台地」と呼ばれる丘陵台地であり、その台地を深く切り込んで船橋川、穂谷川、天野川が淀川に流れ込んでいるのである。本遺跡は、交野台地の西端に立地し、西に淀川、西南に天野川を望むことができる。

現状では調査地の南に沿って、西に開く小規模な谷地形があり、それを利用して府道枚方藤阪線（以下、府道と記す）が東西に走るように見える。しかしこの谷地形は自然のものではなく、府道築造にともなって行われた大規模な地形改変によって生じたものである。府道は1938（昭和13）年に完成[1]したものであり、交野台地に存在した禁野火薬庫への輸送を重視した軍事目的の道路である。淀川堤防上を走る京阪国道から分岐し、禁野火薬庫の南端に至る。現地に立てば、その工事が台地縁辺を深く切り崩し、その土でスロープにする大規模な工事であったことが想像できる。なおその府道の築造以前の台地上に通じる道は、府道の北側にある集落の北端を台地に沿って、やや屈曲しつつ上る細い道のみであったとのことである[2]。

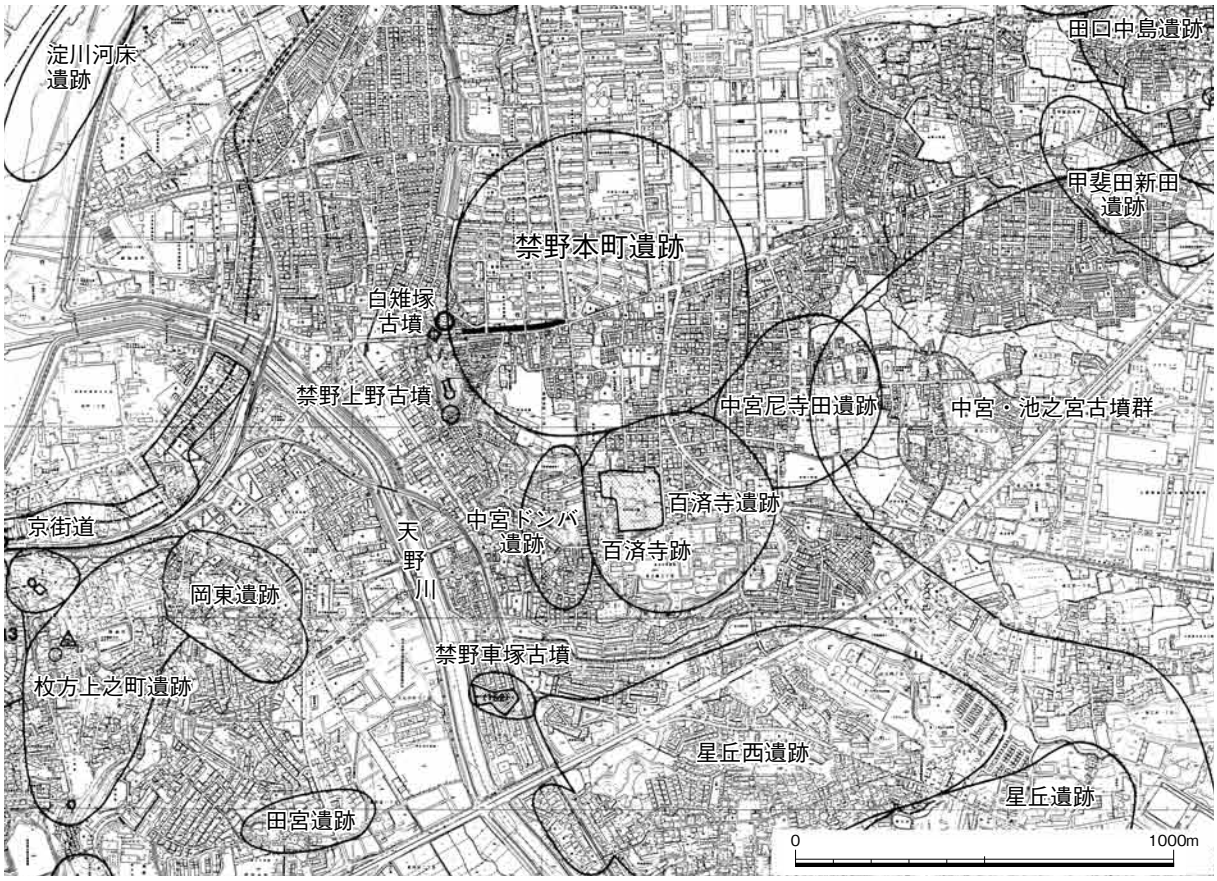
禁野本町遺跡の南には特別史跡 百済寺跡を含む百済寺遺跡が隣接して存在する。百済寺は朝鮮半島にあった百済国の後裔である百済王氏が、８世紀中頃に建立した氏寺と考えられており、最も新しい瓦は平安時代中頃のものである。百済寺は11～12世紀頃に消失し、その後、金堂のみが桧皮葺建物で再建されたと考えられている。一方、禁野本町遺跡では、枚方市による調査[3]によって多数の掘立柱建物が確認されており、最も盛行するのが奈良時代後半頃～平安時代中頃である。以上のように禁野本町遺跡は、百済寺と同じ時期の居住域であることから、百済王氏とその一族の屋敷地と考えられているのである。また複数地点で、道路側溝あるいは区画溝と想定できる遺構が確認され､近年では百済寺の中軸線を基準にした方形区画が復元されている。つまり、禁野本町遺跡と百済寺は密接に関連する遺跡であり、都市的な空間が存在したと考えられるようになっているのである。

ところで近年、百済寺遺跡南半の状況が判明しつつある。この部分は百済寺跡との間に西方に開く小規模な谷地形を挟んだ丘陵部で、府立精神医療センターの敷地となっており実態は最近まで不明であった。それが、平成24年度に実施した精神医療センター内の病棟建設に伴う調査、および丘陵南西端にある農園の試掘調査によって、以下の事実が確認されている[4]。

１）柱穴の集中箇所や、方形掘方の掘立柱建物を含む建物２棟が確認され、南北方向の溝２条も確認された。これらは百済寺跡と禁野本町遺跡で想定されている方形区画に近い方向性を示す。

２）一定量の瓦片が出土する。中には瓦細片を敷いた遺構もあり、そこには百済寺の創建瓦を含み、瓦同士が融着し、あるいは焼け歪んだ失敗品が含まれる。

３）農園部は45m×50m程度の広がりをもつ平坦地で、百済寺遺跡と同時期の遺構・遺物が広がる。遺構としては、方形掘りかたの柱穴がやや集中して確認されており、掘立柱建物群等が存在



第３図　周辺の遺跡分布図

した範囲と考えられる。

以上のように、禁野本町遺跡と百済寺遺跡に含まれる百済寺跡と精神医療センター敷地内は、奈良時代後半～平安時代前半の遺構・遺物が確認され、同時期に並存したことがわかった。しかも百済寺の創建瓦を含む多数の瓦片の出土、百済寺跡から禁野本町遺跡で想定される方形区画と類似する方向の溝の検出、掘立柱建物の確認された事などから、三者は密接に関わることも明らかである。なお瓦片には、瓦どうしが融着、あるいは焼け歪んだ失敗品が多数含まれており重要である。百済寺の瓦窯は未確認であり、本遺跡周辺に百済寺に瓦を供給した瓦窯が存在した可能性が考えられる。禁野本町遺跡、百済寺跡と精神医療センター敷地内の遺構群は一連の遺跡として理解する視点が必要になっているのである。

註

１）馬場隆弘「写真に見る北河内軍事施設の戦中・戦後」『いま、よみがえる枚方の20世紀』財団法人 大阪府文化財センター　2011

２）西田敏秀氏（公益財団法人枚方市文化財研究調査会）の教示による。

３）平成23年度までに枚方市による185次の調査があり、主要な調査概要については三宅俊隆がまとめている（「既往の調査概要」『禁野本町遺跡Ⅱ』財団法人枚方市文化財研究調査会　2003）。

４）山田隆一「百済寺遺跡（12002）」、「百済寺遺跡（12052）」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報17』大阪府教育委員会　2013

第３章　平成19年度の調査

平成19年度の調査対象地は、南北に走る都市計画道路渚禁野線と東西方向に通る枚方藤阪線が交差する禁野交差点の西北側の約200㎡でる（Ａ地区と呼称）。また、遺跡範囲の西側Ｂ・Ｃ地区（第２図参照）においても遺跡の広がり、遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を併せて実施した。

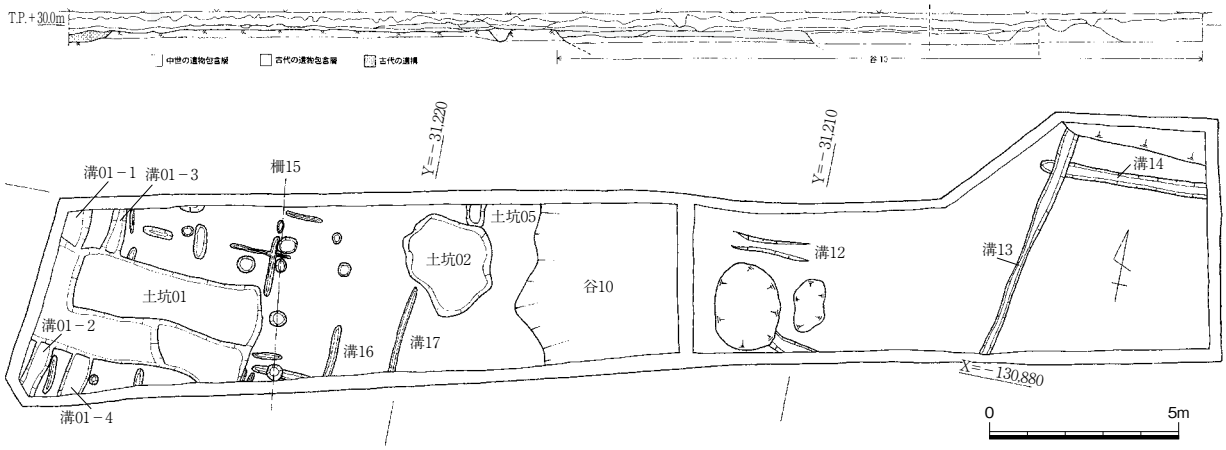
１　層　位（Ａ地区）

土層の堆積状況は、基本的に上から盛土・整地土（旧耕土・床土を含む）、暗茶褐色粘質土（中世～近世の遺物包含）、茶灰色砂質土（奈良～平安時代前期の遺物包含）の４層に分層でき、さらに地点によっては２～３層の細分が可能である。地山（明褐色粘土）までの深さは50cm前後と比較的浅いが、東側は谷地形となるため（安全面の観点から上面を掘削したのみあるが、埋戻し時に重機によりＧ.Ｌ－２ｍまでを確認したが、地山面は検出されなかった）、かなり深くなると思われる。

２　遺構と遺物（Ａ地区）

検出した遺構には、柵・土坑・溝・谷・ピット等がある。

柵15　調査区東側で検出した。南北方向の柵と考えられ、３個以上の柱穴が一直線に並ぶ。柱間距離は1.5m（５尺）の等間隔で、主軸方向はＮ－７°－Ｗである。柱掘形は一辺30～40cmの平面隅丸方形を呈し、深さ25cm前後を測る。埋土はいずれも茶褐色シルトで、中央と南側の柱穴には直径15cmの柱痕が認められた。遺物は出土しなかったが、層順や周辺の調査状況、方位等から奈良時代後期から平安時代前期の柵と考えられる。枚方市民病院建替えに伴う北側の調査で検出された柵ＳＡ02のほぼ延長線上に位置し[1]、一連の同一柵とは考えにくいが、区画に伴うなど何らかの関連性が示唆される。



第４図　平成19年度Ａ地区平面・断面図

土坑01　調査区の西側で検出した平面長方形の土坑である。南北長2.5m×東西長5.5m以上を測り、上から深さ20cm、25cm、30cmの３段に掘り込まれている。埋土は茶灰色砂質シルトで遺物は出土しない。北西側で南北方向の溝01－１・01－３、南西側で溝01－２・01－04が接続し、調査区外に伸びる。それぞれの溝は幅50～60cm、深さ10～20cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は土坑01と同じ茶灰色砂質シルトで、同様に遺物は出土しないが、土坑01もあわせて層順から奈良時代後期から平安時代前期の遺構と考えられる。遺構の性格については明らかでないが、埋土の状況から何らかの水利関係の施設ではないかと考えられる。

土坑02　調査区中央部やや西寄りで検出した。南北長2.6m×東西長2.3mの平面不定形の土坑である。深さ10cmを測り、底面皿状を呈する。埋土は暗茶灰色粘質土で、奈良～平安時代前期の土器片が少量出土する。

土坑05　調査区中央部やや西寄り北端部で検出した平面南北に長い楕円形を呈すると考えられるが、北側は調査区外に続く。南側は土坑02と接する。東西幅50cm、深さ40cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は淡黄灰色粘土で遺物は出土しないが、層順から中世以前と考えられ、周辺の状況から奈良時代後期から平安時代前期の遺構と考えられる。

溝12　調査区中央部やや東寄りで検出した東西方向の溝であるが、比較的浅いことから東・西両端部は削平されていた。総延長2.3mを検出し、幅40～50cm、深さ５cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は淡緑灰色粘質土で、遺物は出土しない。明確な時期は明らかではないが、遺構の重複関係から谷10埋没後に構築されていることから中世以降、層順や埋土の状況から近世の所産と考えたい。

溝13　調査区の東側で検出した南北方向の溝であるが、やや東側に振る。総延長6.4mを検出したが、両端部は調査区外に続く。幅20～40cm、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は淡茶灰色砂質土で、遺物は出土しない。谷10埋没後に構築されていること、層序等を考慮すると近世以降と考えられ、その状況から旧水田に伴う暗渠配水の可能性が高い。溝14と重複し、それより新しい。

溝14　調査区の東側北寄りで検出した東西方向の溝である。総延長4.5mを検出し、西端は袋状に終わり、東側は調査区外に続く。幅30～40cm、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は溝13と同じ淡茶灰色砂質土で、遺物は出土しない。溝13と重複し、それより古いが、状況的に溝13と同じであり、同様の暗渠的性格が強いと考えられる。

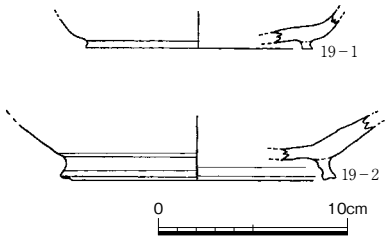
溝16・17　中央部西側南寄りで検出した南北方向の２条の溝である。西側を溝16、東側を溝17とする。総延長溝16で1.4m、溝17で2.4mを検出し、削平のためか、ともに北側は袋状に自然に消滅し、南側は調査区外続く。削平されていなければ、本来は北側に伸びていたものと想定される。幅15～20cm、深さ５cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は灰色粘質シルトで、遺物は出土しない。層順及び周辺の状況から奈良時代後期から平安時代前期の遺構と考えられる。両溝間は1.5m（５尺）を測り、周辺の状況から道路の可能性が考えられ、その場合両溝は道路の側溝と

いうことになろうか。

溝18　調査区中央部東側南寄りで検出した北西―南東方向の溝であるが、北東端は攪乱坑に切られ、南東側は調査区外に続く。状況的には溝12とほぼ同じである。

谷10　遺構ではないが、調査区の中央部で東側に降る谷の肩部を検出した。調査区の東半部全域が谷部にあたる。G.L－２ｍまで掘削したが地山面は検出されなかった。基本的には、砂層が互層に堆積し、上から50cmのところまでは瓦器等の中世のみの遺物が出土するが、それより下層には奈良時代後期から平安時代前期の遺物が出土する。このことから平安時代前期頃までにはある程度埋まり、その後中世頃に完全に埋まったと考えられる。

出土遺物　奈良時代後半から平安時代前期の須恵器・土師器・瓦、中世の瓦器・土師器・陶器、近世以降の陶磁器があるが、大半が小片で出土量も少ない。珍しいところでは、昭和14年の禁野弾薬庫爆発時に飛散した砲弾の破片なども出土している。



第５図　谷10出土遺物実測図

図示（第５図）したもの及び写真撮影（図版28上）したものは、すべて谷10から出土したものである。19－１・19－２は谷10の下層から出土した奈良時代後期から平安時代前期と須恵器杯の底部である。ともに高台が付くが、19－２は極めて大型の杯である。19－３も谷10下層から出土した須恵器甕の体部の破片である。外面にタタキ痕が明瞭に残る。19－４・19－５はやはり谷10下層から出土した瓦で、ともに平瓦の破片である。凸面に縄目痕が明瞭に残る。19－６・19－７は谷10の上層から出土した遺物である。19－６は樟葉型瓦器椀の破片、19－７は瓦質の三足羽釜の脚部分である。ともに13世紀代のものと思われる。

第６図　平成19年度試掘調査（上：Ｂ地区、下：Ｃ地区）

３　試掘調査（Ｂ・Ｃ地区）

遺跡の広がり、遺構・遺物の有無を確認するため平成19年度は試掘調査もあわせて実施した。遺跡に接してＢ（１×５ｍ）・Ｃ（４×２ｍ）地区の２ヶ所のトレンチを設定した。いずれも段丘崖直下にあたり、遺跡が存在る丘陵とは約20ｍの高低差がある。

調査の結果Ｂ・Ｃ地区とも周辺部はかなり削平されうえ、さらにその上に厚い盛土が行われていたことが判明した。遺構・遺物は検出されなかった。

4　小　結

周辺地域の調査で奈良時代から平安時代前期の遺構面の存在が知られていたが、本調査地域（A地区）にも当該期の遺構面が広がることが判明した。また試掘調査の結果、台地直下の低位地域には遺跡の広がりは認められず、遺跡の範囲は当初から考えられていたとおり台地部分のみであることが再確認された。

註

1）公益財団法人枚方市文化財研究調査会『禁野本町遺跡Ⅳ―市立枚方市民病院の新病院整備事業に伴う禁野本町遺跡第172次調査報告―』 2013年

第４章　平成20年度の調査

今年度の調査は、禁野本町２丁目、枚方市民病院の西側、市立保健センターの南側である。道路を挟んだその南側は平成16･17年度に府営住宅建替えで大阪府教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代後期の住居跡などが検出されている（1）。

調査地は、交野台地の西端部分にたたり、西側には段丘崖が接する。対象地は約60m、幅数mの細長い道路敷地で、敷地内には斜面を造成したことによる段差が顕著であり、西側から１区（15×4.5m）、２区（15×4.5m）、３区（20×4.5m）の３本のトレンチをほぼ一直線上に設定した。

1　調査結果

いずれの調査区も地表下0.5～1.0mまで近年の造成に伴う盛土であり、その下からは赤褐色の段丘構成層の地山面が露出する。すでに大幅に削平されていることがうかがえる。遺構・遺物は検出されなかった。

2　小結

調査対象地は、大規模に削平されていたが、すぐ北側の市立保健センター地点では平安時代のまとまった遺構が発見されていることから、本来は当該域にも遺跡の西端にあたる遺構群が存在していたものと思われる。

註

1）大阪府教育委員会『禁野本町遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2006－６　2007年

第５章　平成22年度の調査成果

平成22年度の発掘調査は、平成20年度調査区の東側にあたる。今回の調査地は、現在、枚方市民病院駐車場ならび民間マンション駐車場として土地利用されている（第２図）。発掘調査は平成22年10月28日から12月24日に実施した。調査は、調査範囲を４区に分けて、区ごとに順次、掘削と埋戻しをおこなった。

第１節　地形・層序

調査区の現地表面の標高は、北側では、１区がT.P.＋29.85m、３区がT.P.＋30.10m、１区南側では、T.P.＋29.60mを測る。全体に、南側に向かって低く、東側に向かって高い傾斜面をなす。

基本層序としては、現地表面はアスファルト（①）で覆われ、下層に路盤（②）、盛土（③）が堆積する。地点によっては、砕石（④）、さまざまな現代の攪乱（⑤）がみられる。この下層に包含層の堆積が確認できた（図７・図版９）。

地山面の標高は、１～３区においては低かったために、包含層が残ったとみられる。一方、地山面の標高の高い４区では、現代の開発によって包含層は削平されていた。

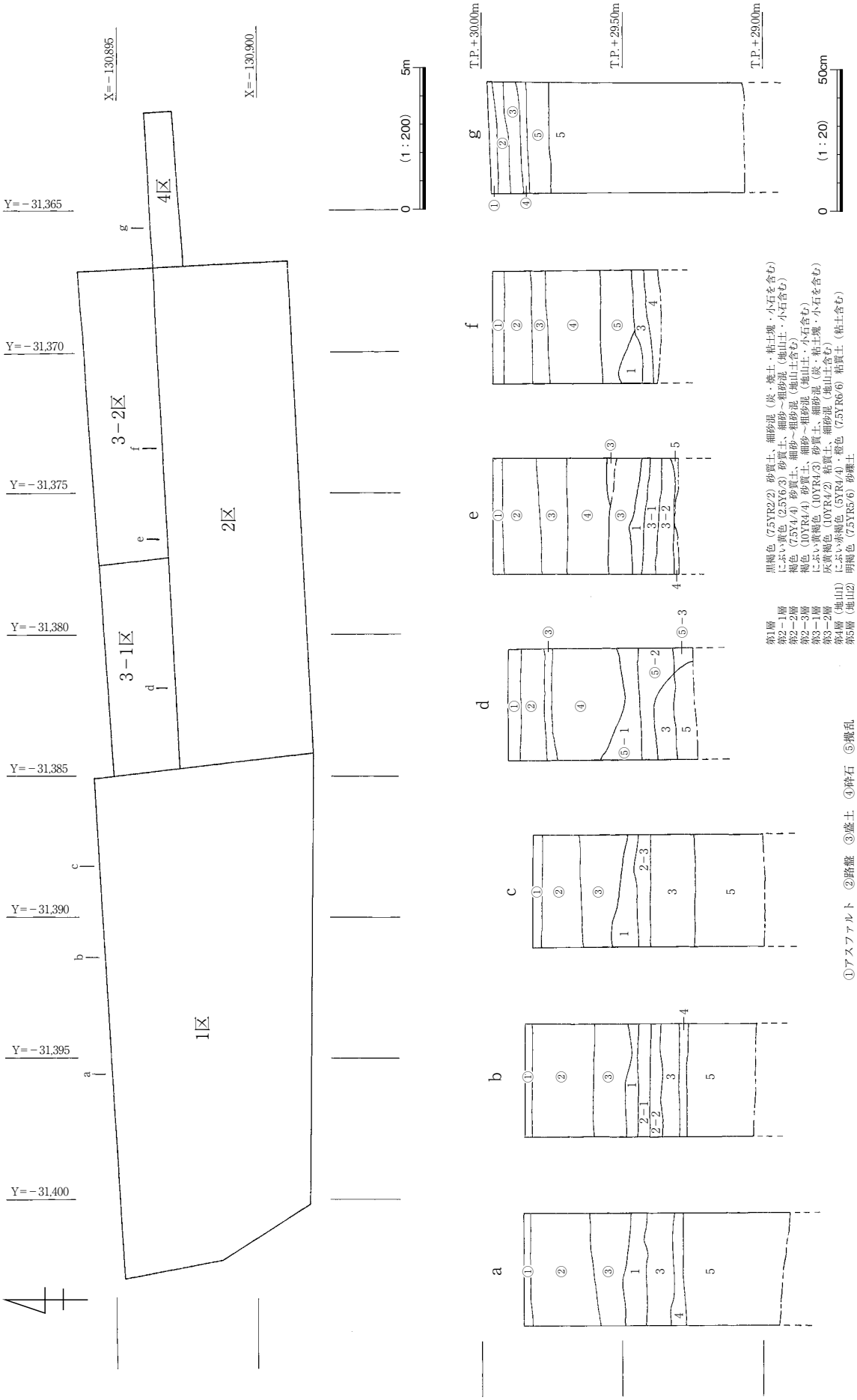
第１層　黒褐色（7.5YR2/2）砂質土に細砂が混じる。炭・焼土・粘土塊・小石を含む。層上面の標高はT.P.＋29.50mで、１区ではG.L.－20～30cmである。層厚はおよそ５～15cmとなる。禁野火薬庫の爆発に伴う焼土を含む整地土層とみられる。当調査区は禁野火薬庫の南に位置するが、整地をおこなう過程で、この地点にまで２次的に焼土層が広がり、一帯に薄く堆積したものと考えられる。

第２層　第２層を３層に分層した。第２－１層はにぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土に細砂～粗砂が混じる。地山土・小石を含む。第２－２層は褐色（7.5Y4/4）砂質土に細砂～粗砂が混じる。地山土を含む。第２－３層は褐色（10YR4/4）砂質土に細砂～粗砂が混じる。地山土・小石を含む。第２層は地山土を用いた整地土層で、層厚は５～10cmで、部分的に堆積が認められる。

第３層　第３層を２層に分層した。第３－１層はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土に細砂が混じる。炭・粘土塊・小石を含む。第３－２層は灰黄褐色（10YR4/2）粘質土に細砂が混じる。地山土を含む。第３層が比較的安定して堆積する１区での層上面の標高はT.P.＋29.40m前後で、G.L.－40～50cmである。層厚は５～15cmを測る。

地山面直上の古代もしくは中世とみられる包含層である。これまでの周辺の発掘調査における土層の調査成果からみると、中世の包含層の可能性が高い。

第４層（地山１）　地山層中の第１層である。にぶい赤褐色（5YR4/4）・橙色（7.5YR6/6）粘質土に粘土を含む。層厚は５～10cmと薄く、この層が本来堆積しないか、もしくは削平されて、第３層直下に第５層が堆積する場合もある。第４・５・６層を含めた地山上面の標高は、１・２区



第７図　平成22年度調査区平面図・北壁土層断面図

でおよそT.P.＋29.30mで、比較的平坦であるが、東に向かって高くなり、３－２区の東端ではT.P.＋29.50mとなる。また、南に向かってゆるやかに低くなり１区南端ではT.P.＋29.20mとなる。１～３区の地山面は斜面地にもかかわらず､水平に削平されている。第３層の堆積以前に、水平面を必要とする土地利用がなされ、古代の遺構はすでに削平されたものと考えられる。

４区では２区から広がる大きな攪乱で、包含層と地山上部が削平されている。本来の地山面は不明だが、東端の地山上面の標高は高く、T.P.＋29.90mである。

第５層（地山２） 地山層中の第２層で、明褐色（7.5YR5/6）砂礫層である。

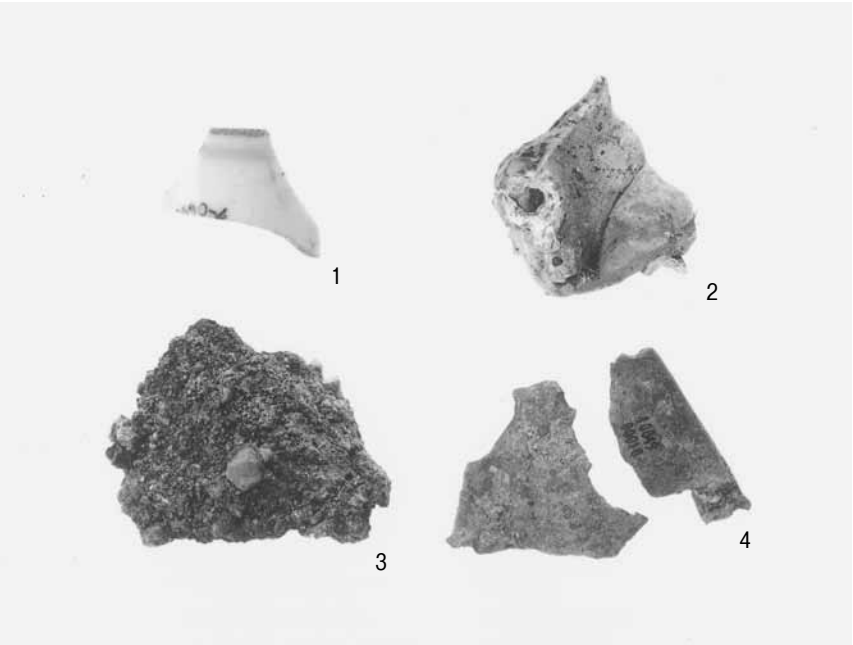
第６層（地山３） 地山層中の第３層で、黄褐色（2.5Y5/4）粘土である。

第２節　遺構と遺物

調査区全域は、削平・盛土・攪乱が顕著である。土層ごとに掘削し、各包含層上面と地山上面にて精査をおこなった。

１区南部の第１層下面にて、東西方向に一列に並ぶ９基の柱穴と、これらの柱穴の１基おきに北側に接して並ぶ４基の柱穴を検出した。一部､柱材の残存するものもみられた。埋土にはビニール・ガラス等を含んでおり、現代の構造物の痕跡である。塀などを固定するための柱穴と考えられる（図版10ａ）。

また、２区西部と一部３－１区に広がる地点で、盛土を切り込んだ状態で、大形石材を廃棄した土坑がみられた（図版10ｂ）。今回の調査区の北西、約150mの地点には、大形石材を組み合わせた横穴式石室をもつ白雉塚古墳が築造されており、この他にも横穴式石室が存在していた可能性があるため、奥田尚先生に石材の鑑定をお願いした。その結果、石材６石のうち、５石が斑糲岩、１石が玄武岩質凝灰岩質点紋片岩の自然石であり、石室の石材の転用というよりは、本来の庭石や石垣の石と考えた方が自然であり、白雉塚古墳の石材についても、天野川流域の粗粒黒雲母花崗岩が使用されたとみられるという御教示を得た。廃棄土坑の埋土には現代の遺物が含まれており、住宅を取り壊し、現在のマンションを建設する際に、使用していた庭石か石垣を駐車場のスペースに埋めたものとみられる。



第８図　近・現代の遺物

遺物は整理箱にして１箱分出土した。第１層からは、禁野火薬庫内の焼土に含まれていたとみられる鉄滓（焼けた鉄のかたまり）（３）・溶けたガラス（２）・歪んだ鉄製品（４）また火薬庫で用いられていた磁器（１）など近・現代の遺物が出土した（第８図）。

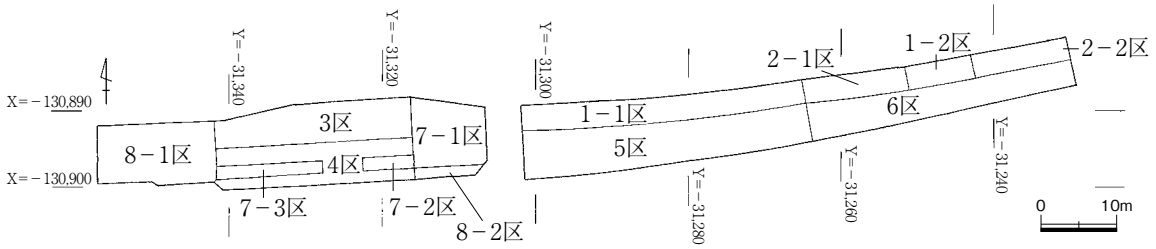
第２・３層、攪乱土層からは古代～近世の遺物が出土した（図版31ｂ）。第２層には、古代の須恵器坏蓋(10)、15世紀の瀬戸系灰釉椀（８）が含まれていた。第３層には古代の須恵器坏（11）・甕（13・14）、平瓦（15）の他、古代とみられる土師器や須恵器の小片が比較的多く出土した。また、調査区から、中世～近世に含まれる土師器片（９）、瀬戸・美濃系陶器片（５）、17世紀初めの唐津焼椀（６）、京・信楽系行平もしくは土瓶（７）、伏見人形かとみられる土製品（12）等が出土した。

第６章　平成23年度の調査成果（東区）

調査地は、平成19年度調査区西端から西に向かい、枚方市民病院前西端に至る長さ129mの区間である。調査にあたっては、常に東西方向に歩道を確保しつつ、また南北方向においては市民病院・民家・店舗・駐車場への出入り可能な状況にすることを考慮して、第９図のように10区分して行っている。つまり、市民病院前より東方は平成23年度に６区分（１－１・２区、２－１・２区、５区、６区）して調査を行い、市民病院前は平成23年度に２区分（３区、４区）と24年度に２区分（７－１～３区、８－１・２区）して実施した。調査区ごとに発掘調査、路面舗装工事とフェンスやり替えをくり返して実施した。アスファルト舗装撤去の後、路盤材・盛土と現代の耕作土・床土は重機で掘削・除去し、それ以下を人力で掘削・調査した。遺物の取り上げは、調査区ごと、国土座標を基準に設定した５m四方の小区画で行った。

なお調査の結果、市民病院前東端から東方35mにかけて、北方に開くと考えられる谷地形が確認された。この谷地形は、枚方市によって想定されている奈良・平安時代の区画の西縁に沿うものであり、事実、谷の東と西では遺構の密度が異なり、性格の差異も予想されるので、以下、煩雑な調査区名を出来る限り避ける理由からも、谷より西方の市民病院前を西区、谷より東方を東区として記述する。調査面積約1,183㎡である。

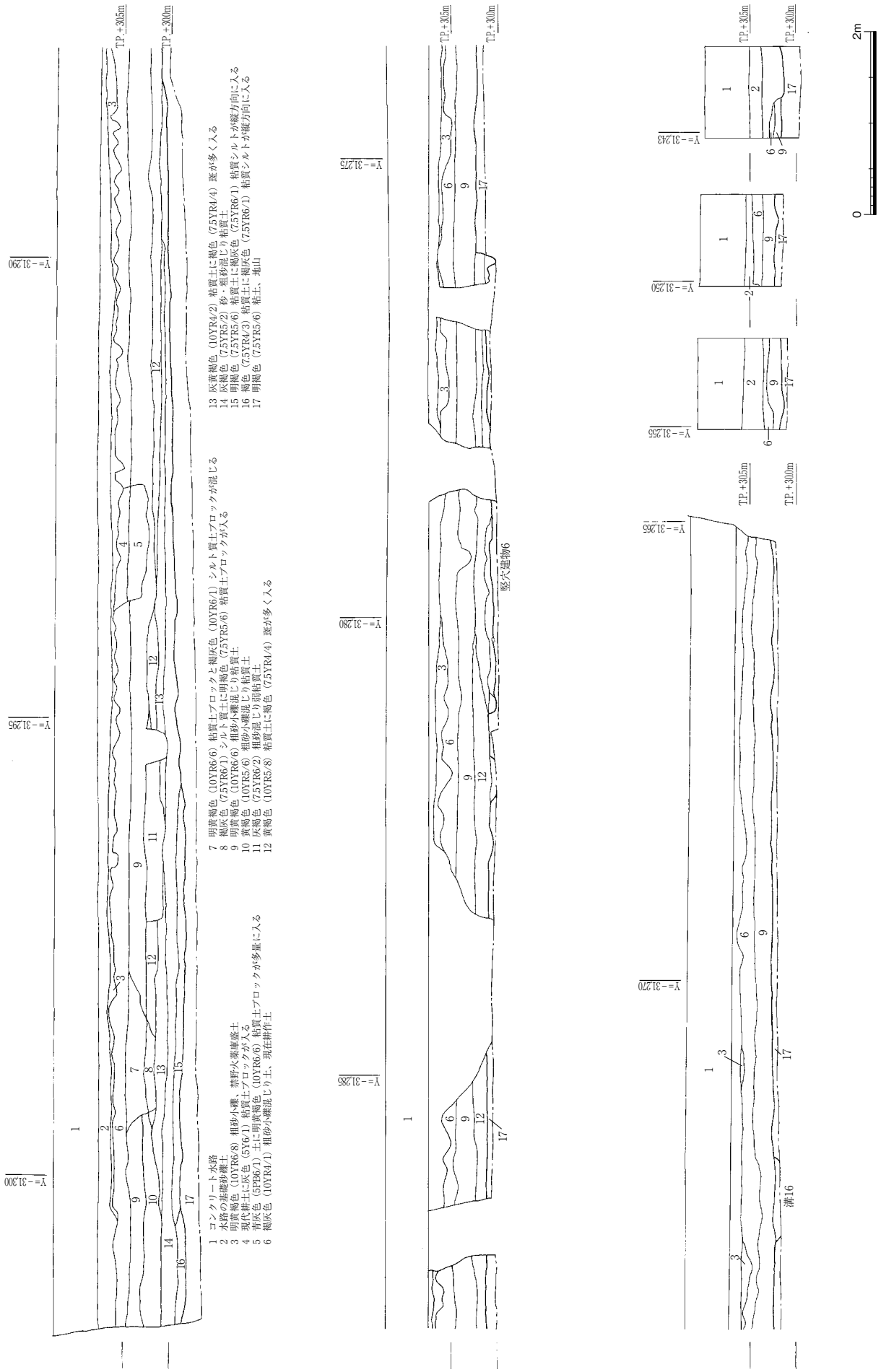
東区は盛土、現代の耕作土・床土を除去すると、包含層、地山粘土層であり、地山粘土層上面が遺構面である。遺構面の標高はT.P.＋30.2～30.3mであるが、X＝－31,280から西に向かって低くなっており、北方に開く谷地形を確認した。なお谷地形の埋土上面では、南北方向の耕作に伴う鋤溝を確認した（第１面）。地山粘土層上面の遺構面では竪穴建物１棟、掘立柱建物７棟を含む柱穴群やピット群、溝、土坑、落込み等を確認した。なお谷地形内では、溝１条と建物と認定し得る柱穴を確認したが、中央の「へ」字状の土坑３は風倒木と考えられ、遺構密度は低い。



第９図　平成23・24年度調査区割り図

第１節　東区の層序（第11図）

調査では、１・２区北壁の土層断面図を作成した。地山は、X＝－31,280程度から西方に向かって漸移的に低くなる。これは、西区と東区の間が最深部となる南北方向の谷地形によるものである。一方X＝－31,280より東方では地山はT.P.30.2m程度、現代耕作土と地山の間は明黄褐色粘質土⑨のみと単純である。よってX＝－31,265以東は柱状図のみを掲載した。



第10図　東区土層断面図

第１層:現代耕作土層（６層)、およびそれ以降の盛り土等（１～３層）　１はコンクリート水路、２の砂礫層はコンクリート水路を設置するための基礎工である。３層の明黄褐色粗砂・小礫層は禁野火薬庫築造時の盛土であり、調査区の全面で薄く確認できた。６層は現代耕作土である。耕作土上面の標高は、西半部でＴ.Ｐ.＋30.6m程度、東半部でＴ.Ｐ.＋30.3～30.5mと東に向かって低くなる。これは東半部の地山が東に向かい、徐々に低くなることに対応する。

第２層:明黄褐色系の粘質土層（９層）　２－１区以西で上面の標高はＴ.Ｐ.＋30.5m～30.4mで、層厚25～15cm、２－１区以東で上面の標高はＴ.Ｐ.＋30.4m～30.25mで、層厚15～８cmである。明黄褐色系を呈する粗砂・小礫の混じる粘質土層であり、調査区の全域で確認できる。詳細に観察すると横方向の薄い酸化層が多条に確認できるので、長年におよぶ耕作の重複層である。今回調査の上面遺構の鋤溝群は、本層を除去して確認したものである。

第３層：谷地形の埋土（11～16層）　Ｘ＝－31,280以西で確認できる。上面の標高はＴ.Ｐ.＋30.2m～30.3mで、西半での最大層厚約50cmである。上位層から黄褐色（11・12層)、灰黄褐色（13層)、灰褐色（14層)、明褐色（15層)、褐色（16層）の範囲を呈する粘質土で、粗砂・小礫が混じる場合が多い。全体に褐色斑が多く入り、14層以下で顕著になる。

第４層：明褐色系の粘土層（17層）　硬く締まる粘土層であり、明褐色系を呈する洪積層である。今回の調査における、古代の遺構検出面であり、本層中からの遺物は出土していない。本層上面の標高は、Ｘ＝－31,280程度からＸ＝－31,244の間が32.0m以上と高く、そこから西方と東方へ徐々に低くなる。

なお、古代の遺構検出面である第４層上面の標高と、後に報告する遺構・遺物との関連を概観すると、次のようなものである。

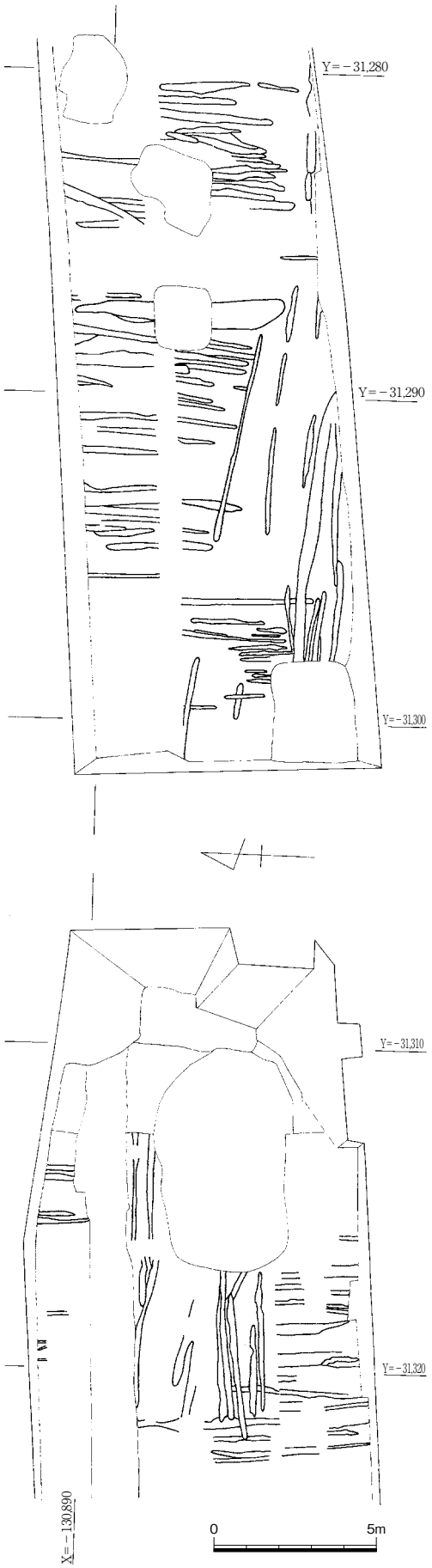
１）平面的に遺構が集中するのは、Ｙ＝－31,280程度から以東であり、そこでの標高はＴ.Ｐ.＋30.20～30.35m程度である。２－２区のＹ＝－31,243程度から東方へ徐々に低くなり、平成19年度調査区での標高はＴ.Ｐ.＋29.8～29.9m程度になり、さらに東方は谷地形になって急激に低くなる。なお図示した２－１区は落込み内のために低く示されている。

２）Ｘ＝－31,280程度から以西で確認した谷地形内での遺構密度は低い。西南端部で建物５等を構成する柱穴群を確認した程度である。谷地形における西方への傾斜は大変ゆるやかである。

第２節　東区の遺構と遺物

第１面の小溝群（第12図）　東区の西部と西区の東部において、谷地形が埋まった後の耕作に伴う小溝群を確認した。第２層である明黄褐色粗砂・小礫混じり粘質土を除去して確認した遺構で、埋土には９層が入る。断面において９層は横方向の薄い酸化層が多条に確認でき、長期間におよぶ耕作のくり返しによって形成されたものである。西区も一連の遺構なので、合わせて報告する。

東区の小溝は、正方位に近い南北溝と東西溝の二種がある。南北溝は密、東西溝は疎に確認で

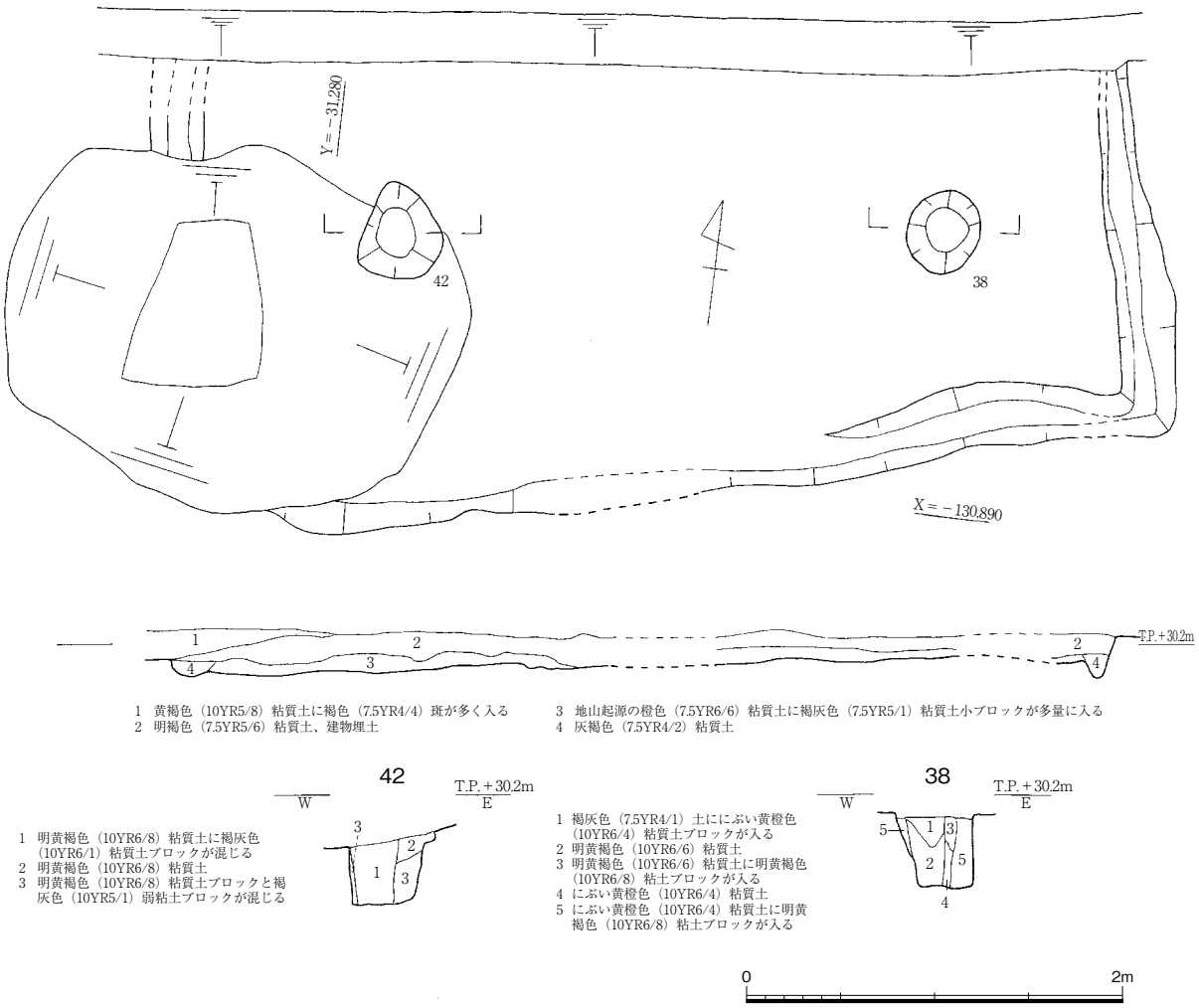


第12図　東・西区上面遺構平面図

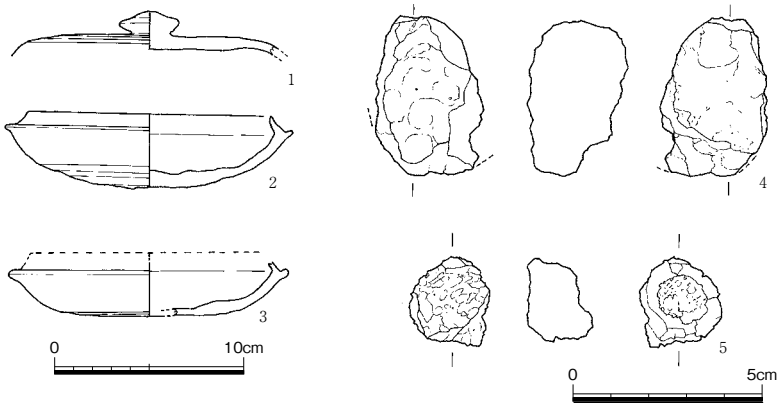
きる。また遺構の重なりから、東西溝の方が新しい。西区の小溝も南北溝と東西溝があり、やはり正方位に近い。東区と同様に東西溝の方が新しい。なお、東区から西区にかけて、やや北西に振る東西溝が確認できる。

竪穴建物６（第13図）　方形を呈する竪穴建物の南半部であり、北半部は調査範囲外である。建物の西半部は谷地形で削平を受け､南西隅部は撹乱坑で損壊する。平面の規模は東西5.3m、主軸は西辺と南辺から復元すると、Ｎ－13°－Ｗ程度である。建物内周囲には周溝を巡らせる。なお建物埋土の土層断面の３層はブロック土を含む貼床であり、周溝はその上面から掘削されている。主柱穴は東西方向に２本を確認した。いずれの主柱穴とも深く掘り込まれており、本来は４本柱と考えられる。柱穴38は直径40×45cmの楕円形掘方で、直径20cm弱の柱痕跡が、柱穴42は直径45～50cm程度の不定形掘方で、直径20cm弱の柱痕跡が確認できる。下層出土の須恵器坏蓋３から、６世紀後半に位置付けておきたい。

遺物（第14図）　埋土から須恵器の坏身、坏蓋と鉄滓が出土した。１は上層から出土した須恵器坏蓋である。扁平な宝珠形のつまみを有するもので、Ⅲ型式第３段階～Ⅳ型式第１段階に位置付けられる。２は上層から出土した須恵器坏身である。立ち上がり外面に、焼成段階に融着した蓋端部が巡る。口径12.8cm、器高3.9cmと大型品であり、Ⅱ型式第４段階程度に位置付けられる。３は下層から出土した須恵器坏蓋である。立ち上がり部分の厚さは２㎜と薄く、端部はすべて欠損する。器高3.4cm、口径は12.5cm前後に復元でき、Ⅱ型式第４～５段階程度に位置付けられる。４は北壁の３層直上から出土した鉄滓である。図左が上面になる椀形鍛冶滓と考えられ、周囲は一部を除いて破損している。上面はやや平坦でなめらか、下面は凹凸がある。ずっしりとした重量感があり、31.9ｇである。５



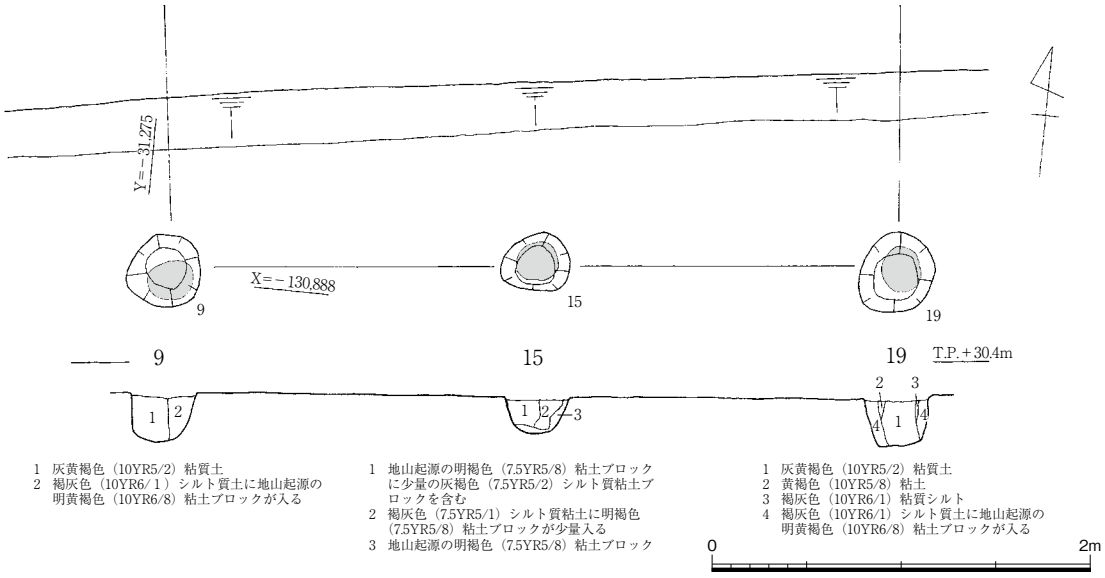
第13図　竪穴建物６平面・断面図



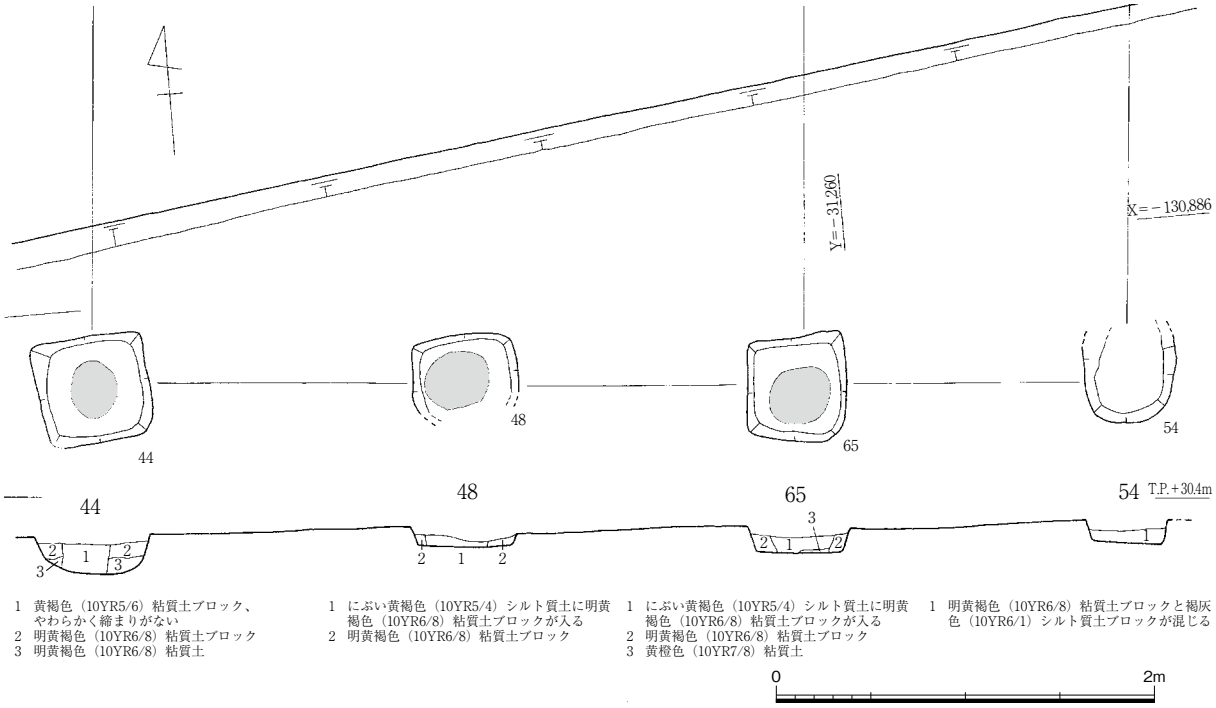
第14図　竪穴建物６出土遺物実測図

は建物西半の埋土２層から出土した鉄滓と考えられる。黒褐色を呈する。図左が上面になり、周囲は破損しておらず、平面は直径２ｃｍ程度の円形である。上面は浅くくぼみ、粗砂が付着する。側面観は深い椀形をしており、表面は滑らかである。気孔が多く入り大変軽く、重量は4.4ｇである。なお写真図版32下段右の椀形鍛冶滓は、竪穴住居付近の９層から出土したものである。破損しておらず、平面形は6.7×4.5cmの楕円形、厚さ2.5cm、重量は66.5ｇである。

掘立柱建物１（第15図）　柱穴９・15・19（西から）からなる掘立柱建物であり、建物の北側は調査区外にのびる。梁行２間（3.9m）の南北棟、あるいは２間×２間の建物である。南北棟建物とすれば主軸はＮ－６°－Ｗ程度である。柱掘方は直径35～40cmの円形であり、柱穴９・19に



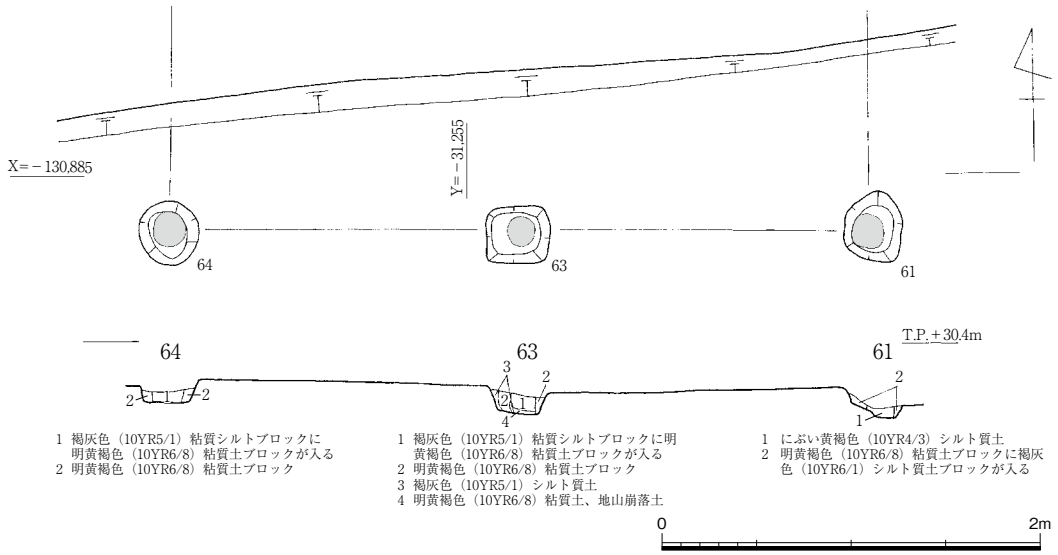
第15図　掘立柱建物１平面・断面図



第16図　掘立柱建物２平面・断面図

おいて直径20cm弱の柱痕跡が確認できる。中央の柱穴15の柱痕跡は明確でないが、柱間寸法は1.95m程度である。時期を示す遺物の出土はない。

掘立柱建物２（第16図）　柱穴44・48・65・54（西から）からなる掘立柱建物であり、建物の北側は調査区外にのびる。桁行３間の東西棟建物の可能性もあるが、柱穴54がやや小型であるので、東面に廂を有する梁行２間（3.8m）の南北棟建物として報告する。柱穴44・48・65が身舎、柱穴54が廂の柱と考えられる。主軸はＮ－4.5°－Ｅ程度である。柱穴44・48・65の柱間寸法が各1.9mであるに対して、柱穴65・54の柱間が1.7m程度である。柱穴44・48・65の柱掘方は平面形が方形で、一辺53～60cmである。柱穴54の柱掘方は隅丸方形で、一辺50cm程度である。柱痕跡は、



第17図　掘立柱建物３平面・断面図

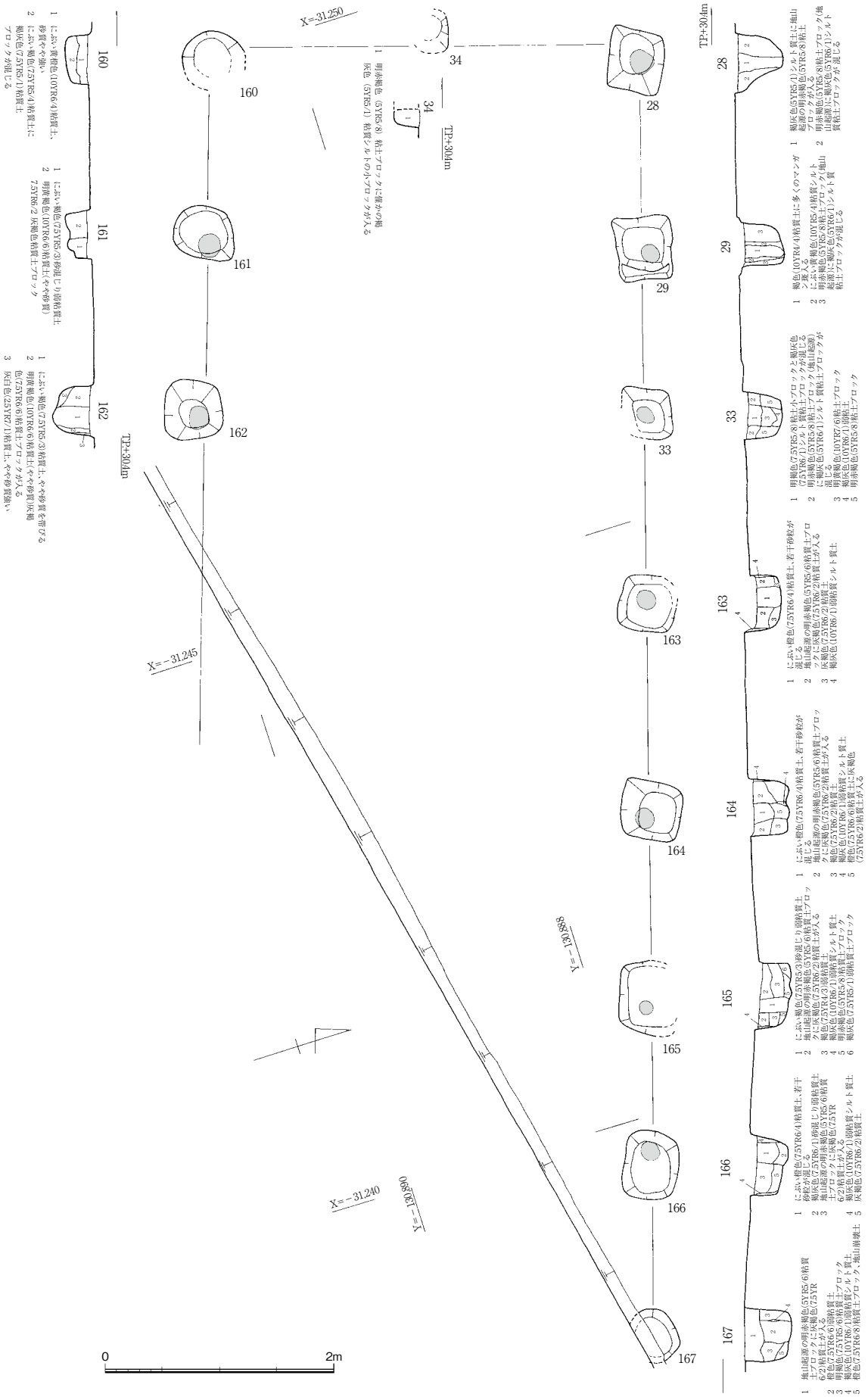
柱穴44・65において直径25cm程度、柱穴48において直径30cm程度である。柱穴54の柱痕跡は明確ではない。時期を示す遺物の出土はない。

掘立柱建物３（第17図）　柱穴64・63・61（西から）からなる掘立柱建物であり、建物の北側は調査区外にのびる。掘立柱建物１と同様に、梁行２間（3.7m）の南北棟、あるいは２間×２間の建物である。南北棟建物とすれば主軸はＮ－０°－Ｗである。柱掘方は柱穴64・61が直径35cm程度の円形、柱穴63が30×35cmの隅丸方形である。柱穴断面で確認できる柱痕跡は直径13cm程度である。柱間は両者ともに1.85mである。時期を示す遺物の出土はない。

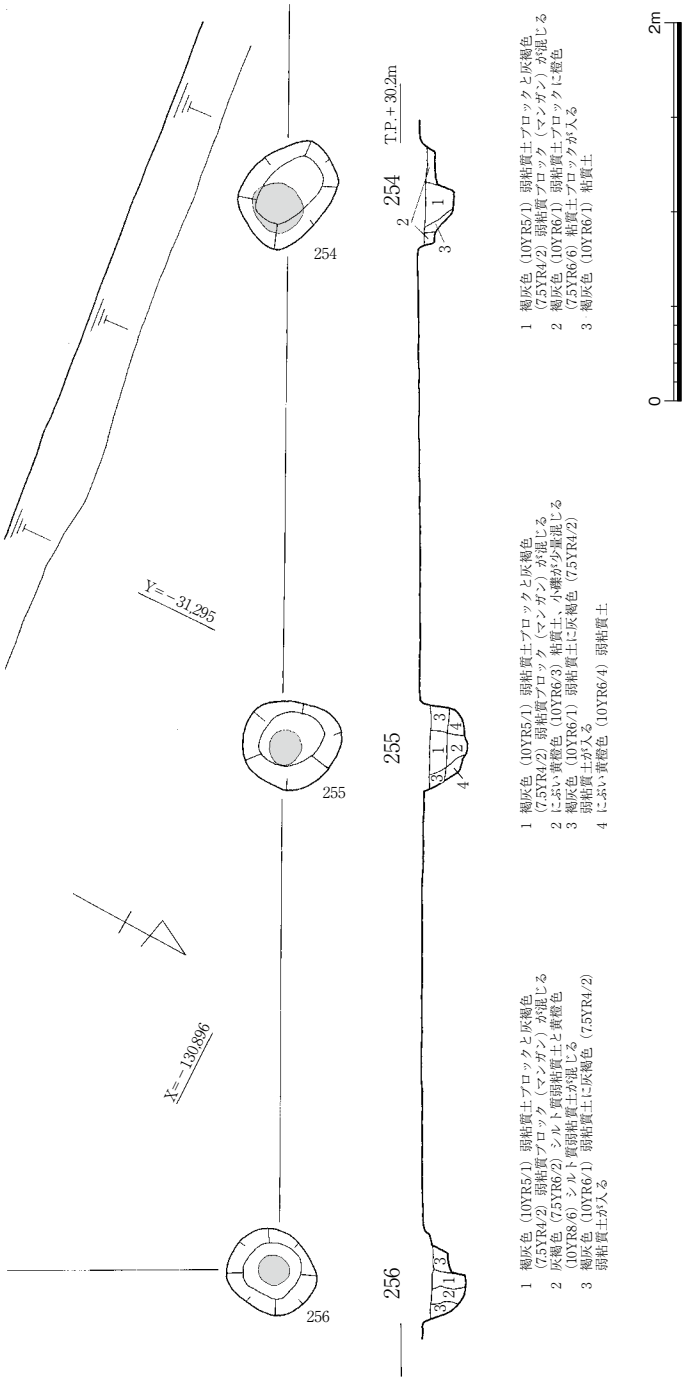
掘立柱建物４（第18図）　側柱でささえる長大な掘立柱建物であり、北東面の側柱は柱穴28・29・33・163・164・165・166・167（西から）、北西面は柱穴34、南西面の側柱は柱穴160・161・162（西から）からなる建物であり、建物の南側は調査区外にのびる。北西－南東に主軸をとる、梁行２間（3.8m）×桁行７間（11.3m）以上の建物である。主軸はＮ－72°－Ｗであり、他の建物とは大きく方位を異にする。

柱掘方は撹乱等で不明瞭なものもあるが、平面形はやや隅丸の正方形～長方形を呈する。正方形を呈する柱掘方は同規模で柱穴33・163・164・162が一辺50ｃｍ程度である。他は長方形を呈するもので、柱穴166が50×60cmである以外は、柱穴28・29・161が45×55cmと同じ規模である。なお北東面側柱の場合、柱穴28→29、柱穴33→163→164のように、隣り合う柱掘方同士の形態・規模が同じであることは､複数の工人が数基ずつの掘削を担当したことに起因すると考えられる。柱穴断面で確認できる柱痕跡は直径15～19cm、柱間は桁行側約1.5m、梁行側約1.9mである。時期を示す遺物の出土はない。

掘立柱建物５（第19図）　東区西端の谷地形内でピットと柱穴群が確認できた。谷地形埋土の最下層には瓦器片が含まれるので、中世以前の遺構である。ピットと柱穴群の規模には大・小があり、柱穴258以外には柱痕跡が確認できる。小型の柱穴259～261の柱掘方は、直径35～20cmの円形で10cm弱の柱痕跡が確認できた。大型の柱穴254～257の柱掘方は、直径45～55cmの楕円形で



第18図　掘立柱建物４平面・断面図



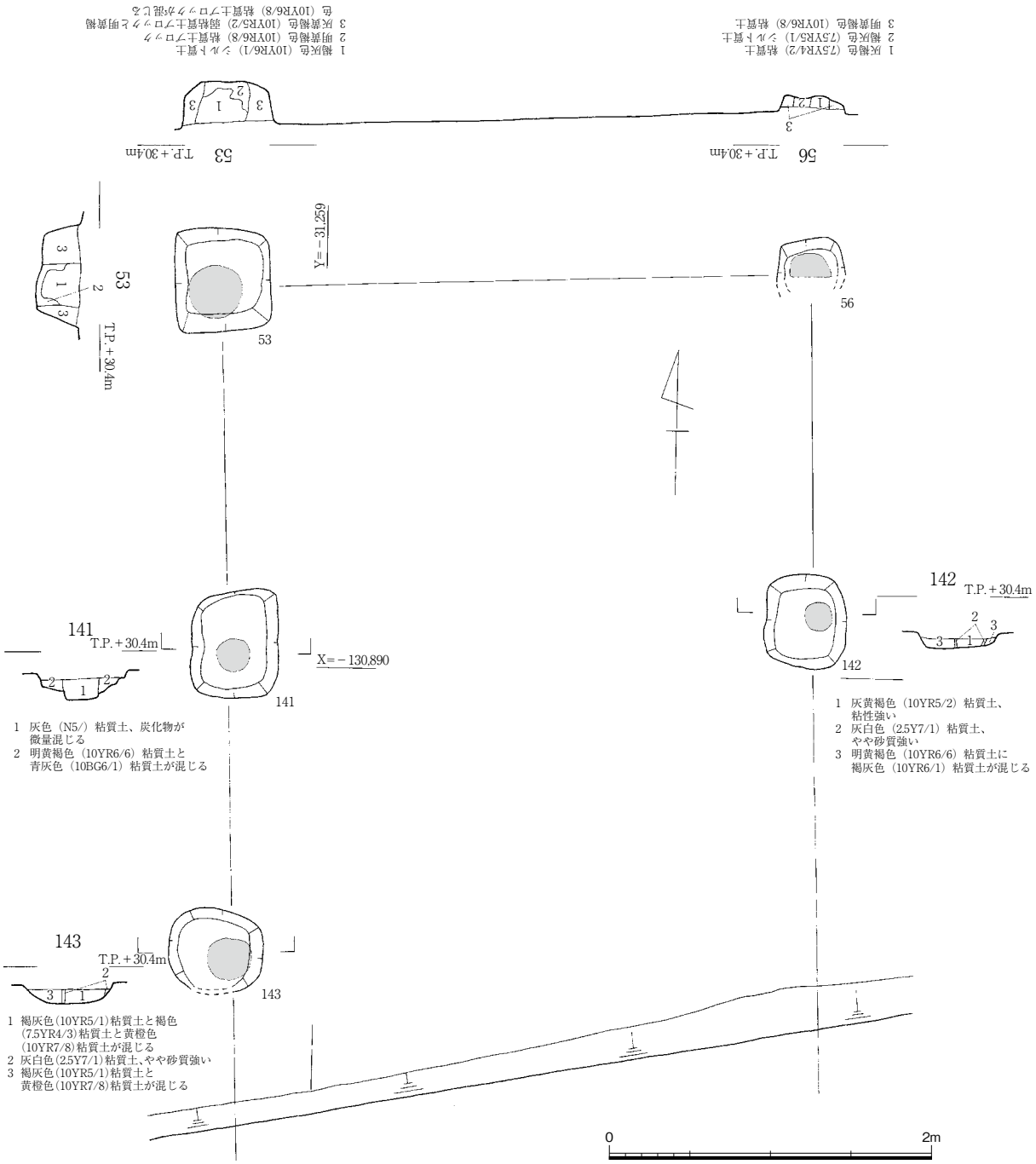
第19図　掘立柱建物５平面・断面図

15～20cm程度の柱痕跡が確認できる。

掘立柱建物５は、柱穴254･255･256（西から）からなるもので、建物の南側は調査区外にのびる。他の掘立柱建物とは主軸方向が異なり、また柱間も長い。しかし柱痕跡の直径が共通し、柱掘方もほぼ同じ深さまで掘り込むなどの共通点から、一棟の建物と想定した。東北－南西に主軸をとる、２間以上の建物である。主軸はＮ－64°－Ｅである。柱間は2.90ｍ、2.85ｍ、柱掘方は標高30.0～30.1ｍまで掘削される。時期を示す遺物の出土はない。

掘立柱建物７（第20図）　柱穴53・141・143と柱穴56・142（北から）からなる掘立柱建物であり、南側は調査区外にのびる。南北に主軸をとる、梁行１間（3.65ｍ）×桁行３間（5.0ｍ）以上の側柱建物である。主軸はＮ－２°－Ｗである。なお、梁側の中間柱と東側柱の北から３本目の柱穴は未確認である。本建物の柱掘方はＴ.Ｐ.30.0～30.1ｍまで掘削されるが、最も深い柱穴53でさえ検出面から25cmしかなく、激しい後世の削平を示しており、梁行側の中間柱は削平で消滅した可能性もある。柱掘方は他の遺構との重複で不明瞭なものもあるが、柱穴53・141・142は、平面形は建物主軸方向に長軸をとる長方形を呈する。柱掘方の規模は50～58×60～65cmであり、柱穴断面で確認できる柱痕跡は柱穴53・56が直径23～25cm程度、柱穴141・142が20cm程度である。桁行側の柱間寸法は2.2ｍ弱である。柱穴53と141から時期の推定できる遺物が出土しており、６世紀末から７世紀初頭の可能性がある。

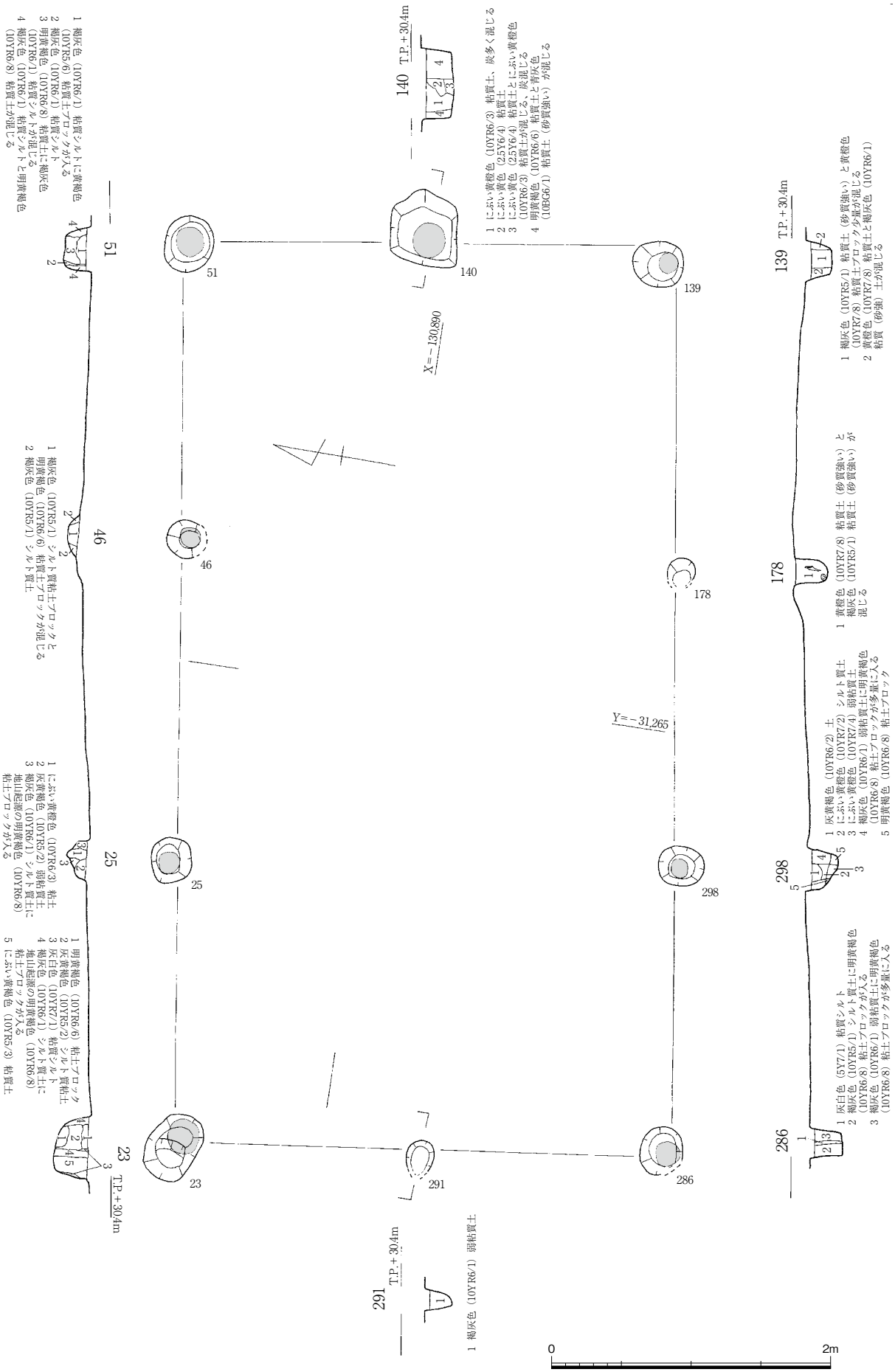
遺物（第22図）　６が柱穴53から出土した須恵器坏蓋、７・８・９が柱穴141から出土した遺物で、前二者が須恵器坏身、後者が土師器甕である。６は口径14.7cmに復元したが、3.5cmの細片のため正確でない。大型品で端部は丸い。７は口径13.5cm、８は口径13.5cmに復元したが、3.6cm



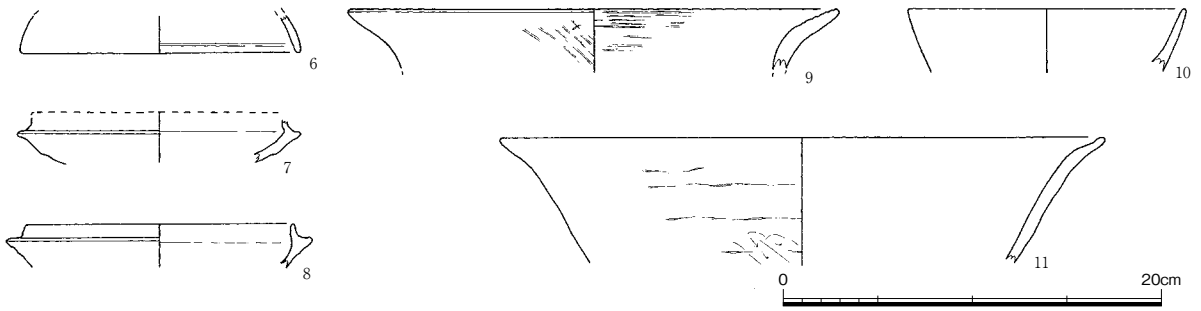
第20図　掘立柱建物７平面・断面図

と2.7cmの細片のため正確でないものの、大型品の細片である。３点の須恵器は、Ⅱ型式第５段階程度に位置付けられる。９は口径25.7cmに復元できる土師器甕の大型品である。口縁端部は丸い。内面横方向、外面左斜上方へのハケ目が残る。

掘立柱建物８（第21図）　４調査区に分割され、最終的に図面上で確認した建物である。桁行側が柱穴23・25・46・51と柱穴286・298・178・139（西から）、梁行側が柱穴291・140からなる。東西に主軸をとり、梁行２間（3.5m）×桁行３間（6.5m）、柱間寸法は梁行側1.75m、桁行側2.2mである。床面積は約22.8㎡、主軸はＮ－81°－Ｅである。柱掘方は、小型で円形が主体であるが、



第21図　掘立柱建物８平面・断面図



第22図　掘立柱建物７・８出土遺物実測図

やや大型のものもある。また柱穴断面で確認できる柱痕跡は直径13～22cmで、ばらつきが大きい。

遺物（第22図）　10は柱穴286から出土した須恵器坏身であり、口径14.5cmである。Ⅲ型式以降に位置付けられる。11は柱穴178から出土した土師器鉢であり、口径31.7cmである。口縁端部内面は摩滅するが、本来は丸く仕上げるようである。体部外面は接合痕跡が残りナデ仕上げであり、下端にヘラ削りが残る。外面下半に煤が付着する。

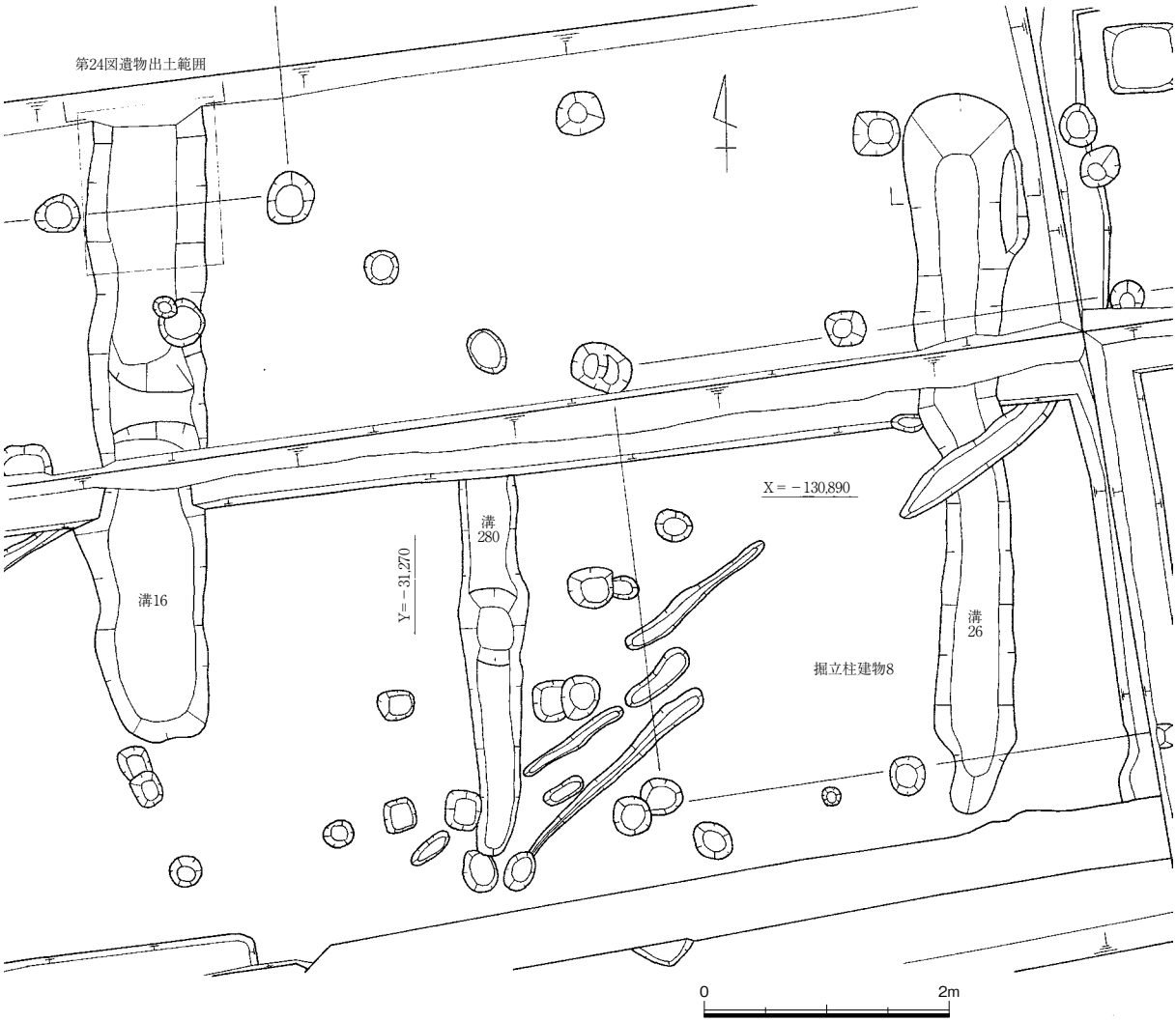
溝16・26（第23・24図）　平行して掘削された南北方向の溝２条で、溝の間に幅6.0m程度の平坦面がある。両者は後に記載するように、一連の遺構である。

溝16は長さ5.1mを確認し、南端は途切れ、北側は調査区外にのびる。幅は0.9～1.0mである。主軸方向はＮ－２°－Ｗ。北壁部分での断面形は、深さ32cmの「Ｕ」字状に掘り込む。中央部を渡り土手状に掘り残しており、それより北の溝底は標高Ｔ.Ｐ.＋29.9m、南の溝底は標高Ｔ.Ｐ.＋30.1mと凹凸がある。埋土は３層に分層できる。下層は地山起源の粘質土ブロックからなる地山崩落土であり、上層はブロック土からなる人為的な埋立て土である。上層の北壁から1.2mの範囲で、多数の須恵器・土師器片が出土した。溝の東側に集中しており、土器群は東側から投棄されたと考えられる。なお後出するピット17・18は、上面遺構の埋土と同じ褐灰色シルト質土であることから中世以降の遺構である。

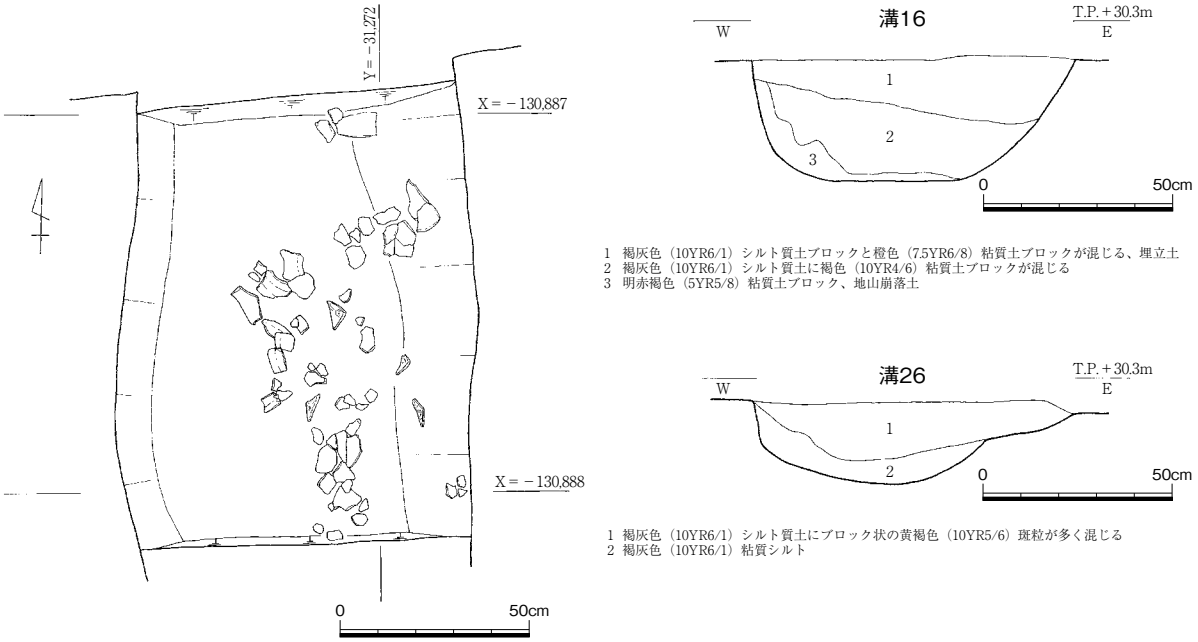
溝26は長さ5.9mを確認し、南・北端ともに途切れる。幅は北半で1.0m程度、南半で0.5～0.7mと細くなる。主軸方向は溝26と全く同じで、Ｎ－２°－Ｗである。北端部分で、やや角度をつけて掘り込み、溝16のように土手状に掘り残すこともなく、南端部へ徐々に浅くなって終わる。溝底の標高は、北部Ｔ.Ｐ.＋30.02m、中央部はＴ.Ｐ.＋30.13m、南部Ｔ.Ｐ.＋30.20mである。なお、断面形状は西側が角度をもち、東側はゆるやかに掘削されている。埋土は２層に分層できる。上層はブロック土を含む人為的な埋立て土と考えられる。

溝16・26は、（財）枚方市文化財研究調査会による北側隣接地での禁野本町遺跡第172次調査で確認された２条の溝の南側延長部である。調査会では西溝をＳＤ６、東溝をＳＤ５としている。主軸方位が同じ、平行して掘削され溝の間に6.0～6.5m程度の平坦面がある、溝底に凹凸がある、断続的で途切れる等の共通点がある。

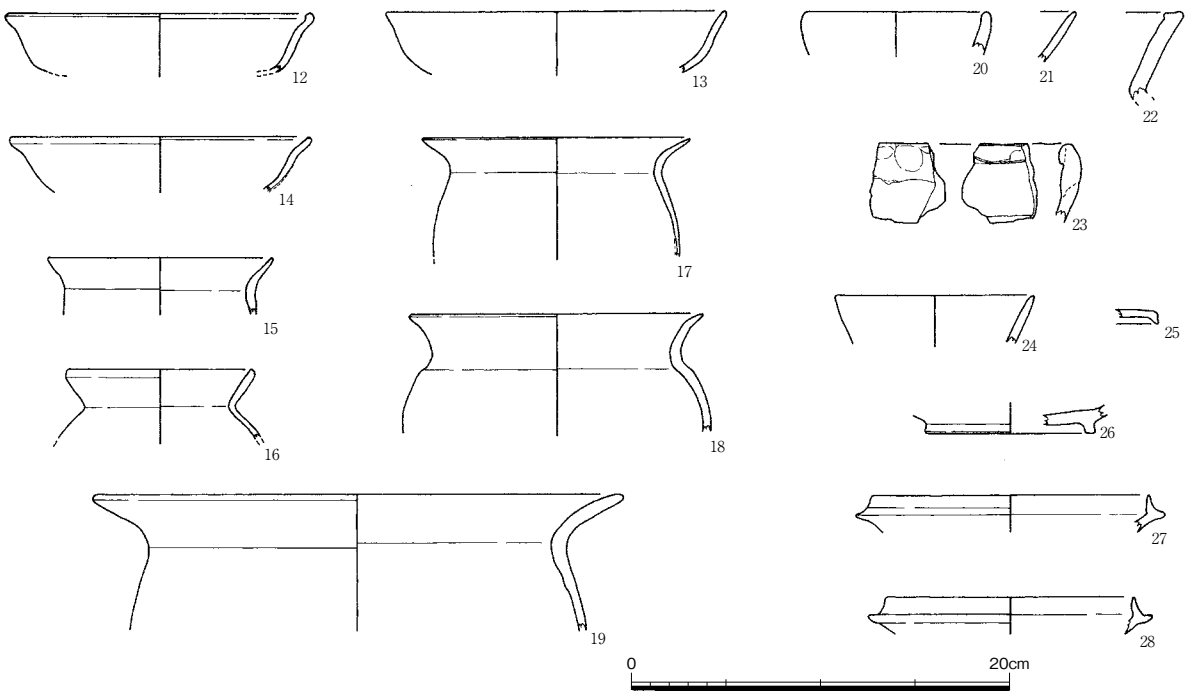
遺物（第25図）　12～19、22・23が溝16の北側1.2mの範囲の上層でまとまって出土した須恵器・



第23図　溝16・26平面図



第24図　溝16遺物出土状況実測図、溝16・26断面図



第25図　溝16・26出土遺物実測図

土師器、20・21が中層出土の須恵器である。

12～14は土師器坏である。いずれも橙色(5YR7/8)を呈し、赤色斑粒を含む精良な胎土である。12は口径16.0cm、器高3.4cmである。口縁端部は内面に丸くおさめる。外面はヨコナデ、内面は摩滅のため調整不明。13は口径17.8cm、器高４cm程度に復元できる。内外面ともに摩滅のため調整不明。14は口径15.7cm、口縁端部は内面に丸くおさめる。内外面ともに表面剥離が著しい。外面はヨコナデ仕上げである。

15～19は土師器甕である。15は口径11.8cmの小型品で、摩滅が著しい。橙色(5YR6/8)を呈し、微細～３㎜の粗砂粒を含む通常胎土である。体部外面にハケ目が確認できる。16は口径9.7cmの小型品で、内外面とも摩滅のため調整不明。橙色(5YR6/6)を呈し、微細～２㎜の砂粒を含む通常胎土である。17は口径14.2cmの中型品で、内外面とも摩滅のため調整不明。橙色(5YR7/6)を呈し、微細～３㎜の砂粒を含む通常胎土である。18は口径15.5cmの中型品である。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。外面屈曲部に強いヨコナデを施し、頸胴部界に稜が入る。明赤褐色(5YR5/8)を呈し、微細な砂粒を含む精良な胎土である。19は口径28.0cmの大型品で、内外面とも摩滅のため調整不明。口縁端部に平坦面を持つ。灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、微細～３㎜の砂粒を多量に含む通常の胎土である。

22は須恵器大型甕の口縁部と考えられる。23は土師器の製塩土器である。口縁部端部を内側に折り返す。外面に接合痕跡を残し、調整は不明。被熱しており、製塩土器特有の橙色(5YR7/6)を呈する。胎土には0.5～3.0㎜の長石、石英を多量に含む。

20は須恵器の口縁部であり、提瓶あるいは平瓶の可能性がある。口縁部は内湾し、口径9.5cmの大型品である。21は須恵器坏の口縁部であり、時期の詳細は不明。

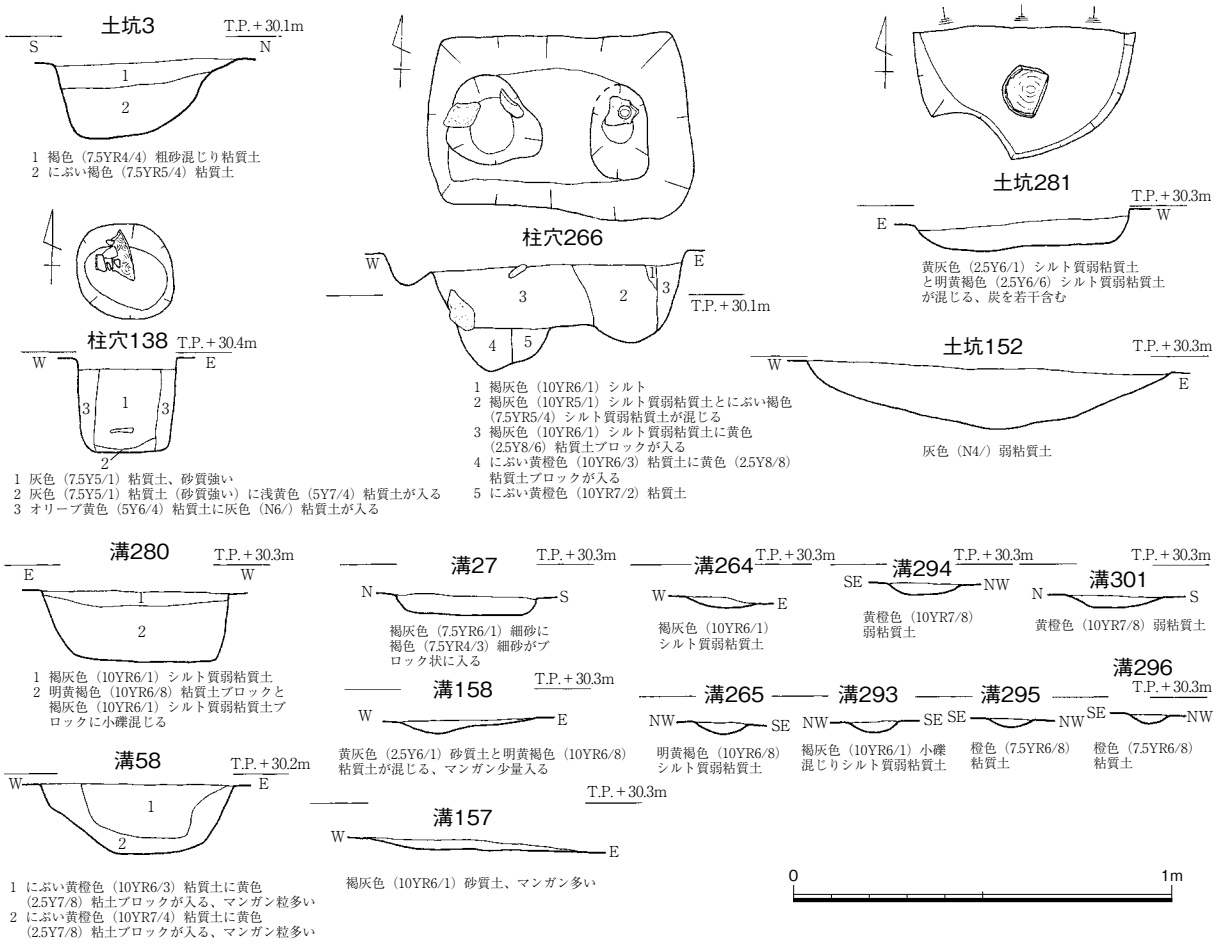
24～28は溝26から出土した須恵器である。24は須恵器坏であり、口径10.5cmである。25は須恵器坏蓋の端部であり、２cmの小片である。26は須恵器坏である。以上の３点は、Ⅳ形式段階に位置付けられ、溝26の時期を示すと考えられる。27は口径14.6cmに復元したが、4.0cmの細片のため正確でない。大型品で端部は尖らせる。28は口径13.0cmに復元したが、3.8cmの細片のため正確でない。やはり大型品で端部は尖らせる。以上の２点の須恵器は、Ⅱ型式第５段階程度に位置付けられ、混入品であろう。

その他の遺構（第10・26図） 上記以外で、その他の土坑、柱穴、溝の遺構、遺物を報告する。

土坑３は、谷地形内のＹ＝－31,290で確認した不定形な土坑である。断面形は北側が緩やか、南側がいくぶん急な傾きを示す。底面は凸凹で、南に向かって浅くなる。いわゆる「風倒木」と考えられる。時期を示す遺物の出土はない。

土坑152は、Ｙ＝－31,258で確認した土坑である。平面形態は卵形を呈する土坑で、規模は長辺1.15m×短辺80cm、断面形は南西にテラス状平坦面を有する擂鉢状で深さ15cmである。埋土は中世特有の灰色弱粘質土であり、瓦質土器擂鉢（27図34）が出土した。

土坑281は、Ｙ＝－31,270で確認した土坑である。北半は埋設管によって破壊されている。平面形態はいくぶん隅丸方形を呈する土坑で、規模は一辺58cm、深さ10cmである。柱痕は未確認である。検出段階に土坑中央部で土師器片が確認でき、その下で須恵器坏身（27図31）が底から



第26図　東区その他遺構平面・断面図

１cm程度浮いた状況で出土した。須恵器はⅡ型式第４段階である。

柱穴138は、Ｙ＝－31,263で確認した単独の柱穴である。直径25cm、深さ25cmの円形掘方に直径16cmの柱痕が確認された。柱痕埋土から土師器皿（27図30）が出土した。

柱穴266は、Ｙ＝－31,276で確認した単独の柱穴である。当初は70×47cmの長方形掘方に20cmの柱痕が確認され、断面観察によって建て替えられたことが確認できた。新しい段階の柱痕埋土から土師器高坏、柱掘方から石器２点（27図37・38）が出土した。土師器高坏は、図化し得ていないが、赤褐色を呈し、面取り脚柱部に浅い皿状坏の付くタイプである。

溝27は、Ｙ＝－31,251～－31,242で確認した斜行する溝である。主軸はＮ－88°－Ｗ。規模は幅35～25cm、長さ９ｍ分を確認した。断面の形状は、図示したように角度を持って掘り込む部分もあるが、多くは深さ５cm弱の浅い皿形である。底面は平坦で、その標高は西部Ｔ.Ｐ.＋30.17m、東部Ｔ.Ｐ.＋30.12mであり、西から東に向かって低くなる。埋土は褐灰色細砂で、褐色細砂の小ブロックを含む。時期を示す遺物の出土はない。西区溝229と同じ方向を示す。

溝50は、Ｙ＝－31,263～－31,259で確認した斜行する溝である。主軸はＮ－48.5°－Ｅ。重複する掘立柱建物２を構成する柱穴65、掘立柱建物８を構成する柱穴51よりも先行する。断面の形状は、深さ５cm程度の浅い皿形である。なおＹ＝－31,270～－31,264の間に、同様の方向性を示す溝301・293～296等の溝群が確認できる。図示したように、いずれの断面の形状も深さ２～５cm程度の浅い皿形である。重複関係から、溝301は溝26より新しく、溝50も同じ方向性を示すので、やはり溝26より新しいと考えておきたい。時期を示す遺物の出土はない。

溝58は、Ｙ＝－31,253で確認した南北溝である。北端は「コ」字状に途切れており、南側は調査区外にのびる。主軸はＮ－５°－Ｗ。重複する掘立柱建物３を構成する柱穴61よりも新しい。断面図から確認できるように、東はやや角度を持ち、西はやや緩やかな傾斜に掘削する。埋土は２層からなり、いずれも粘土ブロックを含むもので、埋立て土の可能性がある。溝16・26とほぼ平行する。時期を示す遺物の出土はない。

溝157は、Ｙ＝－31,252で確認した南北溝である。主軸はＮ－２°－Ｗ。規模は残りの良い南方で幅45cm、長さは4.7m分を確認した。断面の形状は浅い皿形である。南方は途切れ、北方は徐々に消失する。時期を示す遺物の出土はない。

溝158は、Ｙ＝－31,251で確認した溝である。平面形は「Ｙ」字状に分岐する。断面の形状は非常に浅い皿形である。掘立柱建物４の柱穴160との重複関係は未確認である。時期を示す遺物の出土はない。

溝264は、Ｙ＝－31,280～－31,287で確認した斜行する溝である。調査区の北壁と南壁部で溝の延長部分が確認できるので、途切れつつのびると考える。主軸はＮ－27°－Ｅ。中央部が撹乱によって破壊されている。皿状に浅くくぼみ、埋土は褐灰色シルト質弱粘質土である。出土した瓦器皿（27図33）から13世紀程度に位置付けておきたい。

溝280は、Ｙ＝－31,269で確認した南北溝である。主軸はＮ－２°－Ｗで、溝16･26と平行する。

１－１区と５区の調査区境で途切れる溝で、長さ3.5m程度である。埋土の掘削後に、溝のほぼ中央部で土坑が確認できた。溝断面は浅い皿状である。断面図は土坑部分で、１が溝断面、２が土坑断面である。時期を示す遺物の出土はない。

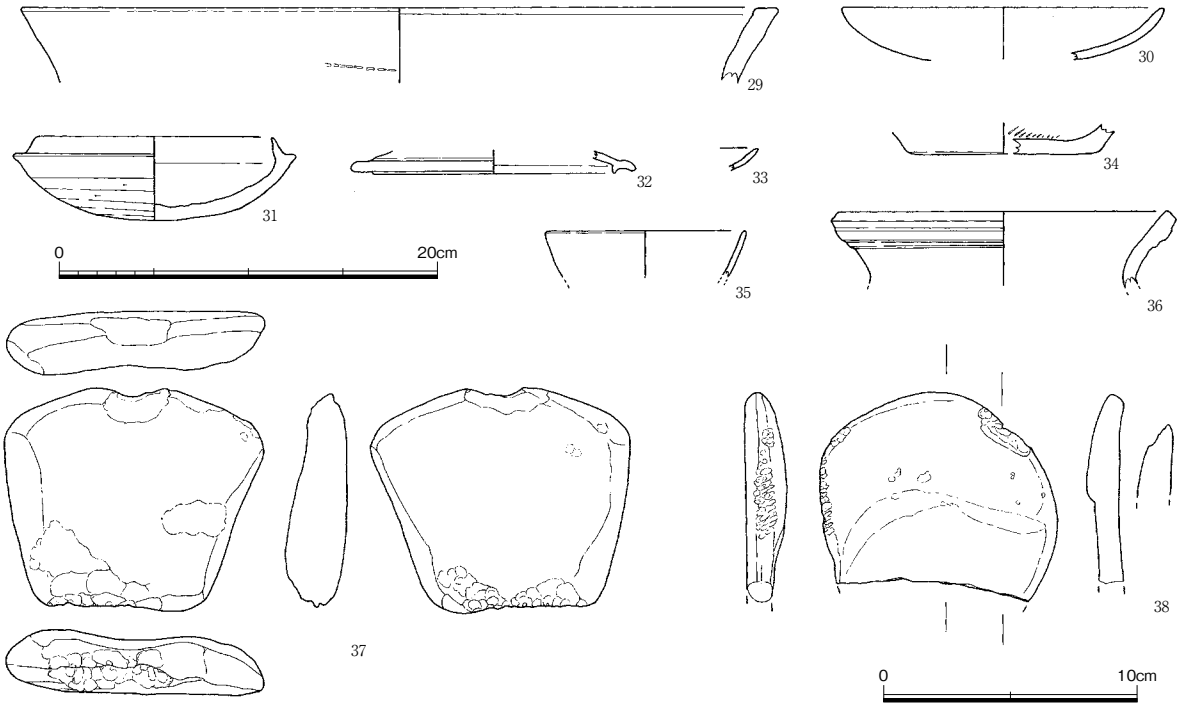
その他遺構出土遺物（第27図）　29は柱穴285出土の大型須恵器甕である。口径40.0cmに復元したが、6.0cmの細片であり、不正確である。内外面回転ナデ。外面下端に板状工具の先端の当たった痕跡がある。Ⅳ形式後半に位置付けられる。30は柱穴138出土の土師器皿である。口径16.8cm程度。橙色(5YR6/8)を呈し、若干の２㎜程度の砂粒を含む、精良な胎土である。内外面は摩滅のため調整不明。31は柱穴281出土の須恵器坏身である。口縁端部が鋸歯状に破損する。口径12.5cm、器高4.4cmであり、Ⅱ型式第４段階に位置付けられる。32は柱穴279出土の須恵器坏蓋である。口径12.7cmに復元したが、3.0cmの細片でありやや不正確である。Ⅲ型式後半に位置付けられる。

33は溝264出土の瓦器皿である。細片のため断面のみ図示したが、口径は10～12cmに収まる。口縁端部外面のヨコナデ幅は0.9cmである。13世紀程度に位置付けられる。

34は土坑152出土の瓦質土器擂鉢である。底径10.0cm。内面体部下端にクシ描きによるすり目（幅3.0cm、10条）のが残存する。内外面とも摩滅のため調整不明。

35は６区の撹乱を受けた地山面直上出土の波佐見窯の椀である。口径10.5cm。18世紀第三四半期に位置付けられる。36は６区の地山面直上出土の須恵器であり甕と考えられる。口径17.3cm。内外面回転ナデ。

37・38は柱穴266出土の石器である。37は平面五角形で扁平な石材を利用した石錘と考えられる。図面の上の側縁中央部に抉りがあり、抉り表面は摩滅する。また下縁辺には、両面からの敲



第27図　東区その他遺構出土遺物実測図

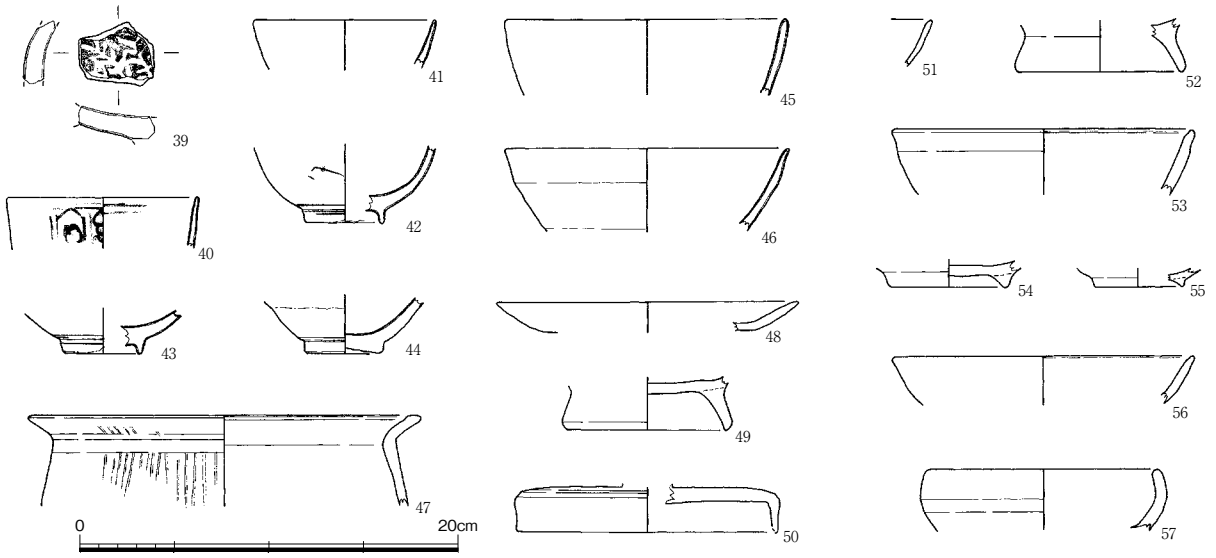
打痕があり、若干摩滅している。花崗岩、重量0.28kg。38は扁平な石材を利用した敲石と考えられる。図面の左側縁に細かな敲打痕がある。また右上側縁に裏面からの敲打による剥離がある。砂岩と考えられ、重量0.16kg。

東区包含層出土遺物（第28図）　５区西部の明黄褐色土（第２層）から、陶磁器がまとまって出土している。また、51は上面鋤溝の埋土から出土した瓦器、56は谷地形埋土の最下層からの出土した土師器である。

39～46は、５区西側15mの範囲の包含層である明黄褐色土（第２層）からの出土である。39は鼠志野の向付であり、見込みは野草文である。段面観察により、野草文は施釉前に化粧掛けした鬼板に彫られた文様であることがわかる。裏面の剥離は、脚のはがれた痕跡であろう。17世紀初頭に位置付けられる。40は中国景徳鎮窯の青花碗である。口径10cm強。16世紀後半に位置付けられる。41は唐津のハケ目染付けである。口径9.5cm。18世紀に位置付けられる。

42・43は波佐見窯の椀である。42は高台径4.0cm、体部１／５程の破片であり口縁部を欠く。43は高台径4.0cm、体部１／２の破片であり口縁部を欠く。いずれも18世紀第三四半期に位置付けられる。44は瀬戸美濃の鉄釉天目茶碗である。高台径4.2cm。体部１／２の破片であり口縁部を欠く。外面下半から高台裏に鬼板がかかる。16世紀前半に位置付けられる。45は中国龍泉窯の無文の青磁碗である。口径14.7cmに復元したが、4.5cm程度の破片でありやや不正確。15世紀後半に位置付けられる。46は瀬戸の灰釉碗であり、青磁碗をまねたと考えられる。口径14.8cmに復元したが、４cm程度の破片でありやや不正確。15世紀に位置付けられる。

47～50は明黄褐色土（第２層）からの出土である。47は土師器甕である。口径20.8cm。口縁端部を内側に肥厚させ、丸みのある三角形を呈する。外面は口縁部から体部が粗いタテ方向ハケ目の後、屈曲部に強いヨコナデを施す。体部内面ナデ仕上げである。48と49は土師器台付皿である。接合箇所のない口縁と台部の破片であるが、共に0.5～2.0㎜の石英、長石とチャートを含む



第28図　東区包含層出土遺物実測図

胎土で、灰白色(10YR8/2)を呈するので、同一個体と考え図上復元した。口径16.0cm、脚台径8.5cm、器高4.2cm。口縁端部は尖らせ、皿部に厚く内湾する台部を貼り付ける。皿部は丁寧なナデ、台部は摩滅のため調整不明。10世紀後半に位置付けられる。50は須恵器蓋である。短頸壷の蓋で、つまみ部は欠損する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し特異である。口径13.8cm。外面回転ケズリは屈曲端部にまで施す。口縁部から内面外周２cmの範囲が回転ナデ、中央部不定方向ナデ。Ⅳ型式に位置付けられる。

51は上面鋤溝の埋土から出土した瓦器碗の細片である。摩滅のため調整不明。

52～55は谷地形埋土の第３層からの出土遺物である。52は土師器台付皿である。胎土は0.5～2.0㎜の石英、長石と微細なチャートを含み、色調は灰白色(7.5YR8/1)を呈する。台径8.6cmである。ナデ仕上げ。10世紀後半に位置付けられる。53～55は瓦器碗である。53は口径15.7cm。口縁端部内面に幅１㎜の沈線が巡る。器壁は体部で６㎜と厚い。調整は、若干の摩滅のため単位は不明瞭だが、内外面ヨコ方向ヘラ磨きである。楠葉型の古相であり、11世紀末～12世紀初頭に位置付けられる。54は断面三角形の厚くしっかりした高台であり、高台径6.0cm。内外面摩滅のため調整不明。やはり11世紀末～12世紀初頭に位置付けられよう。55は高台径4.7cm。内外面摩滅のため調整不明。13世紀前半に位置付けられる。

56は調査区北西隅で谷地形埋土の最下層から出土した土師器坏である。口径15.8cm。色調は明赤褐色(2.5YR5/8)を呈する。内外面摩滅のため調整不明。８世紀に位置付けられる。

57は明黄褐色土（第２層）から出土した須恵器鉢である。口径12.0cm。外面は最大径以下に回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデである。Ⅳ型式に位置付けられる。

第７章　平成23・24年度の調査成果（西区）

Ｙ＝－31,330付近を境にして、その東方と西方では土層と遺構の残存状況が全く異なる。東方は、アスファルト舗装と路盤材、禁野火薬庫築造以降の盛土を除去すると、近代耕作土と床土が現れ、複数の遺物包含層、地山粘土層へと続く。地山面の標高は東方に低くなり、東区の調査で確認された北方に開く谷地形の西側斜面になる。なお谷地形の埋土上面では、東区と同様に鋤溝を確認した。

西方は、削平が著しく、アスファルト舗装と路盤材を除去すると削平された地山粘土層になる。地山面には路盤材の砕石がくい込んでおり、また埋設管、暗渠、擁壁基礎、建物基礎等の敷設に伴う撹乱も多く、残存状況はよくない。さらに南の道路側に行くほど削平は激しくなる。なおＹ＝－31,350より西方は、削平と撹乱により遺構は全く残存していないが、地山が島状に残存しており、その最高所はＴ.Ｐ.＋31.2mであった。これはＹ＝－31,340より東の地山面のＴ.Ｐ.＋30.9～31.0mよりも高くなっていることが判明した。現状では、調査地は西に向かって開く大きな谷地形に沿うが、本来は調査地南西に存在する高所に向かう地形であったと考えられる。

第１節　西区の層序（第30図）

西区東端からＹ＝－31,322.5の間の南壁土層断面図である。なお５層に大別しているが、東区と対応するわけではない。

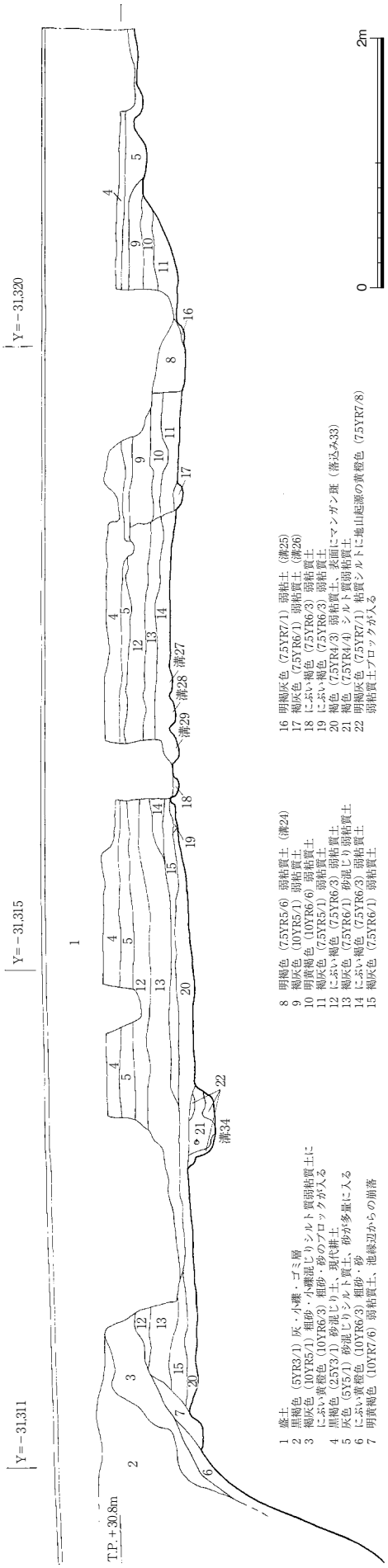
第１層：現代耕作土層（４層）、池（２・３・６・７層）、およびそれ以降の盛り土等（１層）

１は地山起源の粘土ブロック、現代耕作土にコンクリート片や多量の礫等を含む盛り土である。４層は現代耕作土であり、上面の標高はＴ.Ｐ.＋30.9m程度である。２・３・６・７層は、池内の堆積である。２層は池内に投げ込まれた灰、小礫混じり土、ゴミ層であり、３層は現代耕作土の４層の崩落を含む自然堆積である。６層は、にぶい黄橙色を呈する粗砂・砂質土で、池内の底面にも本層が厚く堆積する。

第２層：灰色系のシルト質土層（５層）　灰色を呈するシルト質土であり、多量の砂が混じる。４層下の全域で認められる。上面の標高は、Ｔ.Ｐ.＋30.8m、層厚は４～12cmである。本層中から掘り込まれる遺構があり、上面の鋤溝群は、本層を除去して確認したものである。

第３層：褐灰色系の弱粘質土層（12～15層）　褐灰色～にぶい褐色を呈する粘質土層である。本層は、Ｙ＝－31,322以東の地山の低い部分で確認できるもので、長年におよぶ耕作の重複層であろう。12層上面の標高は、Ｔ.Ｐ.＋30.70～30.75mであり、西方ほど高くなる。また層厚は30～35cmである。溝27～29は本層最下部の15層中より掘り込まれる南北溝である。

第４層：褐色の粘質土層（20層）　褐色を呈する弱粘質土で、表面にマンガン斑の形成が確認できる。Ｙ＝－31,316より東で、谷地形に向かって確認できる。上面の標高は、Ｔ.Ｐ.＋30.3～30.4mで、西方ほど高く、層厚は10～15cmである。地山の低くなる南東部で、落込みとして確



第30図　西区東半土層断面図

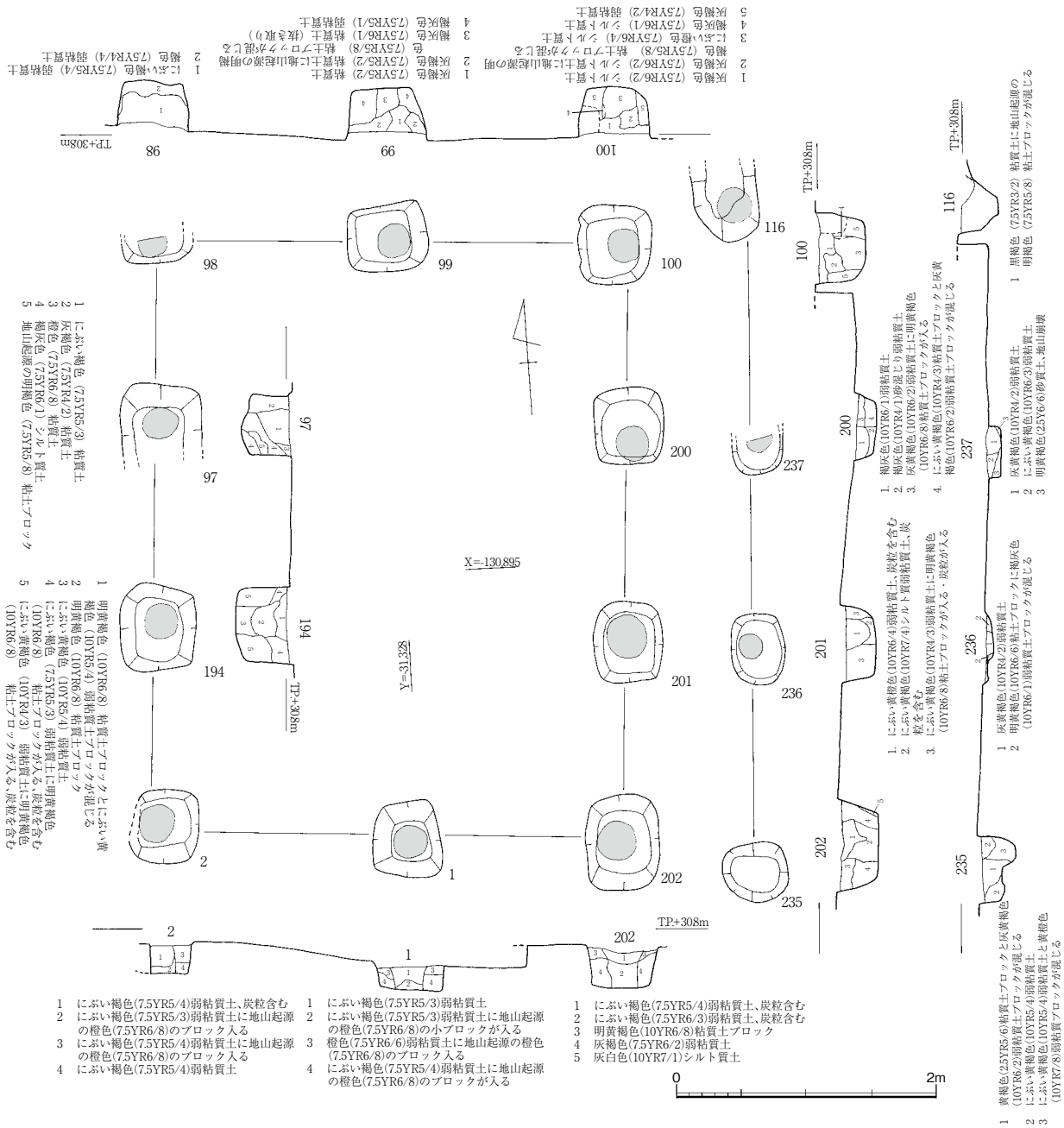
認した埋土である。東区での谷地形埋土の下部に対応すると考えられる。

第５層：明褐色系の粘土層（23層）　硬く締まる粘土層であり、明褐色系を呈する洪積層である。東区同様に古代以前の遺構検出面である。本層上面の標高は、西端でＴ.Ｐ.30.7mであるが、Ｙ＝－31,321.2から東方に急激に低くなり、Ｙ＝－31,320.5～－31,316の間で平坦になった後、さらに東方に向かって徐々に低くなる。そこでの標高は、Ｔ.Ｐ.＋30.2mである。

第２節　西区の遺構と遺物

近世池（第29・30図）　調査区東部で確認した。Ｙ＝－31,313が池の西辺であり、調査区南東端で池の南端部を確認した。東区と西区の間の谷地形を利用して築造された池である。東区では池の東辺は確認されていないので、東区と西区の間に築造された南北に細長い矩形を呈する小規模な池で、東西幅は最大でも10m程度しか見込めない。断面観察では、標高Ｔ.Ｐ.＋30.8～30.1m程度から上部は50度、それ以下は25度の傾斜で掘削し、池底は平坦で標高Ｔ.Ｐ.28.5mである。禁野火薬庫築造段階の盛土を覆う黒色土が落ち込んでおり、近年まで窪んでいたことがわかる。最終的には枚方市民病院の乗る盛土で平坦化する。第30図６層は、池が機能した段階の自然堆積層である。６層は池内の全域で確認でき、それを池底では褐色粘土が約60ｃｍの層厚で覆っていた。遺物は少ないが、若干の陶磁器が出土しており、第36図75は６層を除去した後に地山面に密着して出土した肥前系陶器碗であり、18世紀後半に位置付けられる。

掘立柱建物６（第31図）　柱穴100・200・201・202（東側柱列）、98・97・194・２（西側柱列）、99・１（北・南中間柱）からなる掘立柱建物である。また東側柱列に平行して柱穴116・237・236・235がある。一連の柱列と考えられるが、これらの柱掘方と柱痕は身舎のそ



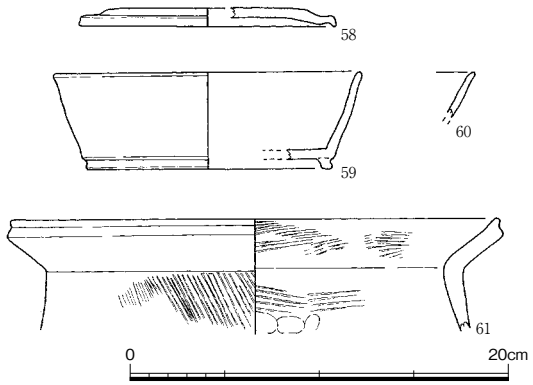
第31図　掘立柱建物６平面・断面図

れよりも明らかに小型である。また身舎柱穴との東西方向の柱筋の通りが悪く、若干のずれており、特に北端と南端は通らない。よって廂あるいは縁束であると考えておきたい。

建物は南北に主軸をとり、身舎は梁行２間（約3.6m）×桁行３間（約4.5m）で、床面積は約16.2㎡、主軸はＮ－２°－Ｅである。立地は東の谷地形、西はＹ＝－31,350～－31,340間の微低地に挟まれた微高地に築造された建物である。身舎の柱掘方の規模は55×55～70cmの隅丸方形であり、断面で確認できる柱痕跡は直径20～23cmである。柱間は南北が1.5m、東西が1.8mである。一方、東柱列の柱掘方の規模は40～55ｃｍ四方のやや小型の隅丸方形で、柱痕跡は直径15～18cmと細い。柱穴58～61から出土した遺物によって、８世紀末～９世紀初頭に位置付けられる。

遺物（第32図）　いずれも掘立柱建物６を構成する柱穴から出土したものである。

58は柱穴194出土の須恵器坏蓋である。口径13.5cm程度。つまみ部は欠損する。天井部は平坦



第32図　掘立柱建物６出土遺物実測図

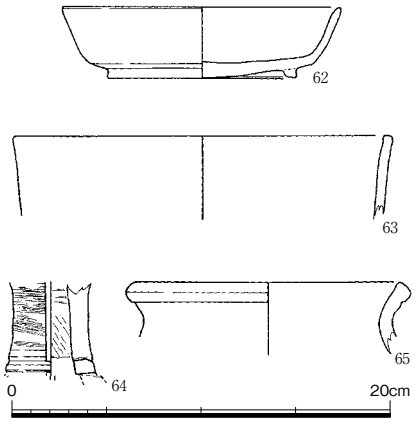
であり、Ⅳ型式でも後半に位置付けられる。59は柱穴116から出土した須恵器坏である。口径16.0cm、器高5.2cm、高台径12.9cm。内外面回転ナデ。Ⅳ段階後半に位置付けられる。60は柱穴99から出土した須恵器坏である。内外面回転ナデ。61は柱穴235から出土した土師器甕である。口径25.6cm。形態は特徴的で、やや内傾する体部上半に、短く外傾する直線的な口縁部が付く。口縁端部上端を突出させ、口縁の器壁は最大1.0cmと厚い。体部外面は粗いタテ方向ハケ目、体部内面と口縁部内面はヨコ方向ハケ目、口縁部外面はヨコナデ。胎土は粗く、微細～１㎜程度のチャート、石英、長石を著しく含む。体部外面に煤付着。８世紀末～９世紀初頭に類例がある。

落込み33（第29図）　調査区南東端部で確認したもので、地山面が約10cm低くなった所に堆積して形成された遺構である。埋土は褐色弱粘質土でマンガン斑の形成が著しい。その埋土を除去した段階で溝、土坑、柱穴などが確認できた。図示し得ていないが、埋土から10～11世紀程度に位置付けられる土師器小皿が出土している。

溝34（第29・34図）　落込み33の埋土を除去した段階で確認した。直線的に掘削された溝で、主軸はＮ－19°－Ｅである。断面「Ｕ」字形に掘り込まれ、規模は幅45～68cm、深さ23cmで、長さ2.7m分を確認した。出土遺物は少ないが、埋土上面近くで、１個体に復元できる須恵器の坏身片がまとまって出土した。

遺物（第33図）　62は埋土上面近くから出土した須恵器坏身である。口径14.7cm、器高3.8cm、高台径9.9cm。胎土に１～５㎜の粗い砂礫を含む。底面はヘラで切り離し、ナデ仕上げである。高台は扁平なもので、Ⅳ形式１段階に位置付けられる。

土坑36（第29図）　落込み33埋土を除去した段階で検出した土坑で、重複関係から溝34より古く、遺構の東半は破壊されている。平面形は直径１ｍ程度の円形と考えられ、断面形は深さ約10cmの浅い皿形である。埋土は灰黄褐色弱粘質土。時期を示す遺物の出土はない。



第33図　西区溝34・229出土遺物実測図

溝79（第29・34図）　Ｙ＝－31,320で確認した「Ｌ」字状に屈曲する溝である。主軸はＮ－２°－Ｗで、北部で104度の角度で屈曲する。地山面において、Ｙ＝－31,321.5から東部が遺構として検出され、内部を掘削するとそのラインに沿って幅50cm程のテラス面が確認され、さらにその内部が溝79を周溝状にした平坦面となる。７分割での調査になったが、最初の３区段階では１条と認識したのだが、４区段階で本来は２～３条の溝が重複関係（第34図）にある

ことが明らかになった。埋土は、灰黄褐色シルト質弱粘質土で第３層に相当する。性格は不明であり、時期を示す遺物の出土はない。

溝229（第29・34図） 溝229は調査区の南辺、Ｙ＝－31,316～－31,330の間で、府道に沿って確認した東西方向の直線溝である。本溝の西延長部はコンクリート基礎で削平されて残存せず、東延長部は東区の調査範囲外であり府道下になる。主軸はＮ－88°－Ｗ。断面「Ｕ」字形に掘り込まれ、規模は幅45～58cm、深さ20cmで、長さ15m分を確認した。溝底の標高はＹ＝－31,316でＴ.Ｐ.30.21m、Ｙ＝－31,322でＴ.Ｐ.＋30.42m、Ｙ＝－31,328でＴ.Ｐ.＋30.54mと西方に高くなる。多くの柱穴や溝と重複しており、柱穴234・235との関係から掘立柱建物６よりも古い段階の溝である。出土遺物は少なく３点を図示したが、時代の位置付けは必ずしも明確ではない。63から８世紀には埋没したと考えられる。

遺物（第33図） ３点を図示し得たが、64・65は混入品と考えられる。63は須恵器であり、器種は直口の鉢が想定できる。直線的に外傾する口縁部で、端部はややくぼむ平坦面を形成する。内外面ヨコナデ。胎土のきめは粗く、多くの微細～１㎜程度の石英、長石を多く含む特徴的なものである。Ⅳ型式段階に位置付けておきたい。64は須恵器高杯である。長脚で二段三方にスカシを有する脚部である。内面はシボリ痕の後にナデ、外面は工具によるナデ痕がハケ目状に残る。Ⅱ型式の後半段階に位置付けられる。65は須恵器甕である。口径14.0cm。内外面ヨコナデ。やはりⅡ型式の後半段階に位置付けられる。

その他の遺構（第29・34図） 上記以外で、その他の土坑、柱穴、溝の遺構、遺物を報告する。

土坑113は、３区Ｙ＝－31,326の北壁に接して確認した土坑である。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.2m程度、短軸0.9m、断面形は深さ10cmの浅い皿形である。埋土から平瓦片（第35図73）が出土した。

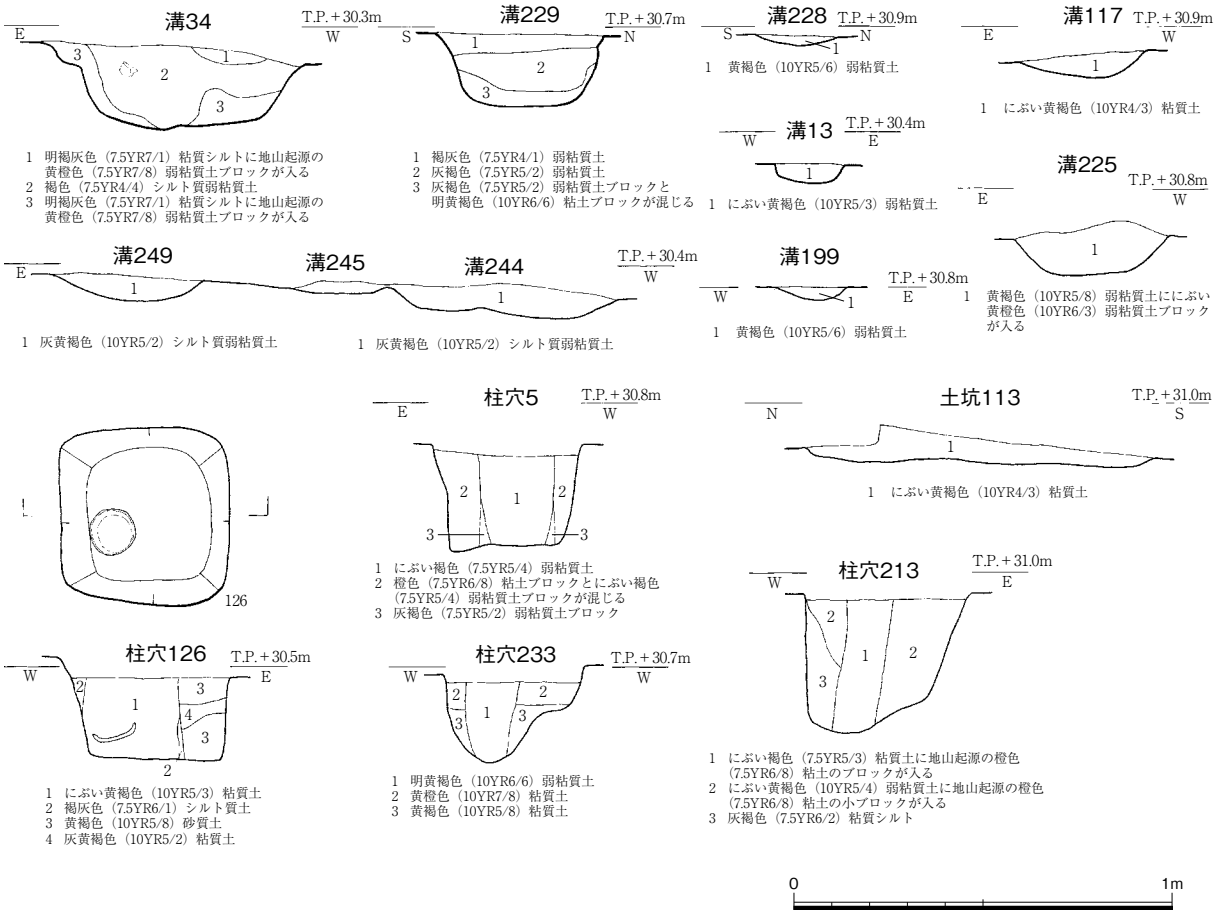
柱穴５は、７－３区Ｙ＝－31,330.5で確認した単独の柱穴である。掘立柱建物６との関連を考えたが確証は得られない。45×40cmの方形掘方に直径20cmの柱痕が確認された。Ⅳ型式段階の須恵器長頸壷（35図71）が出土している。

柱穴126は、３区Ｙ＝－31,320.5で確認した単独の柱穴である。直径45cmの円形掘方に直径12cmの柱痕が確認された。柱痕埋土から完形の土師器坏（35図67）が出土した。土師器は９世紀段階に位置付けられる。

柱穴213は、４区Ｙ＝－31,331で確認した単独の柱穴である。45×40cmの方形掘方に直径20cmの柱痕が確認された。重複関係から溝228より新しい。土師器坏とⅣ型式３段階の須恵器坏（35図69・70）が出土している。

柱穴233は、４区Ｙ＝－31,325の南壁に接して確認した単独の柱穴である。直径35cmの円形掘方に直径13cmの柱痕が確認された。８世紀後半～９世紀の土師器甕（35図72）が出土している。

溝82・83は、３区北西端で確認した溝であり、北東－南西の方向を有している。南方へ延びるが、その延長部の３区南西部ではコンクリート基礎のために残存せず、４・８－１区では表面の



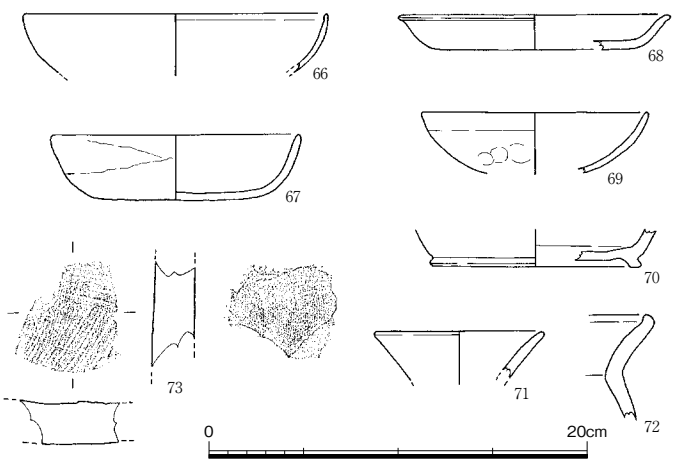
第34図　西区その他遺構断面図

削平が著しく不明瞭であった。また８－１区の間にもコンクリート基礎が存在する。なお溝60～62等は溝底の残存部と考えられる。埋土は茶褐色粘質土である。溝底で円礫が密着した状況で確認できた。時期を示す遺物の出土はない。

溝117・225は、Ｙ＝－31,325で確認した南北溝である。溝117は３区、溝225は４区で確認した遺構であるが、一連の溝と考えられる。両者の間は４ｍ程度途切れる。主軸はＮ－４°－Ｗ。幅は35～45cm、深さ５～10cm、長さは溝117で4.3m、溝225で1.4mを確認した。時期を示す遺物の出土はない。

溝228は、溝229の南側で並行して確認した溝である。主軸方向は、溝229と同じくＮ－88°－Ｗである。幅は15～30cm、長さ3.4m分を確認した。断面形は、深さ10cm前後の浅い皿形である。溝229が道路側溝とすれば、轍跡の可能性が想定できる。時期を示す遺物の出土はないが、重複関係からⅣ型式３段階の須恵器坏が出土した柱穴213より先行する。

その他の遺構出土遺物（第34・35図）　66は柱穴124から出土した土師器坏である。ほぼ完形で出土したが、残存状況が悪く接合し得ていない。明赤褐色(5YR5/6)を呈し、胎土は精良。口縁端部内側を小さく肥厚させる。口径16.0cm。内面ナデ、他は表面剥離のため調整不明。67は柱穴126から出土した土師器坏である。口縁の一部を欠損するのみで、ほぼ完形品である。口径13.0cm、器高3.5cm。胎土に１～３㎜の粗い砂礫を含む。摩滅のため調整不明。９世紀代に位置付けられる。68は柱穴193から出土した土師器皿である。明赤褐色(5YR5/8)を呈し、胎土は精

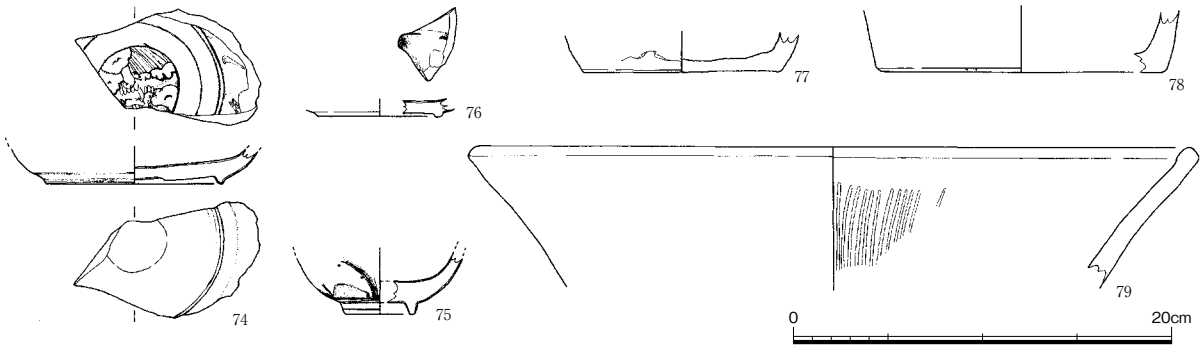


第35図　西区その他遺構出土遺物実測図

良。口縁端部は外水平に小さく突起させる。口径14.1cm、器高1.9cm。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げである。９世紀代に位置付けられる。69と70は柱穴213からの出土品である。69は土師器坏。口径11.8cm。体部内面ナデ、その他は摩滅のため調整不明。70は須恵器坏である。高台径10.9cm。Ⅳ段階３段階に位置付けられる。71は柱穴５から出土した須恵器であり、長頸壷と考えられる。口径8.8cm、やや外反する。Ⅳ段階に位置付けられる。72は柱穴233から出土した土師器甕である。口縁端部は内上方へ小さく突起させる。外面ナデ、内面は摩滅のため調整不明。８世紀後半～９世紀に位置付けられる。73は土坑113から出土した平瓦であり、周囲は欠損する。凹面は布目（縦糸28本×横糸24本／３cm）があり、糸切り痕が残る。凸面はナデを施す。焼成は良好な須恵質で、厚さ2.2cmである。

西区上層出土遺物（第36図）　74は３区中ほどの撹乱土坑、75は近代池の地山面直上、76は４区西部の側溝、77～79は４区での上面遺構を覆う土層からの出土である。

74は波佐見の皿である。高台径9.3cm。18世紀第三四半期に位置付けられる。75は伊万里の染付碗である。高台径3.7cm。18世紀後半に位置付けられる。近代池内の地山面に密着して出土しており、築造時期を示す可能性がある。76は志野織部の皿であり、内面に文様を描く。高台径7.0cm。17世紀に位置付けられる。77は志野の瓶、あるいは徳利である。内面に渦巻きのロクロ目が残る。内面と底面には釉がかかっていない。底部径10.5cm。17世紀初頭に位置付けられる。78は備前の建水と考えられる。底部径10.5cm。17世紀初頭に位置付けられる。79は丹波の擂鉢である。口径37.5cmに復元したが、６cm程度の破片でありやや不正確である。内面にクシ描きによるすり目（幅1.8cm、５条）が残存する。内面は回転ナデ、外面は雑な横方向ナデ。17世紀初頭に位置付けられる。

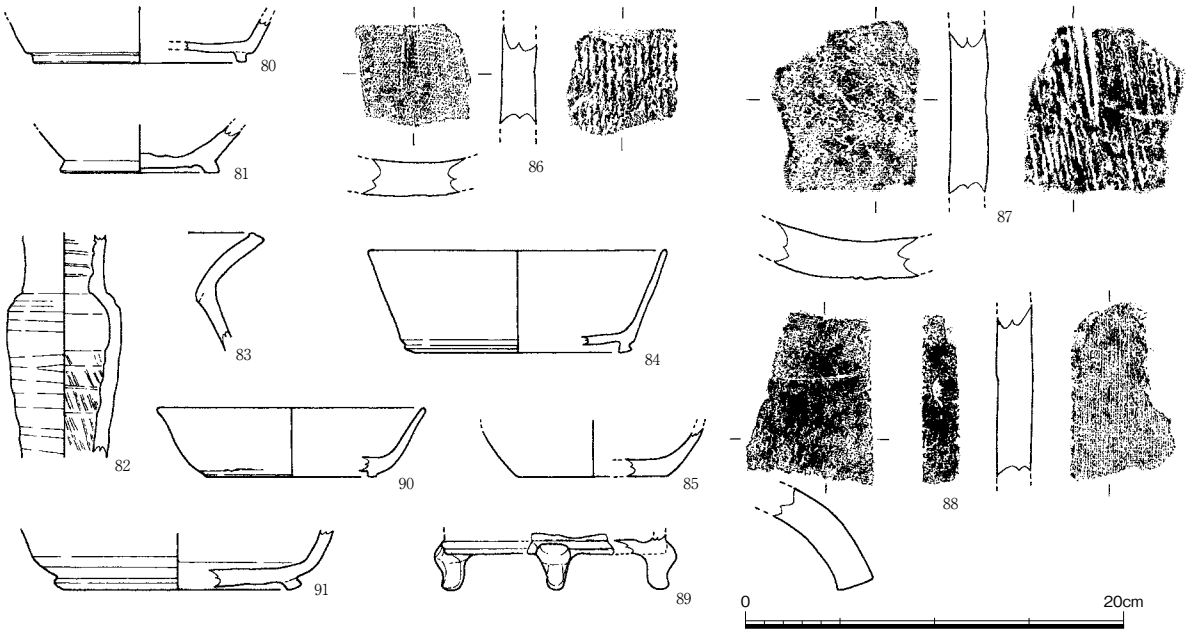


第36図　西区上層出土遺物実測図

西区包含層他出土遺物（第37図）　遺物の出土層位は、80～88は整地土と考えられる地山直上の茶褐色土、89・90は東部谷地形内包含層、91は撹乱土からの出土である。また出土位置は、80・81・86～88が３区Ｙ＝－31,335～－31,340間、82・83が４区Ｙ＝－31,330～－31,335の間、84・90・91が４区Ｙ＝－31,320～－31,330の間、85が７－１区、89が８－２区である。

80は須恵器坏であり、Ⅳ型式後半に位置付けられる。81は須恵器壷の底部であり、Ⅳ型式に位置付けられる。82は須恵器長頸壷である。伊豆・駿河で生産され、長岡京に多数が持ち込まれた「壷Ｇ」と呼称される。内外面の色調は暗青灰色(10GB4/1)、断面は赤褐色(5YR4/8)を呈し特徴的である。外面は粘土紐巻上げによる凹凸が螺旋状に残り、雑な横方向ナデで仕上げる。内面は頸部と体部上半にはヨコナデ、体部下半にはヨコナデとその後についた左斜上方へのシボリ痕が残る。また仔細に観察すると、体部上半から頸部ヨコナデの下にもシボリ痕が確認できる。ロクロ成形段階には、内面全面にあったシボリ痕の体部上半以上をヨコナデで仕上げたものである。時期は８世紀末～９世紀初頭に限定できる。83は土師器甕である。体部外面は摩滅のため調整不明の他は、ヨコナデ仕上げである。84は須恵器坏で、口径15.6cm、器高5.5cm、高台径12.0cmである。Ⅳ型式３段階に位置付けられる。85は須恵器で、壷底部と考えられる。

86～88は瓦であり、本層には他にも同様の瓦片を含んでいる。86は平瓦であり、周囲は欠損する。凹面は布目（縦糸26本×横糸27本／３cm）が残り、一部に縦方向ナデを施す。凸面は縄目叩き（７本／３cm）を施す。焼成はやや良好な須恵質で、厚さ1.9cm。87も平瓦であり、周囲は欠損する。凹面は摩滅により調整は不明瞭であるが一部にナデが確認できる。凸面は縄目叩き（７本／３cm）を施す。焼成はやや不良で、厚さ2.0～2.2cm。88は丸瓦であり、片方の側面が残存する。凹面は布目（縦糸25本×横糸24本／３cm）が残る。凸面は縄目叩きの後、横方向のケズリを施す。平面拓本の横方向ラインはケズリ工具の痕跡である。側面はケズリを施す。焼成



第37図　西区包含層他出土遺物実測図

は良好な須恵質で、厚さ1.9cm。

89は須恵器円面硯である。焼成は生焼けの状況で、にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。体部最大径12.0cm、器高3.0cm以上。脚部は体部外面下半に貼り付けたものが一つ残存しており、４脚として図化したが、本来の脚数は不明である。墨をする硯面部は７㎜程度と薄く、周囲の海部も浅い。外堤側面には突帯を巡らせており、蓋掛りと考えられる。

90・91は須恵器坏である。90は口径14.0cm、器高3.7cm、高台径9.0cmに復元できる。91は高台径13.0cmと大型品である。両者ともにⅣ形式２段階程度に位置付けられる。

落込み群（第38・39図）　８－１区の地山が低くなるＹ＝－31,350～31,340mの間の地山面で確認した不定形な落込み群である。平面形態は細長い不定形の落込みの集合である。８－１区の調査前の状況は、府道と病院の駐車場をつなぐ通路部分であり、それ以前には病院関連の構造物が存在したようである。アスファルトと路盤材を除去すると削平を受けた地山面が現れ、また病院にかかわる施設のコンクリート基礎や撹乱坑が多数存在した。低い府道面から高い病院駐車場につなぐ緩やかな傾斜になっており、南方ほど地山面の削平と撹乱が著しい。

機械掘削終了後の地山面での遺構検出の結果、Ｙ＝－31,350を西端とする褐色粘土（第38図の１層）が円弧を描くラインが確認できた。大型の土坑あるいは落込み状遺構として検出したが、削平を被らなかった微低地での堆積と考えられた。褐色粘土の表面での遺構は未確認であり、２層上面でも遺構検出を試みたが、遺構はやはり未確認である。最終的には、地山面での遺構検出で不定形な落込み群40～51、67～69を確認した。南方は削平で消失したと考えられ、北方は調査区外に伸びる。なお微低地内東半でも、地山面がさらに数ｃｍ低くなった部分で溝55・60～62、土坑63等の遺構を確認している。埋土は不定形落込み群とは異なり単純であり、状況は異なる。例えば不定形な土坑63（第38図）の埋土は、褐色弱粘質土の一層である。不定形落込み群の状況は以下の通りである。

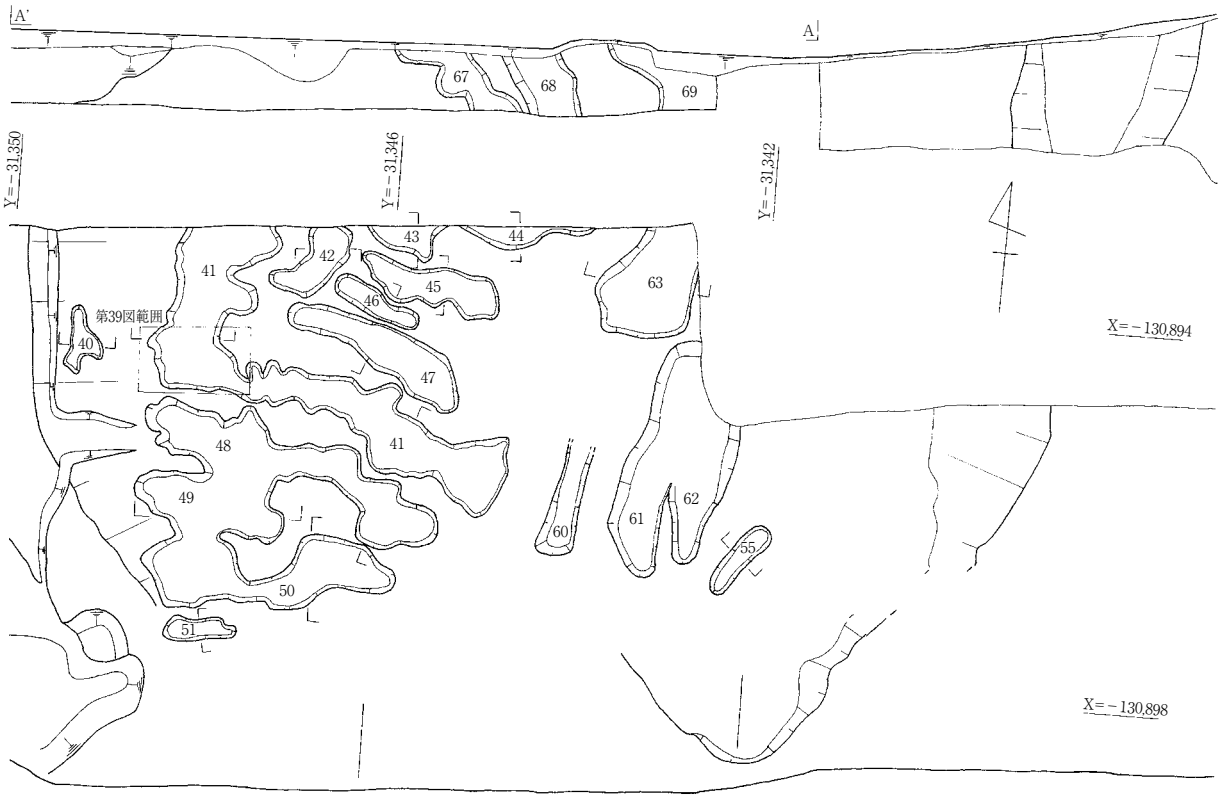
①落込み群は、Ｙ＝－31,348.5の微低地の裾付近を西端として、不定型な溝状遺構が北西－南東方向にのびる。しかし同じ方向性を示すのではなく、調査地中央部の落込み41周辺は、Ｎ－70°－Ｗ程度の方向を示すが、北壁に接する落込み67・68はＮ－35～45°の方向を示す。

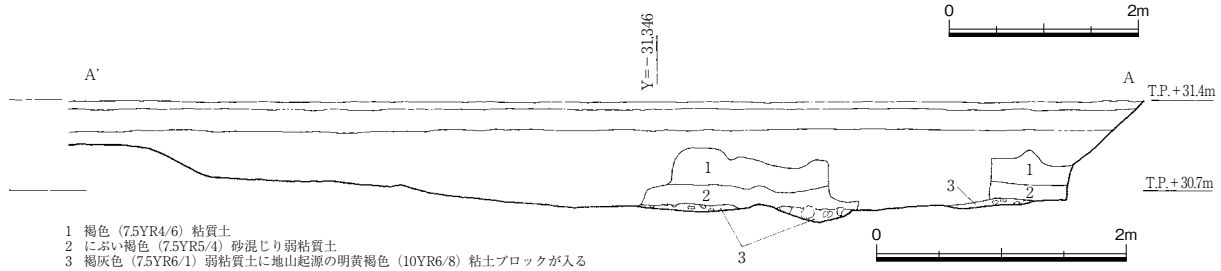
②落込みの埋土は、褐灰色・褐色系の弱粘質土に地山起源の極小の明黄褐色粘土ブロックを多く含むものである。深い部分でも10cm程度で、底面は凸凹である。埋土には一定量の遺物を含み、底面に密着する遺物も多く、地山にくい込む状況で出土する遺物も多くあった。

③地山面に鋤・鍬の刃先と考えられる痕跡が確認でき、複数の痕跡が連続して並ぶ部分もあった。また落込み内の床面は凸凹で、そこでも鋤・鍬の刃先痕跡が確認できる部分もあった。

④褐色粘土層、落込み埋土、落込み床面から、遺物や自然石が出土する。遺物には須恵器・土師器の他、瓦細片（図版43ｂ）も含まれており、磨滅が著しい。また特殊な遺物としては、落込み41の底面に密着した状況で塼状の板石破片１点（図版43ｂ右下）が出土している。

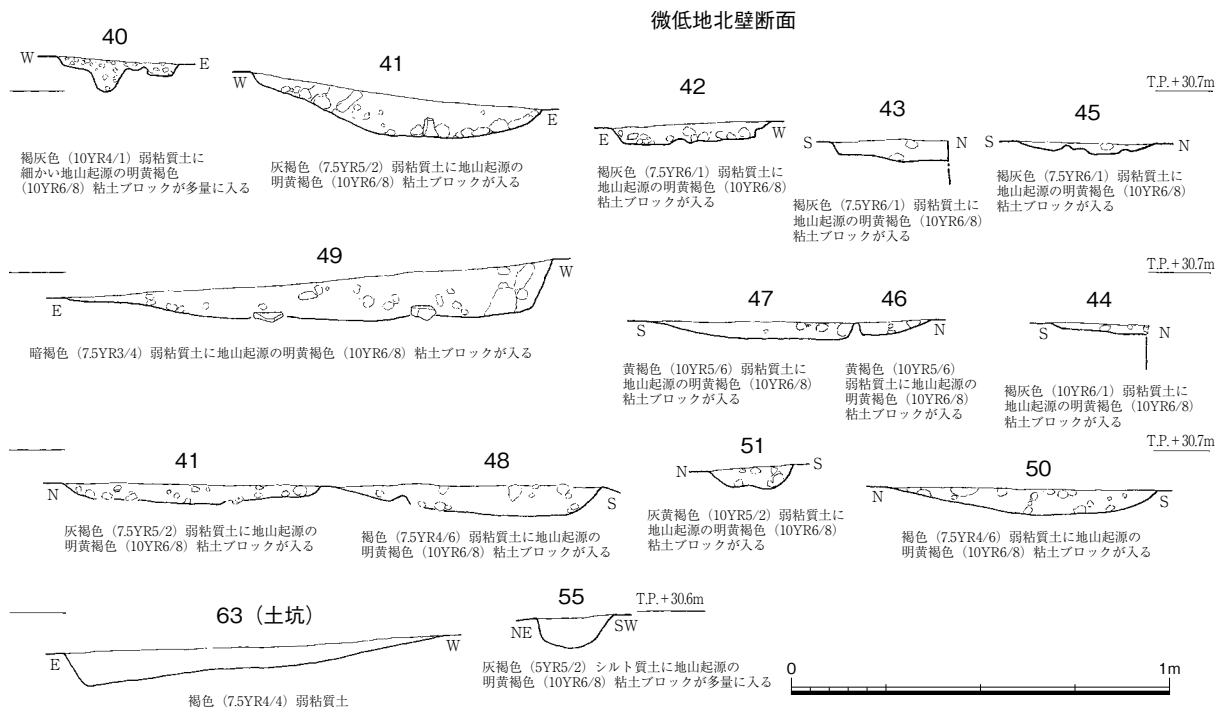
不定形落込み群の性格は不明であるが、地山面に鋤・鍬の刃先の痕跡が、部分的にはそれが列



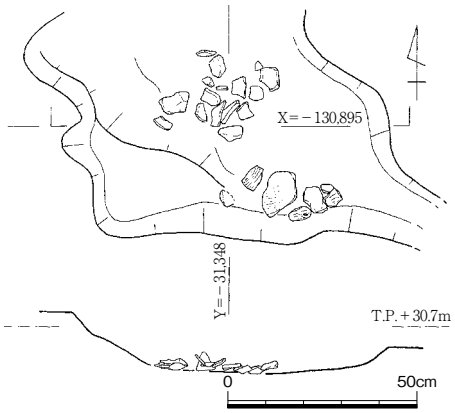


1 褐色（7.5YR4/6）粘質土
2 にぶい褐色（7.5YR5/4）砂混じり弱粘質土
3 褐灰色（7.5YR6/1）弱粘質土に地山起源の明黄褐色（10YR6/8）粘土ブロックが入る

微低地北壁断面



第38図　落込み群平面・断面図



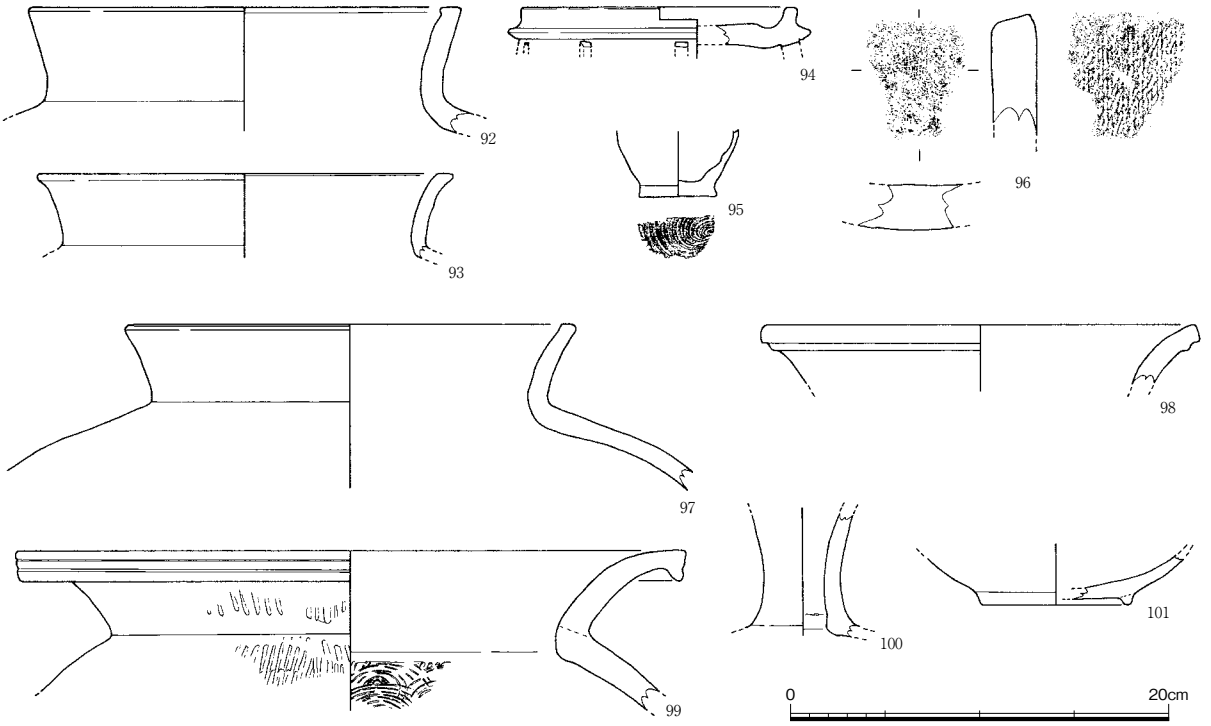
第39図　落込み41遺物出土状況実測図

状に確認できるので、畑等の農作業関連あるいは何らかの土木作業によって形成された痕跡と考えておきたい。

落込み群他出土遺物（第40図）　92～96は落込み遺構群にのる微低地内の埋土（第38図１・２層）からの出土遺物であり、92～94は１層、95･96は２層である。また97～102は、地山面で検出した各落込み遺構からの出土である。

92は須恵器大型甕であり、やや外傾する短頸で、口縁端部に平坦面を有する。回転ナデの後、外面と口縁端部は丁寧なナデ仕上げ。器面、破面ともにやや摩滅する。Ⅳ型式後半に位置付けられる。93は須恵器大型甕であり、やや外反する短頸で、口縁端部を水平に引き出し、平坦面を有する。内外面回転ナデ。Ⅳ型式後半に位置付けられる。94は須恵器の圏脚円面硯である。脚部は残存しない。口径14.6cm、体部と脚部の間に三角形の突帯を貼り付け巡らせて蓋掛りとする。残存状況は良好で、灰色(N6/)を呈する。脚部にはスカシを穿つ。スカシは二つが痕跡として残存しており、９方スカシであったことがわかる。墨をする硯面部は使用によりへこんでおり、周囲の海部も明確である。95は須恵器瓶子であり、底面は回転糸切り痕が残る。体部内面は巻き上げ痕、外面は回転ナデである。Ⅴ形式に位置付けられる。96は平瓦であり、端部の一部を残す。灰白色を呈し、焼成は不良で、摩滅が著しい。凹面は布目痕がわずかに残る。凸面は縄目叩き（10～11本／３cm）を施す。端面には横方向のケズリ痕跡が残る。厚さ2.0cm程度。

97は落込み６から出土した須恵器大型甕である。やや外反する短頸で、口縁端部に平坦面を有



第40図　落込み群他出土遺物実測図

する。口頸部内外面は回転ナデ、体部外面はカキ目、内面はナデ仕上げ。Ⅳ型式後半に位置付けられる。98は須恵器甕である。落込み48と50から出土した破片が接合したものである。器壁の両面、破面ともに摩滅が著しい。99は落込み41から出土した須恵器大型甕である。大きく開く口頸部を有し、口縁下端部に粘土帯貼付けにより垂下させる。口頸部は、頸部外面に平行タタキ（２条／１cm）が残る他は回転ナデである。体部外面は平行タタキ（２条／１cm)、内面は円弧当て具痕が残る。Ｖ型式に位置付けられる。100もやはり落込み41から出土した須恵器長頸壷、あるいは長頸瓶であり、頸部下半のみ残存する。器壁は厚く、内外面ともに回転ナデである。器面、破面ともにやや摩滅する。101は落込み51から出土した須恵器の壷底部と考えられる。焼成は生焼けの状況で、浅黄色(10YR8/3)を呈し、表面の摩滅は著しい。

第４章　まとめ

平成19年度から行ってきた調査によって、Ｙ＝－31,337以西の府道坂道部分は、大きく削平を受けて遺構は消失し、それ以東で良好に残っていることが明らかになった。ここでは、平成23・24年度調査を主体に、まとめとする。

調査では、その面積が狭いにも関わらず、予想以上に多くの遺構が検出された。主な遺構の時期は古墳時代後期、奈良時代前半、奈良時代後半から平安時代前期、中世である。特に奈良時代後半から平安時代前期の遺構は濃密であり、一帯には当該期の屋敷地が広がるとする既往の調査成果とも合致する。一方で、奈良時代前半と中世の遺構は希薄である。明らかになったことの概要は以下のようなものである。

１）立地について　　現地は都市計画道路枚方藤阪線が、交野台地の西側低地部から坂道をのぼり、平坦な台地上を東西方向にはしる。その道路は交野台地に刻まれた自然の谷地形を利用して築造されたかのようにみえる。しかし第２章で記載したように、この谷は大規模な改変によって生じた地形である。つまり府道は、禁野火薬庫への輸送を重視した軍事目的の道路で、台地縁辺を深く切り崩し、その土でスロープにした上に設置されており、1938（昭和13）年に完成したものである。それ以前の地形の詳細はわからない。平成20・22年度の調査によって、著しく削平された地山面が確認されたのは、この時に損壊を被ったためと考えられる。

坂道を上りきった所にある枚方市民病院前の地形も、道路に向かい南西方向に低くなっている。しかし４・７・８区の調査によると、その南西方向に低くなるのは地山表面が削平されて形成されたものであることが確認できた。また８区の調査では、地山面は同じ高さのまま西方にのびる状況を呈していた。つまり、本来の交野台地の縁辺部は、おそらく同じ高さのままに、８区西端からさらに西方に150m程度延びていたのであり、現在の地形は８区西端部で大きくカットされて形成された地形であることが確認できた。

２）古墳時代後期について　　確実な遺構としては、竪穴建物と土坑が各１基であり、出土した須恵器から６世紀後半段階に位置付けられる。また掘立柱建物７も可能性が高い。禁野本町遺跡において、この時期の遺構・遺物は他地点での調査でも小数ながら確認され、希薄ながらも分布していたと考えられる。

ここでは今回の調査で確認した、掘立柱建物４・５も本段階に位置付けられる可能性があることを指摘するにとどめる。時期を示す遺物は出土していないが、両者は他の建物とは主軸方位が全く異なることがその根拠である。また掘立柱建物４は、建物の規模に比して柱が細いことも他の建物とは異なっている。谷地形内で確認した掘立柱建物５の場合、地形との関連をみると、そこでの地山面の等高線は北西から南東に向かって低くなっており、柱穴の並びはそれに並行する。遺構の築造面は削平されてはいても、本来の傾斜を反映していると考えれば、正方位を意識した

古代の掘立柱建物群とは異なった、自然地形に沿って築造された建物と考えたい。さらに掘立柱建物５の柱間距離は2.9mで、竪穴建物６の主柱穴距離とも合致することも両者が同時期である根拠としたい。建物４についても、調査範囲が狭く、しかも撹乱の激しい所であって明らかにはできなかったが、自然地形に沿って築造された可能性を想定しておきたい。

３）奈良時代後半から平安時代前期について　今回の調査において８棟の掘立柱建物を確認した。その内、先の２棟以外は東西あるいは南北方向に近い主軸をもつもので、掘立柱建物７以外は、奈良時代後半から平安時代前期に位置付け得る建物が主体であると考えている。これらの建物は、北側隣接地で枚方市により実施された172次調査（以下、「市172次」と記載）の成果[1]で確認された、正方位に近い主軸で築造された建物群52棟と同時期に築造された一連の建物群と考えられる。このことは、建物６棟の主軸が、北で９°程度西に振るものから、4.5°程度東に振るものの間に収まっており、それが市172次の建物の主軸範囲に入ることでも示すことができる。

また市172次において、調査区の西端に沿って、南北にはしる谷地形と地割りあるいは道路側溝と考えられる溝２条が確認されている。そして、この谷地形と溝は、枚方市が百済寺遺跡と禁野本町遺跡周辺に想定する方形区画の西ラインに合致するものである。今回の東区１・６区で確認した谷地形と溝16･26は、市172次の南延長部分であり、同じ方形区画が東区までは延びており、より南の状況が明らかになった。

ところで今回の西区は、枚方市の想定する方形区画範囲よりも西側であり、そこで居住区を確認したことも重要な成果である。しかも少なくとも８世紀末から９世紀初頭には、遺構密度は東区より高く、掘立柱建物の柱穴はより立派である。また、磨滅しているが多数の瓦片が出土し、他に円面硯２点も出土している。殊に瓦片の出土は東区では少なく、西区の特徴である。東区とは、性格の異なる建物群が存在し、異なる景観を呈したと考えられる。

(財)大阪府文化財センターによる台地西側縁辺部における2004・05年度調査（以下、「大文セ04・05」と記載）の成果[2]でも方形区画の範囲内とは異なる状況が確認されている。今回調査地の約170m北北西の地点であり、そこからは掘立柱建物群と柱穴などから多数の瓦が出土している。その内容は、古代瓦の出土地点は古代の遺構を検出した場所に一致する事、点数は2,755点で全出土遺物の17％と報告されている。その地点には瓦葺建物が存在し、出土した瓦の型式から百済寺とほぼ同じ８世紀中頃以降に造営を開始し、瓦葺建物・掘立柱建物群が９世紀初頭（あるいは前半）にかけて調査区一帯に展開したとされ、その後９世紀初頭には、瓦葺建物は廃絶し９棟の掘立柱建物が築造されたと、その変遷を明らかにしている。なお瓦葺建物の性格として、調査者は寺院・官衙・有力豪族の邸宅などを想定しており、他に交野離宮関連の施設とする意見[3]もある。

今回の西区での調査成果も、上記の大文セ04･05に合致するものである。すなわち瓦の出土と、８世紀末から９世紀初頭の掘立柱建物を確認したことである。後者は瓦葺建物廃絶後の掘立柱建物群に対応するとすれば、同様の変遷をたどったと想定できる。ただし相違点もある。それは、

今回の調査で出土した瓦の出土状況であり、多くは調査区西半の微低地から出土したもので明確に遺構に伴う状況ではなく、磨滅の著しい細片ばかりで大型品や軒瓦が未確認である事などである。つまり本来使用されたであろう建物などの施設からはかなり遊離した状況を示すと考えられる。そうすれば大文セ04・05の調査地点を中心に展開した瓦葺建物の段階には、今回調査地までには居住域はおよんでおらず、その後の掘立柱建物の段階に居住域を南に拡大した可能性を想定しておきたい。

東西の方向性を有する溝229も重視出来る遺構である。主軸はＮ－88°－Ｗで、柱穴との重複関係から掘立柱建物６よりも古く、出土遺物から８世紀には埋没したと考えられる。しっかりと断面「Ｕ」字形に掘り込まれ、溝底は平坦で標高は東方に低くなる。ところで溝229は、東に延長すれば、東区の溝16・26の南延長部で交わることになる。南北溝は断続的で、底面がでこぼこな状態であり、様相は全く異なる。両者の関係の有無は将来の検討に待ちたい。一方、東区の溝27は、溝229と全く同様の方向性を有している。時期を示す遺物はなく、残存状況も良くないが、平坦に掘削された底面は、東に向かって徐々に低くなっていく状況は溝229と同じなのである。方形区画に先立つ方向性を持った遺構の可能性を想定出来るが、やはり将来の検討を待つほかないであろう。

以上の他にも課題は多い。西区西部で確認した落込み群と、西区東部のＬ字状に屈曲する溝の性格は明らかにし得なかった。また今回調査地において、奈良時代前半と中世の遺構については希薄であったが、周辺での既往の調査成果と合わせてその変遷と位置付けを明らかにすべきであったが果たせていない。

註

１）公益財団法人枚方市文化財研究調査会『禁野本町遺跡Ⅳ』2013年。なお今回調査で確認した東区と西区の間の谷地形は、市172次では「窪地状遺構」としている。また後述する「方形区画」は、現地説明会資料（(財)枚方市文化財研究調査会『禁野本町遺跡第172次調査第２回現地説明会資料』2011年）に図示されている。

２）(財)大阪府文化財センター『禁野本町遺跡』2006年

３）西田敏秀「第3節　禁野本町遺跡の街区とその形成意義について」（公益財団法人枚方市文化財研究調査会『禁野本町遺跡Ⅳ』2013年）

図　　版

禁野本町遺跡遠景（南西から、▲は竪穴建物６の位置）

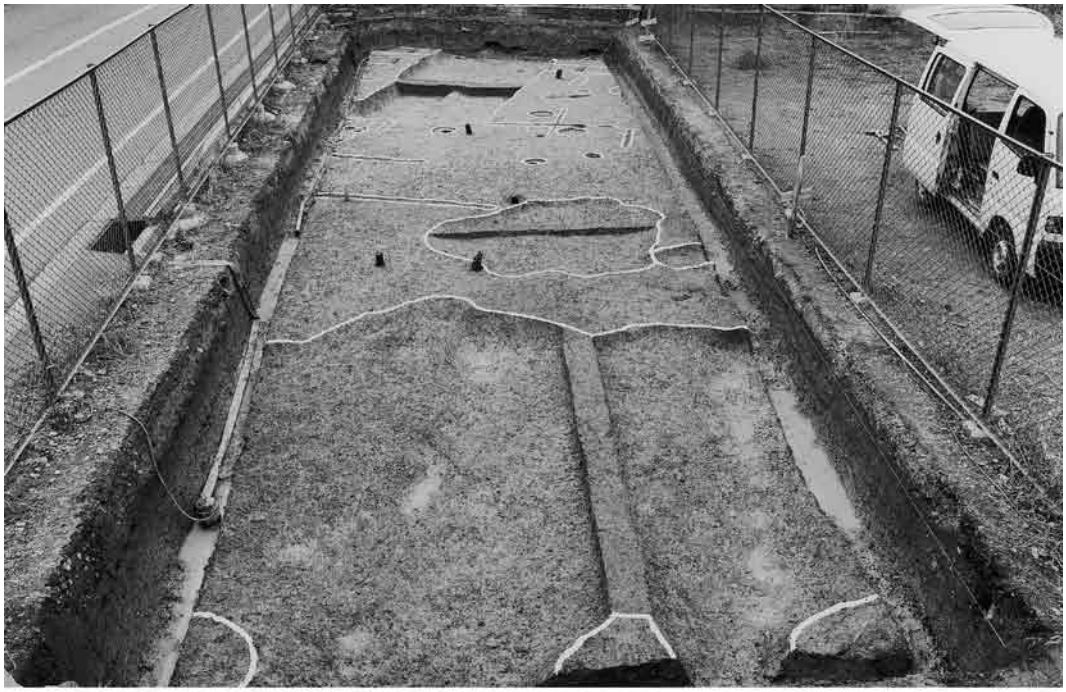
図版1　平成23年度、東区西部

図版2　平成23年度、東区中央部

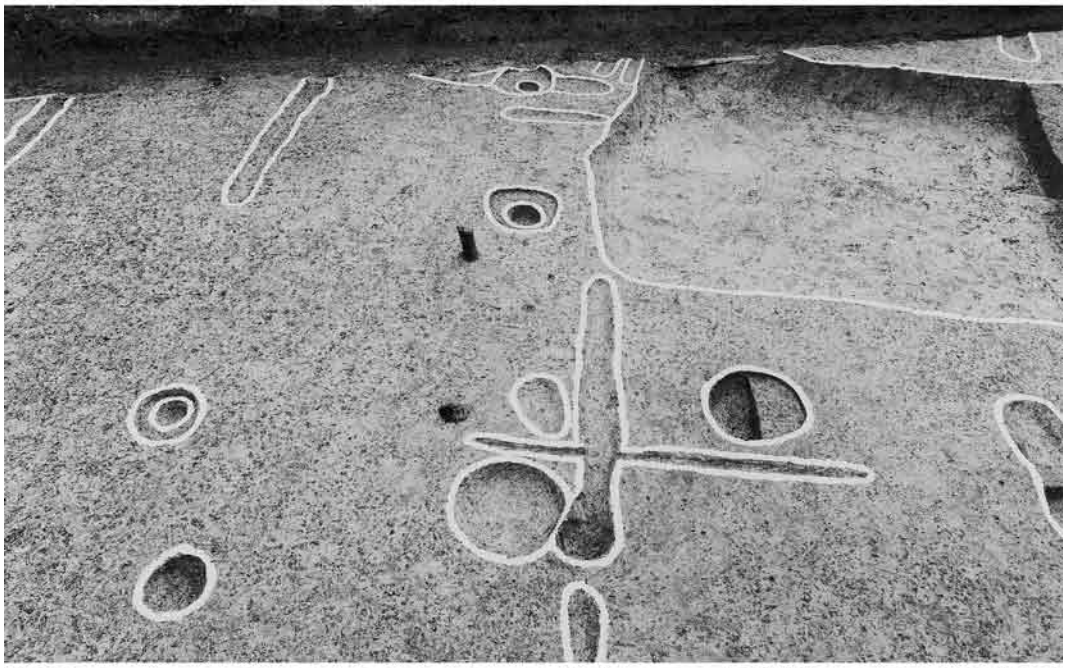
図版3　平成23年度、東区東部

図版4　平成23・24年度、西区西部

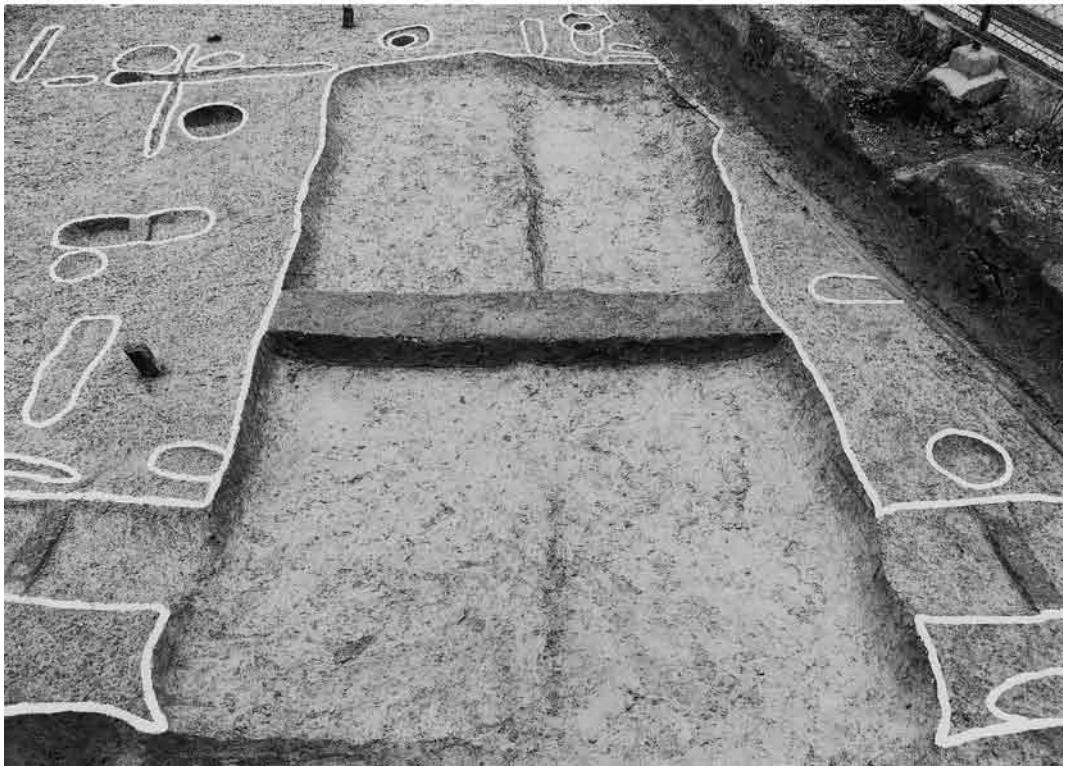
図版5　平成23・24年度、西区東部



a．Ａ地区西半部
全景（西から）

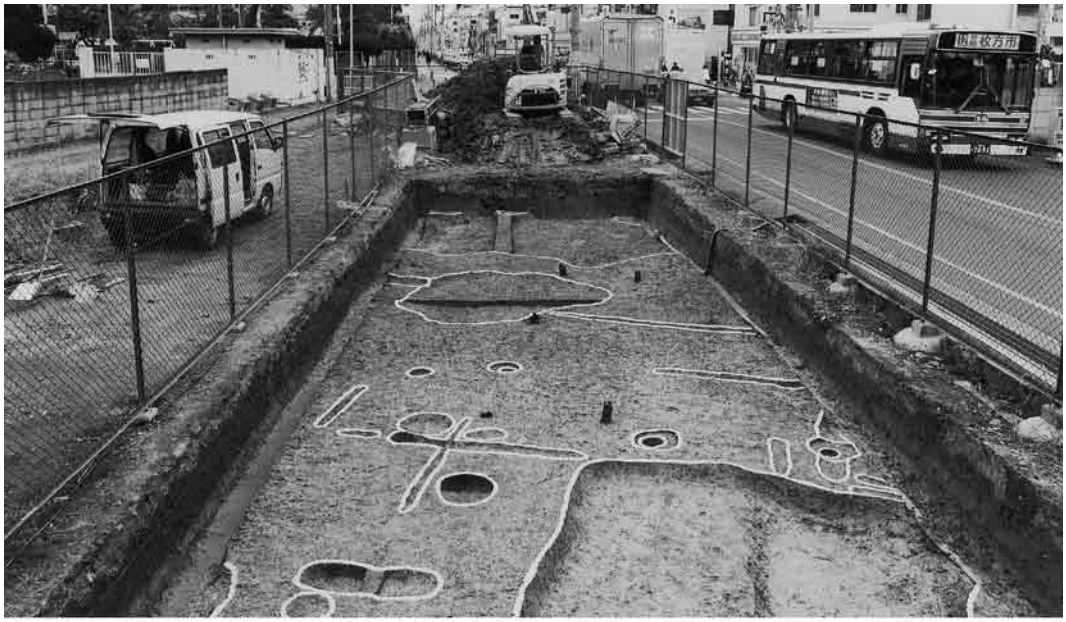


b．Ａ地区東半部
上面全景（西から）

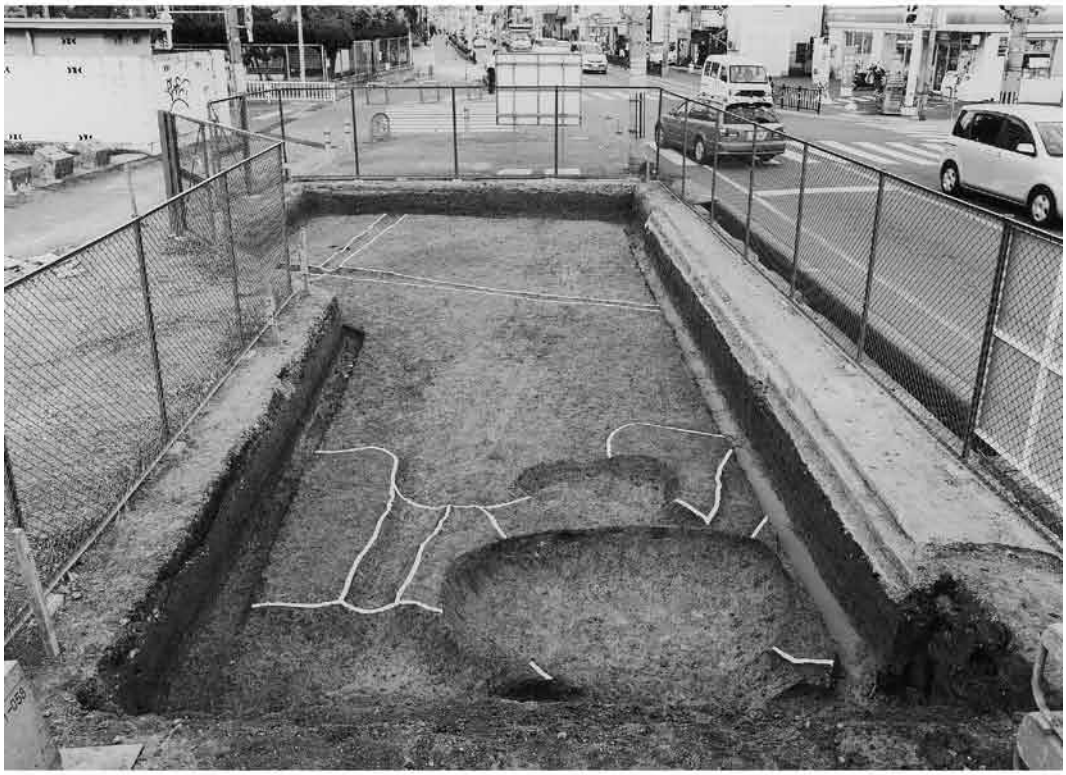


c．Ａ地区東半部
上面全景（東から）

図版7　平成19年度調査2



a．A地区西半部
全景（西から）



b．A地区東半部
上面全景（西から）

c．A地区東半部
上面全景（東から）

a．１区全景
（東から）

b．２区全景
（東から）

c．３区全景
（東から）

図版9　平成22年度調査1

a．１区北壁土層断面
（南から）

b．１区北壁土層断面
（南から）

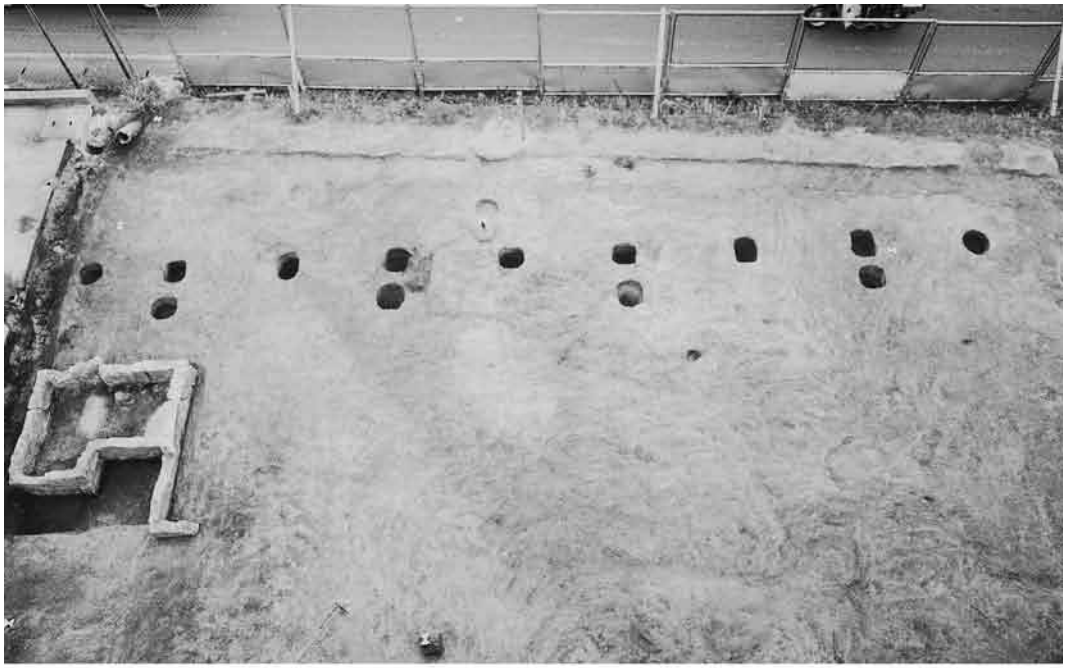
c．１区北壁土層断面
（南から）

d．２区北壁土層断面
（南から）

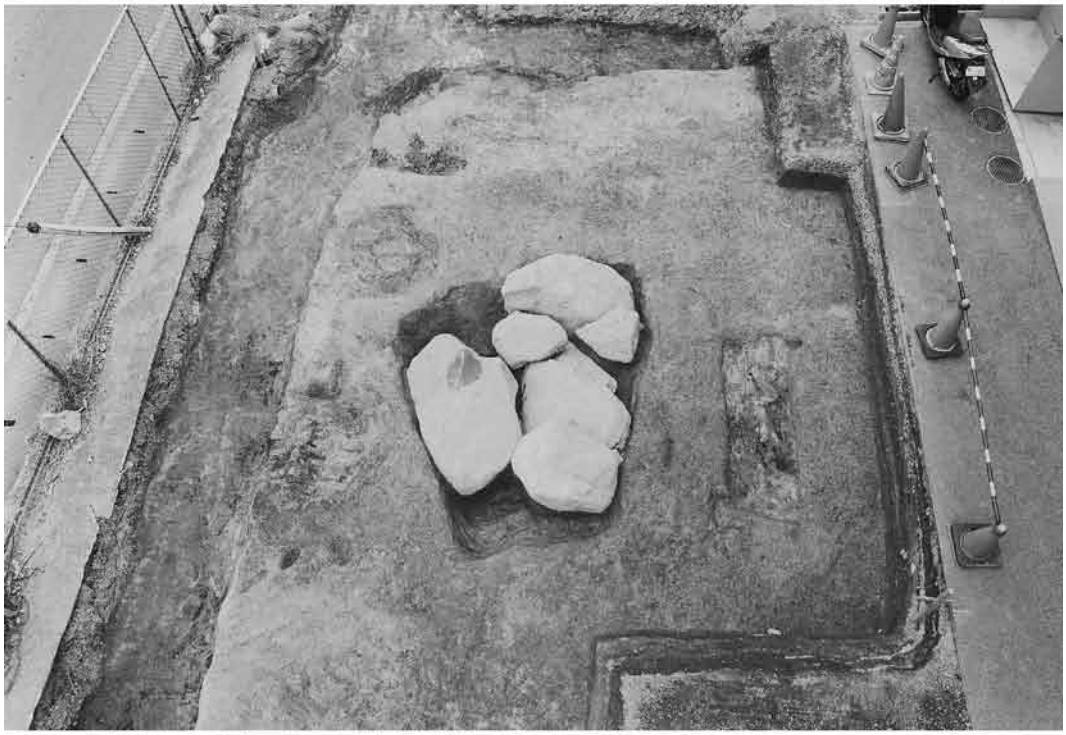
e．３－１区北壁土層断面
（南から）

f．４区北壁土層断面
（南から）

図版10　平成22年度調査2



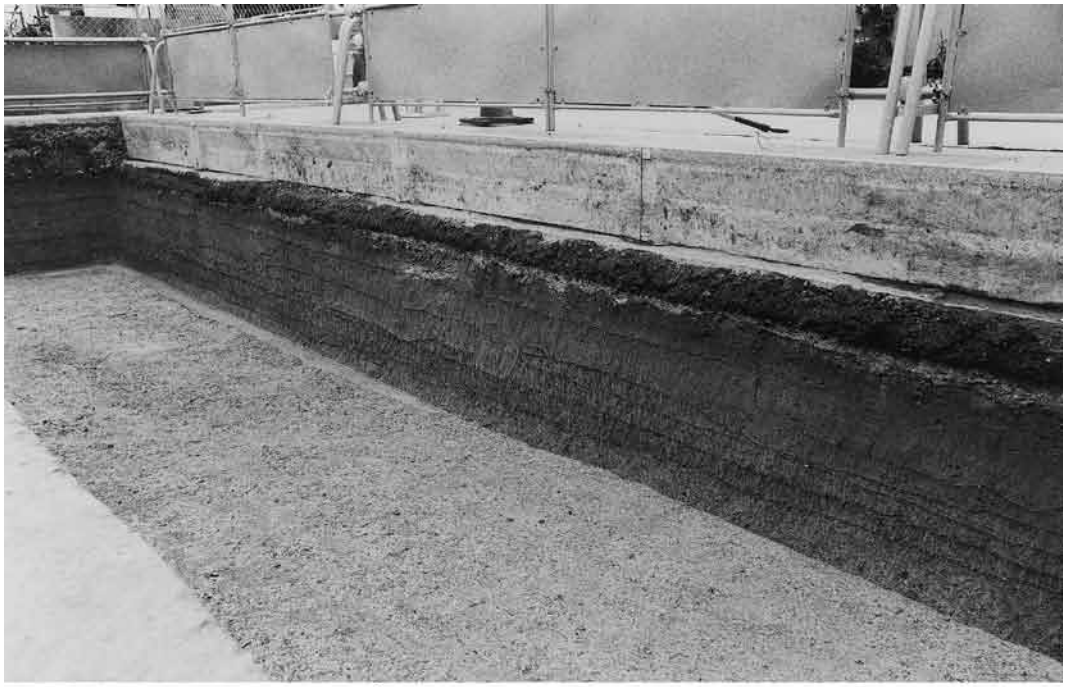
a．１区地山面全景
（北から）



b．２区西部・３－１区
地山面全景
（東上方から）

c．４区　地山面全景
（東から）

図版11　東区、土層断面

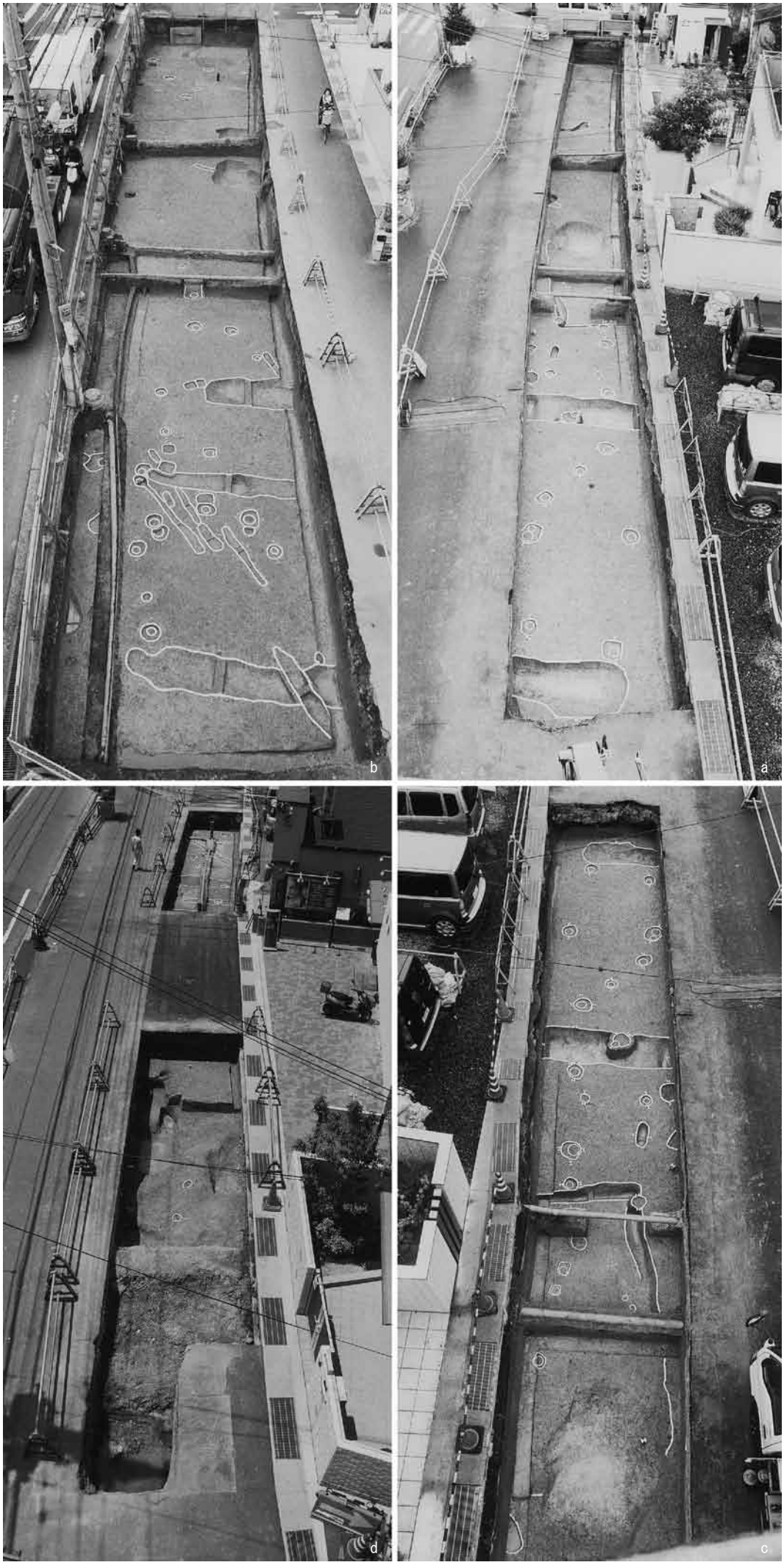


a．１－１区西半
土層断面
（南東から）

b．２－１区土層断面
（南西から）

c．１－２区土層断面
（南東から）

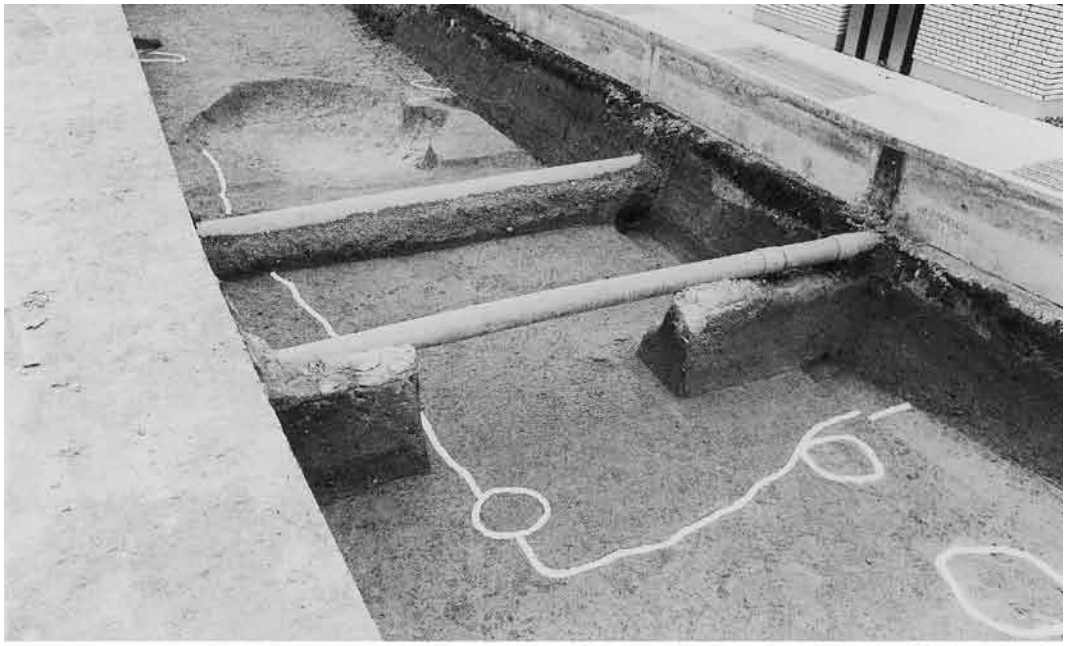
図版12　各調査区全景



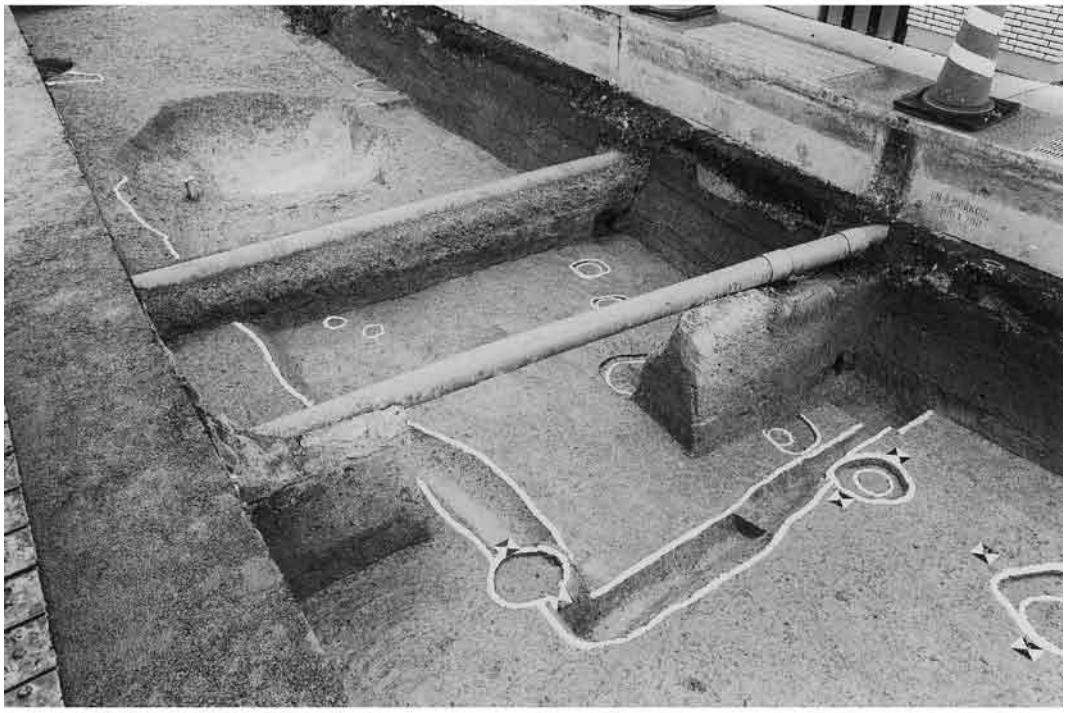
a．１－１区全景（東から）
b．５区全景（東から）

c．１－１区東半部
（西から）
d．２－１・２区全景
（東から）

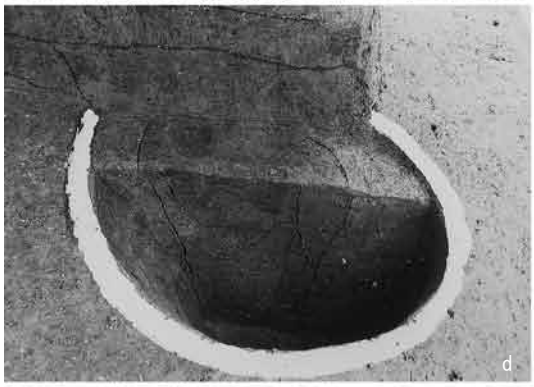
図版13　竪穴建物6

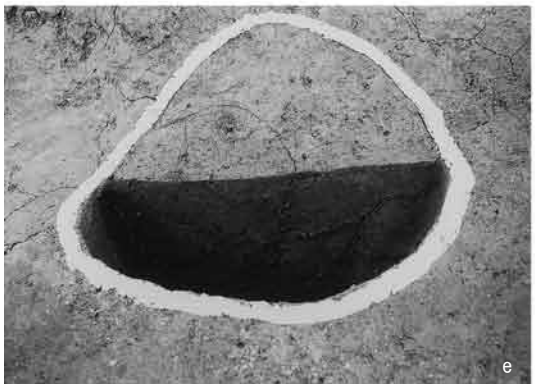


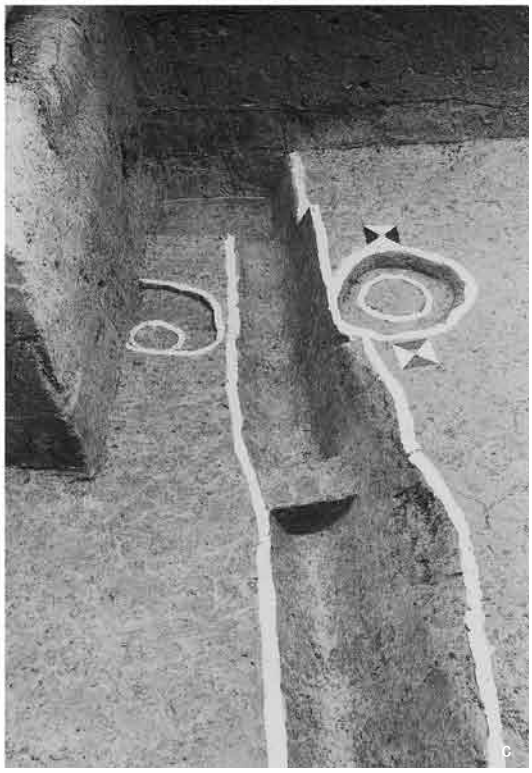
a．竪穴建物６検出状況
（南東から）



b．竪穴建物６掘削状況
（南東から）







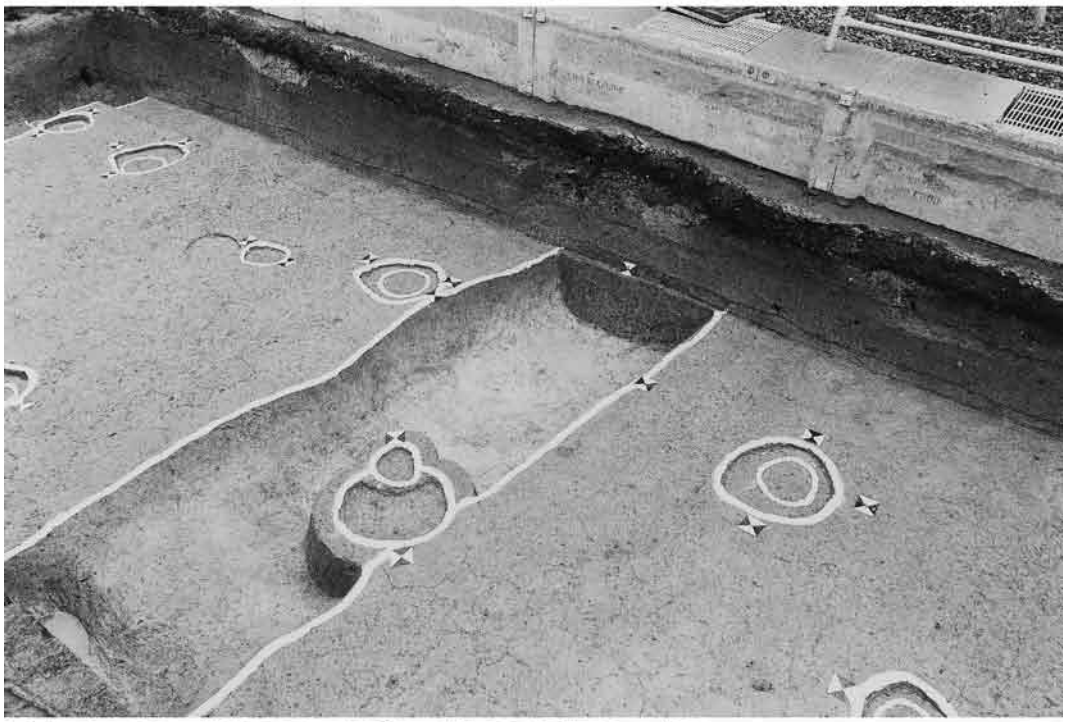
c．東側壁溝掘削状況
（南から）

d．柱穴38断面
（西から）

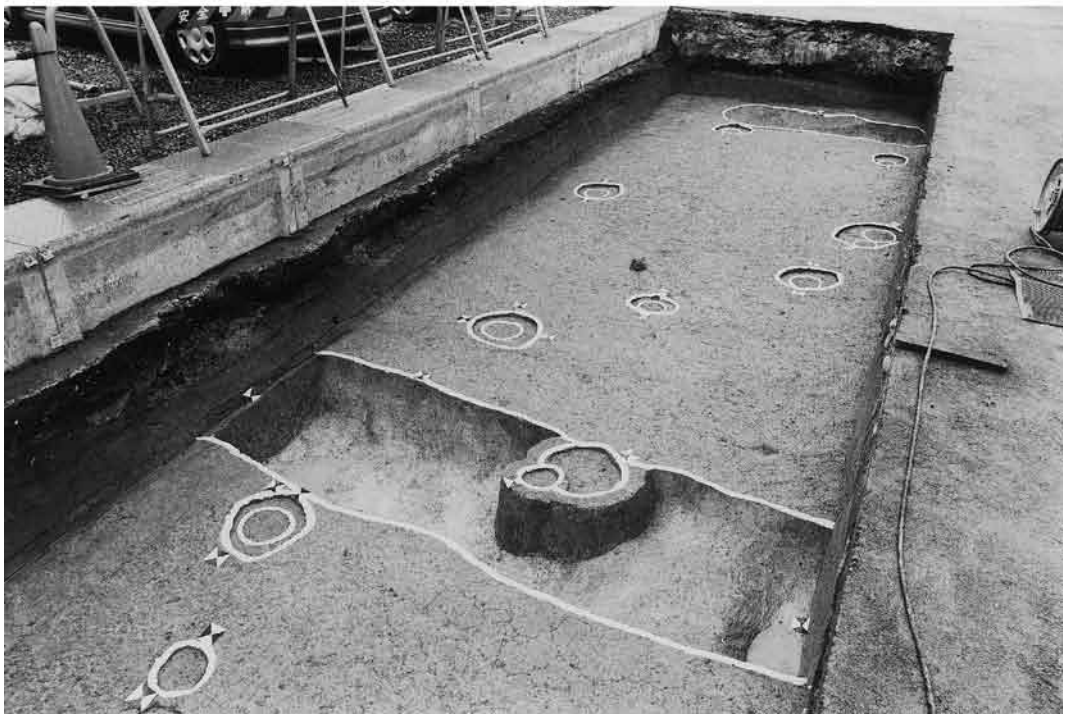
e．柱穴42断面
（西から）

図版14　溝16・26（1—1区）

a．溝16遺物出土状況
（南東から）

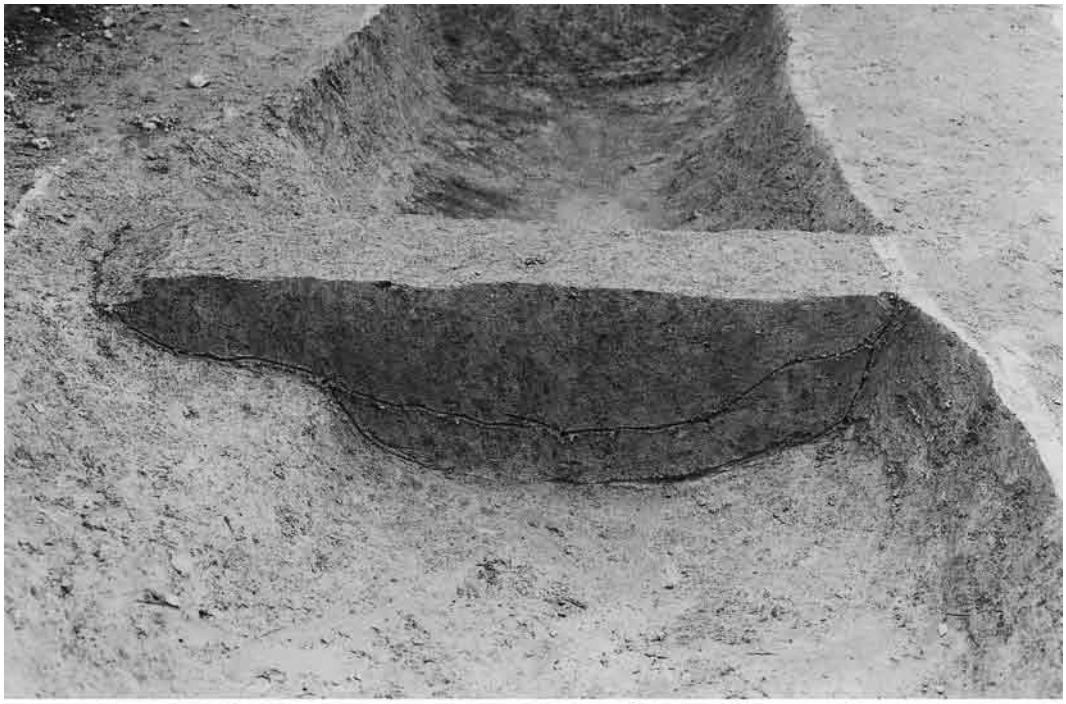


b．溝16掘削状況と
掘立柱建物１
（南東から）

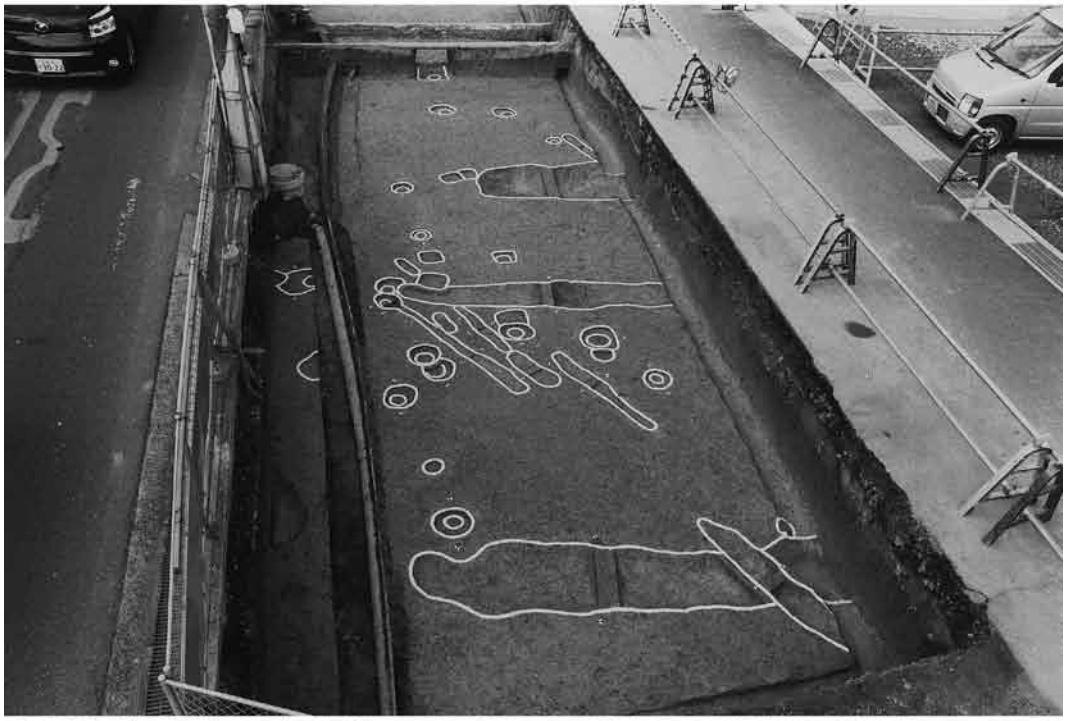


c．溝16・26掘削状況
（南西から）

図版15　溝16・26（1―1・5区）



a．溝26断面
（北から）

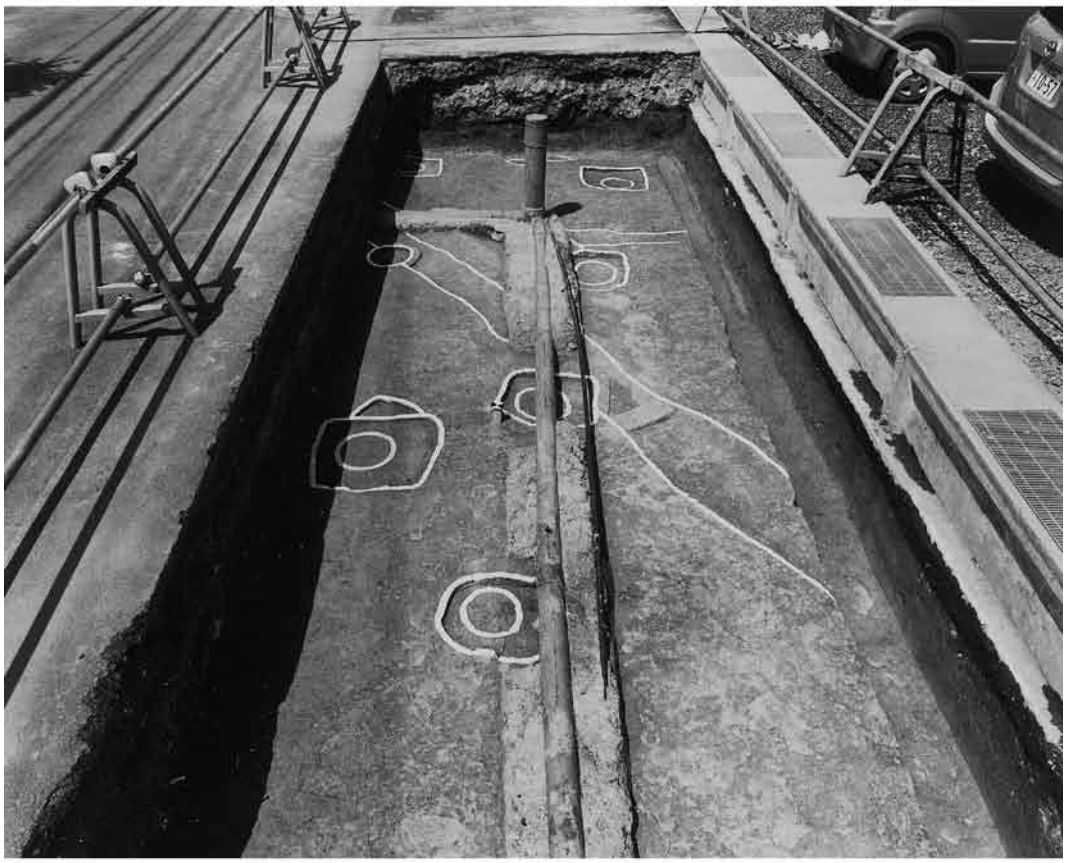


b．５区、東半部
（東から）

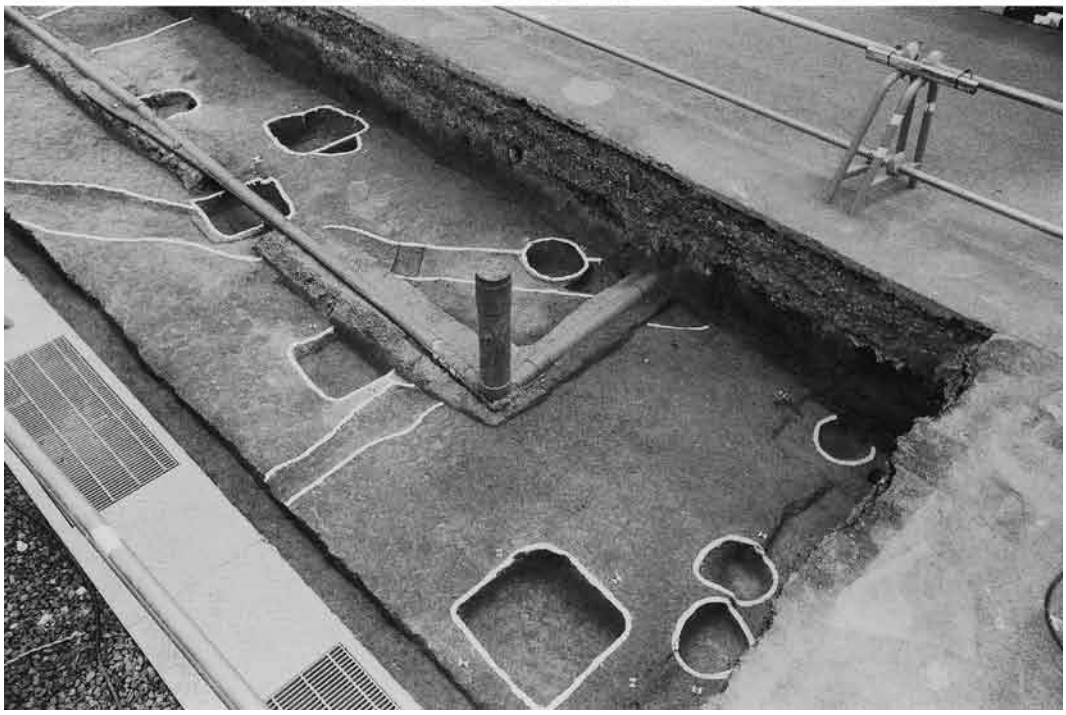
c．５区、溝26掘削状況
（南から）

図版16　溝２８０、掘立柱建物２

ａ．５区、溝280断面
（北から）



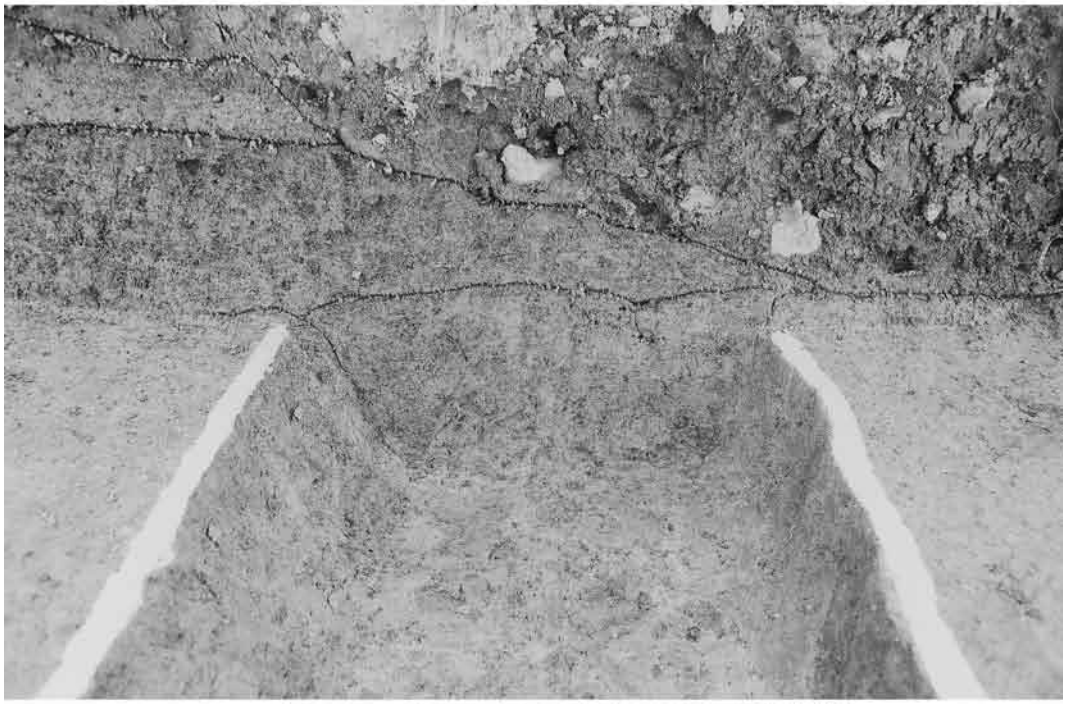
ｂ．２－１区、
掘立柱建物２・溝50
（東から）



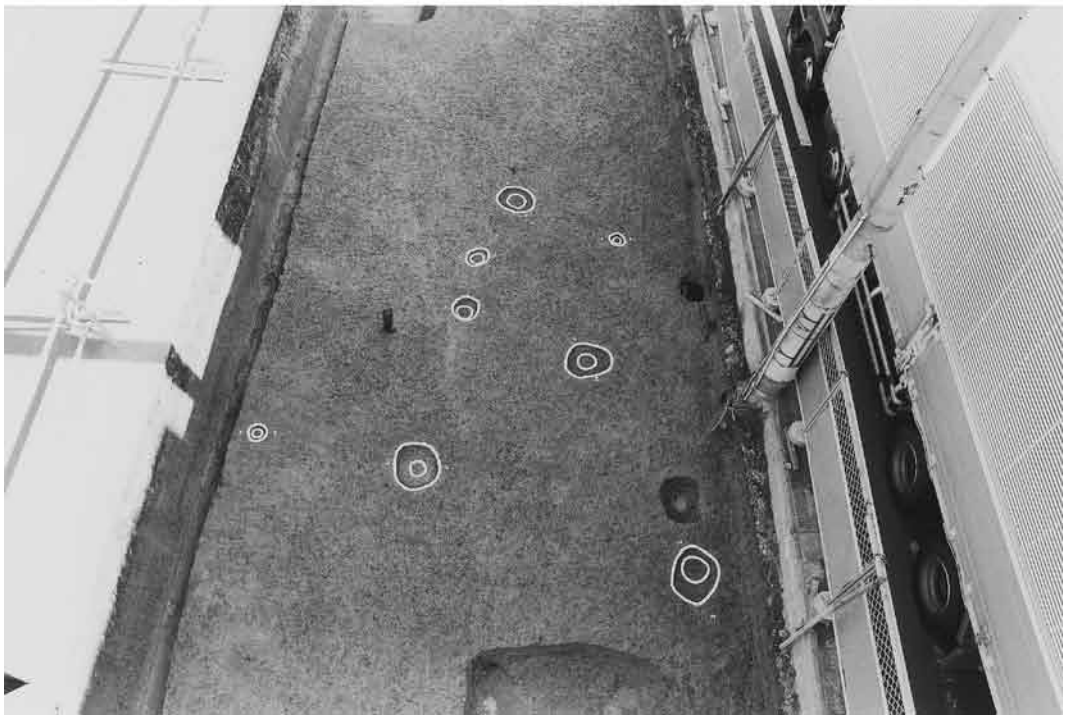
ｃ．２－１区、
掘立柱建物２・
溝50掘削状況
（北西から）

図版17　掘立柱建物3・5、溝58

a．２－１区東半、
掘立柱建物３他
（南から）

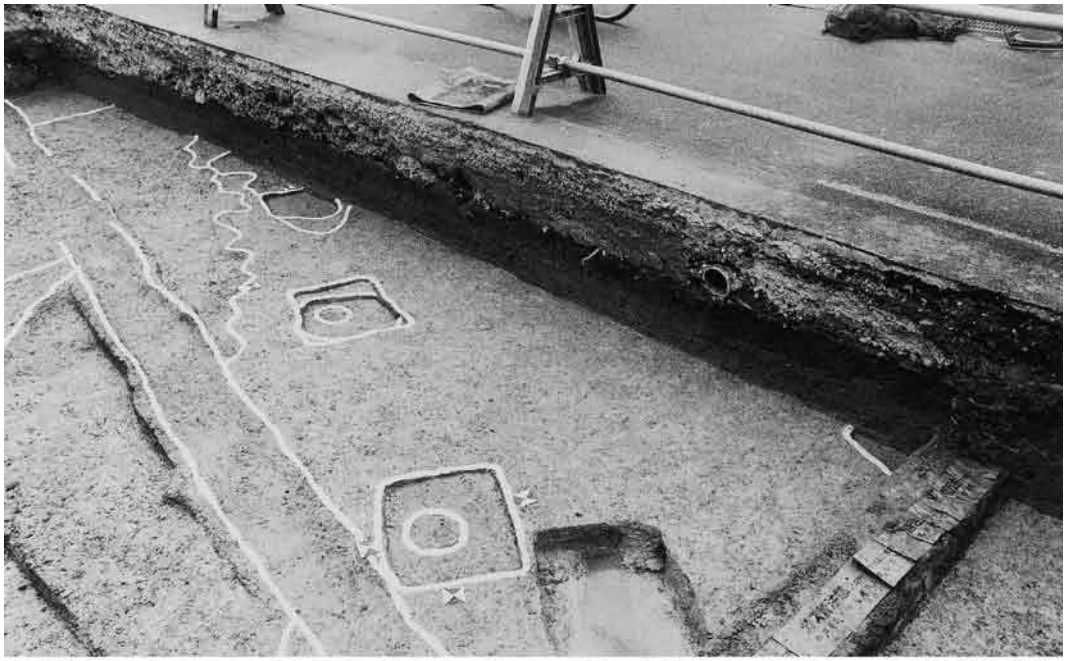


b．２－１区東半、
溝58断面
（北から）

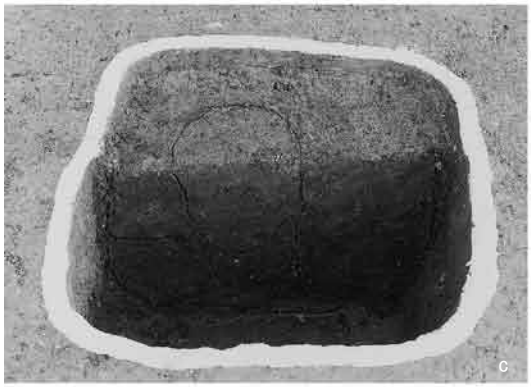


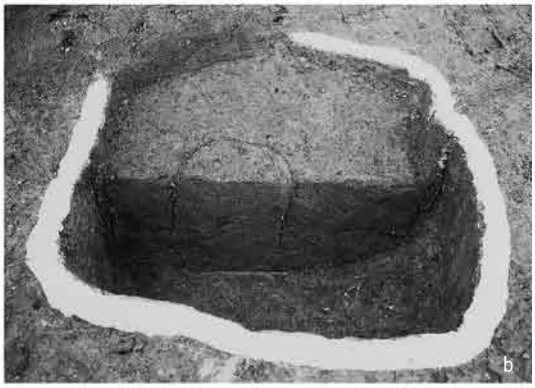
c．５区西半、
掘立柱建物５
（西から）

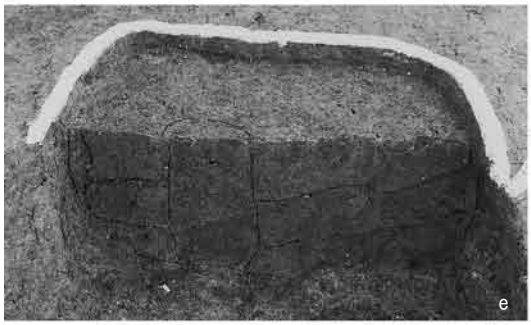
図版18　掘立柱建物４他

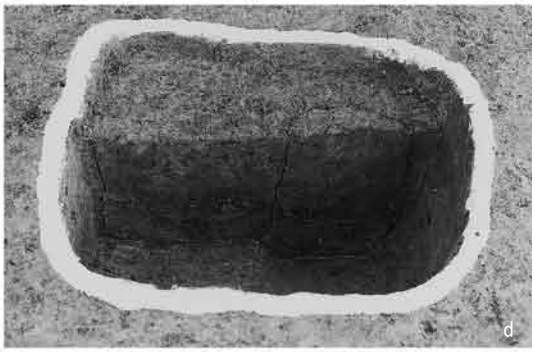


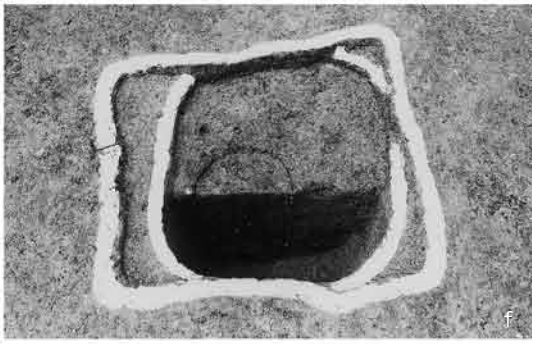
a．１－２区、
掘立柱建物４
（北東から）

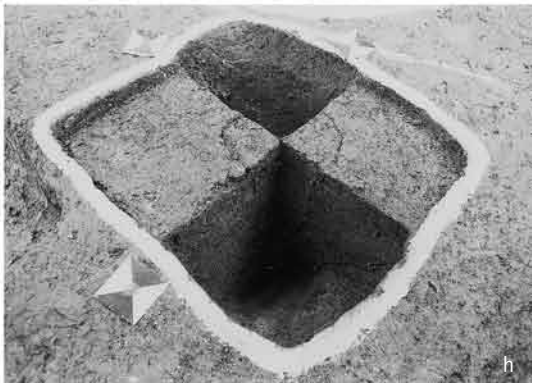












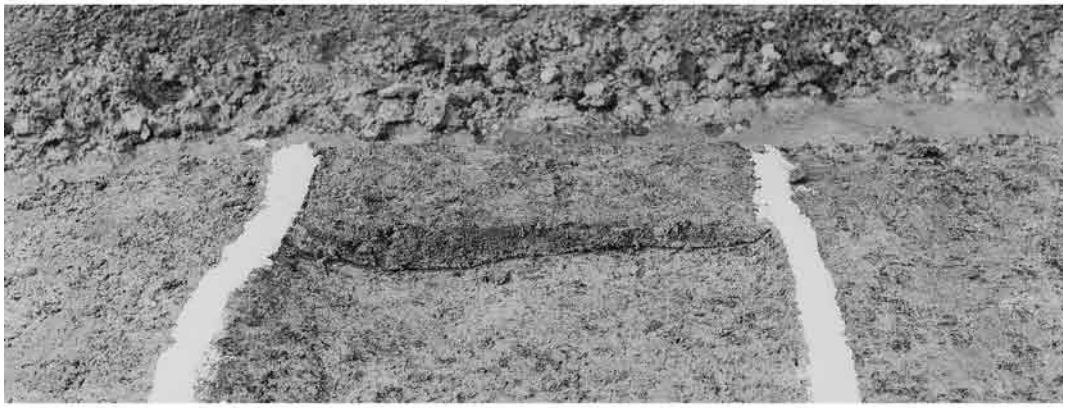
b～h．掘立柱建物４
柱穴断面　(b.163、
c.164、d.166、e.165、
f.29、g.33、h.28)
i．溝27・落込み30
断面(北東から)

図版19

6区遺構掘削状況

a．掘立柱建物４他掘削状況（西から）

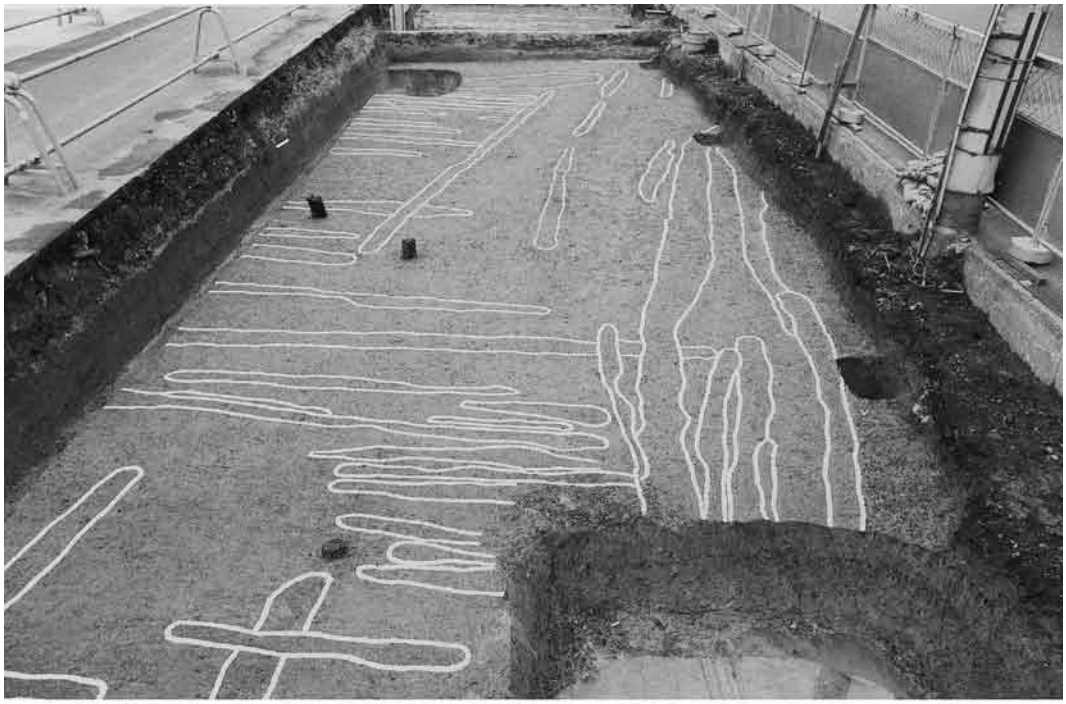
b．溝58他掘削状況（西から）



c．溝158断面（南から）

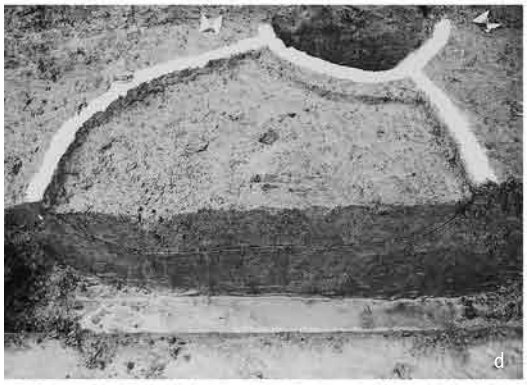
d．溝155断面（西から）

図版20　その他の遺構

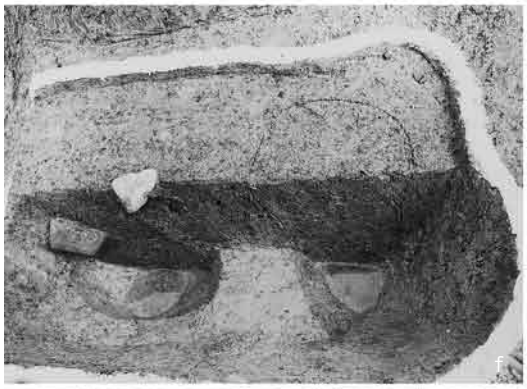


a．５区西半、
上面遺構（西から）

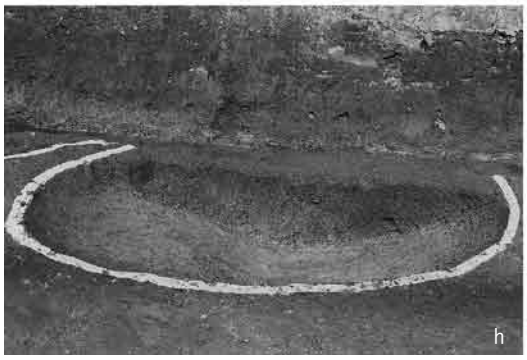
b．１－１区、土坑３
検出状況　（南から）
c．左同断面



d．５区、　土坑281
検出状況（北から）
e．左同遺物出土状況



f．５区、　柱穴266
断面（南から）
g．同遺物出土状況



h．６区、　土坑152
掘削状況（南から）
i．１－１区、
溝４断面（北から）

図版21　西区、土層断面

a．７－１区、北壁断面、右は池（南から）

b．７－１区、南壁東端断面、左は池（北から）

c．７－１区、南壁断面（北東から）

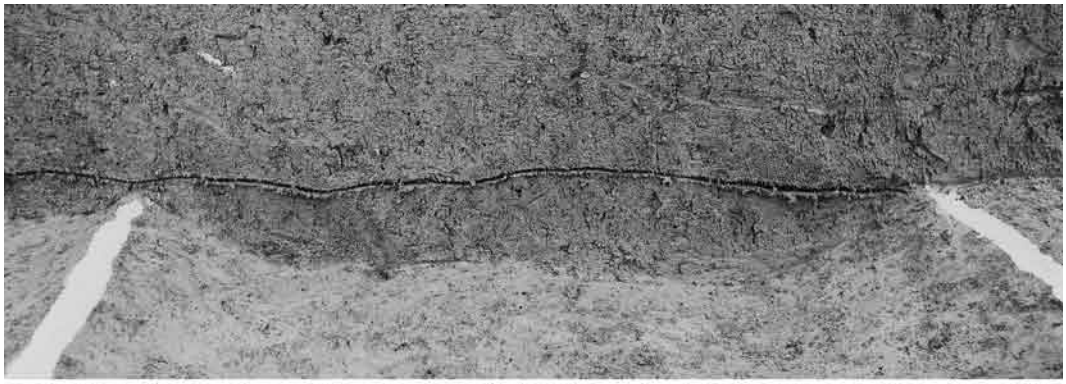
図版22　3・7—1区、遺構掘削状況

a．７－１区全景
（東から）

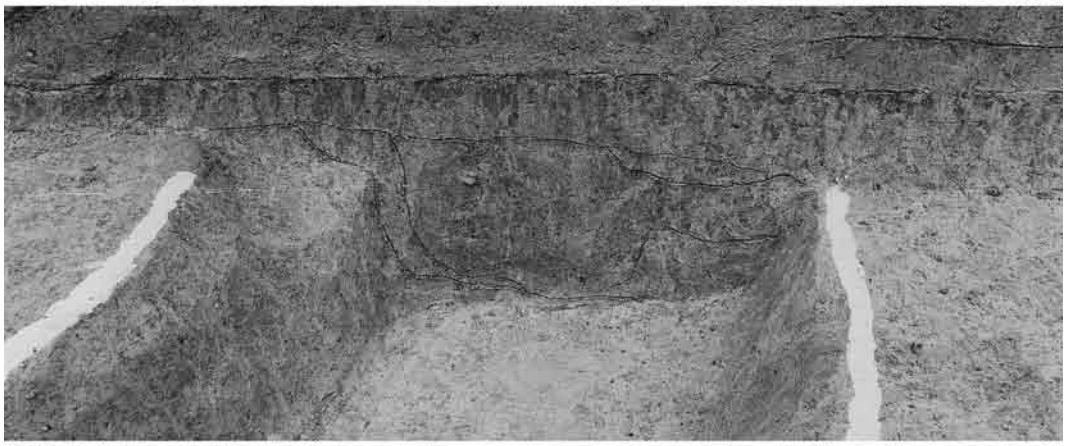
b．７－１区全景
（西南から）

c．３区東端、
溝79（北西から）

図版23　3・7―1区、各種遺構



a．３区、溝79
（北から）



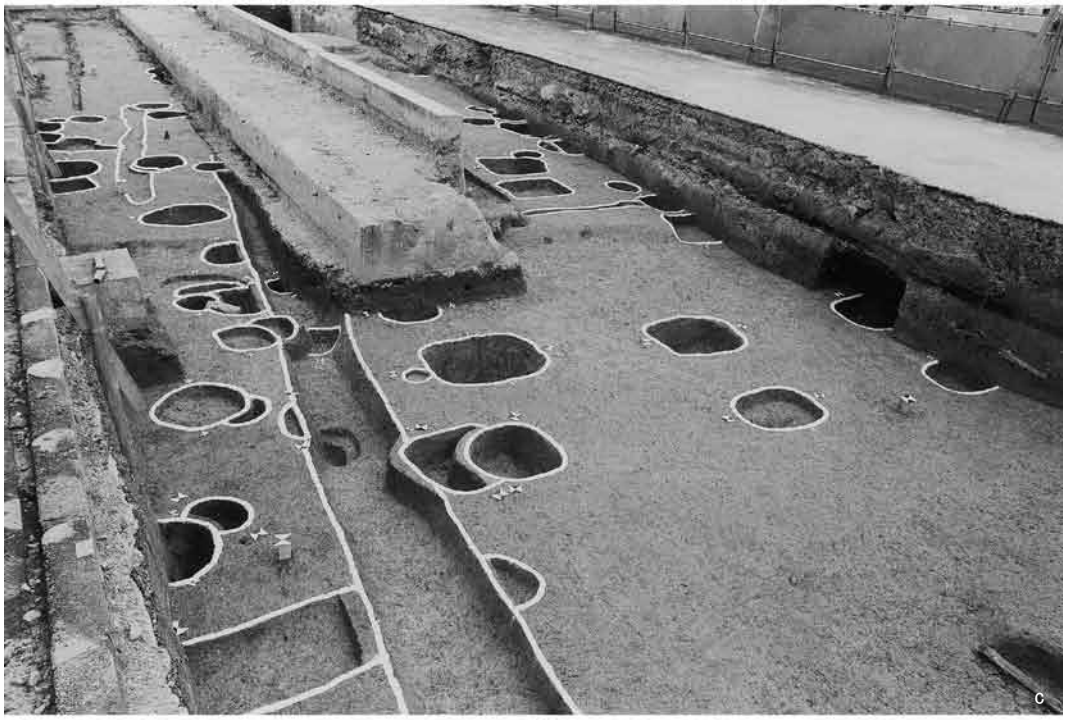
b．７－１区、
溝34断面（北から）

c．３区、土坑113
（西から）

d．３区、柱穴126
遺物出土状況（南から）

図版24　4区、溝229他

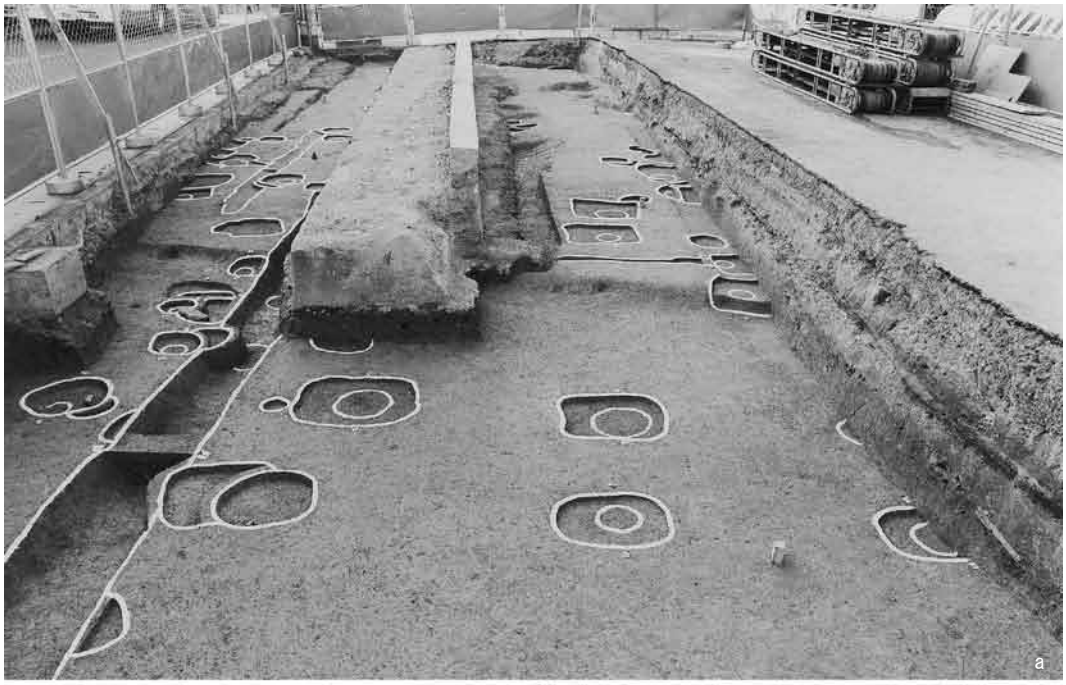
a．溝229・228
掘削状況（西から）
b．同（東から）



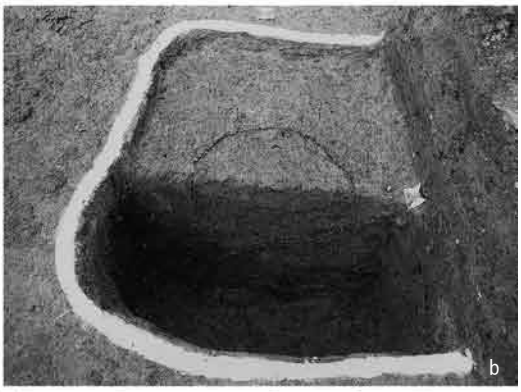
c．溝229他
掘削状況（東から）

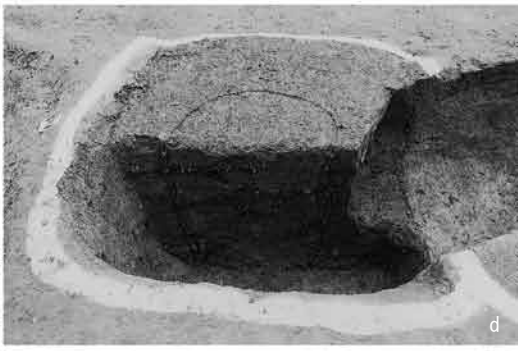
d．溝228断面（東から）
e．溝229断面（東から）

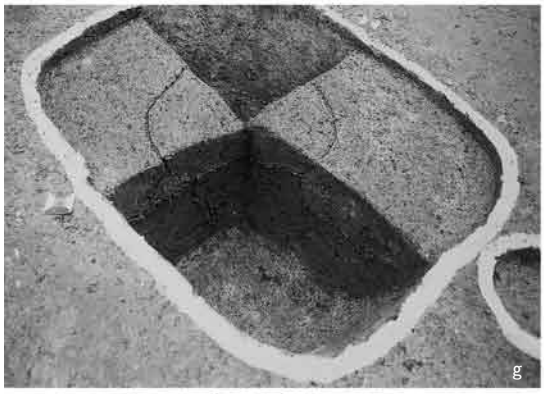
図版25　4区、掘立柱建物6

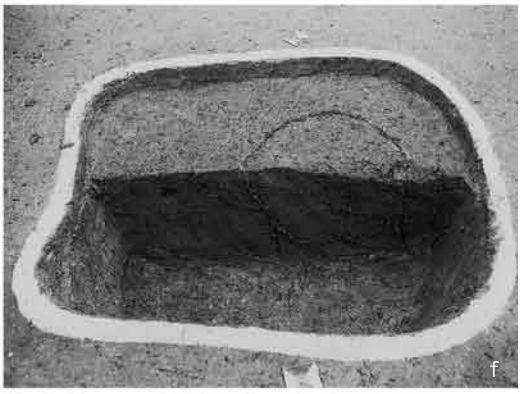


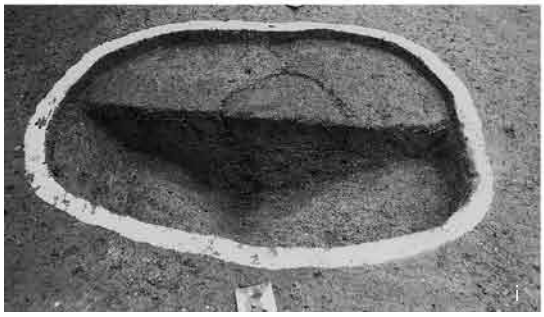
a．掘立柱建物６
（東から）

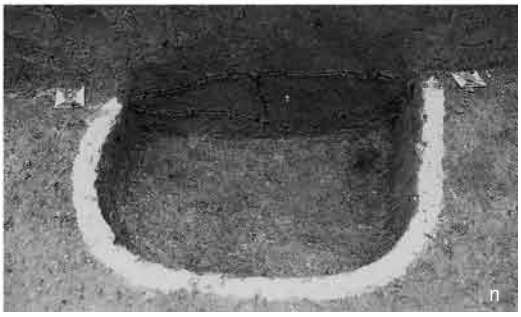








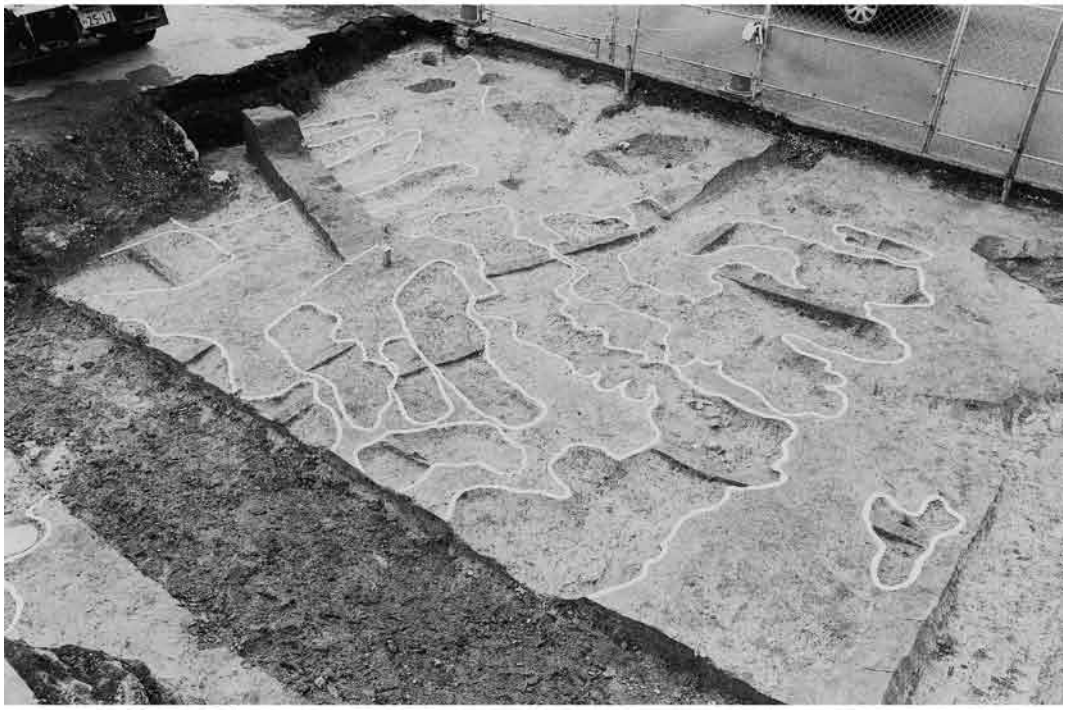




b～i．掘立柱建物６柱穴断面（b.97、c.194、d.100、e.99、f.201、g.202、h.237、i.236）

図版26　8—1区、落込み群（1）

a．微低地確認状況
（北西から）



b．落込み群掘削状況
（北西から）

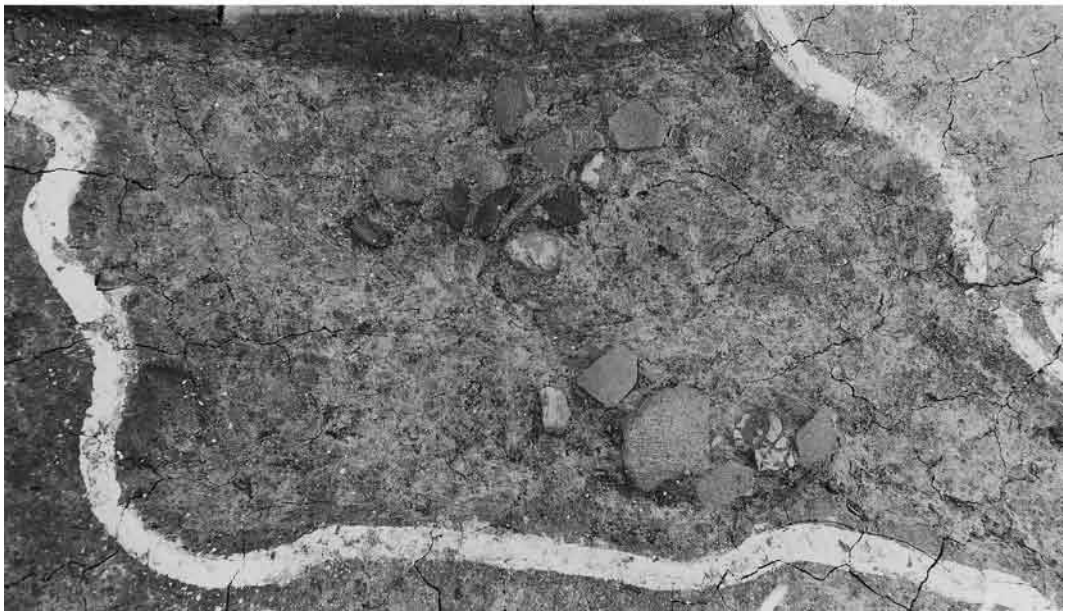
c．落込み群掘削状況
（東から）

図版27　8—1区、落込み群（2）

a．微低地北壁断面
（南西から）

b．落込み群
刃先痕検出状況

c．落込み41他
掘削状況（北西から）



d．落込み41
遺物出土状況（南から）

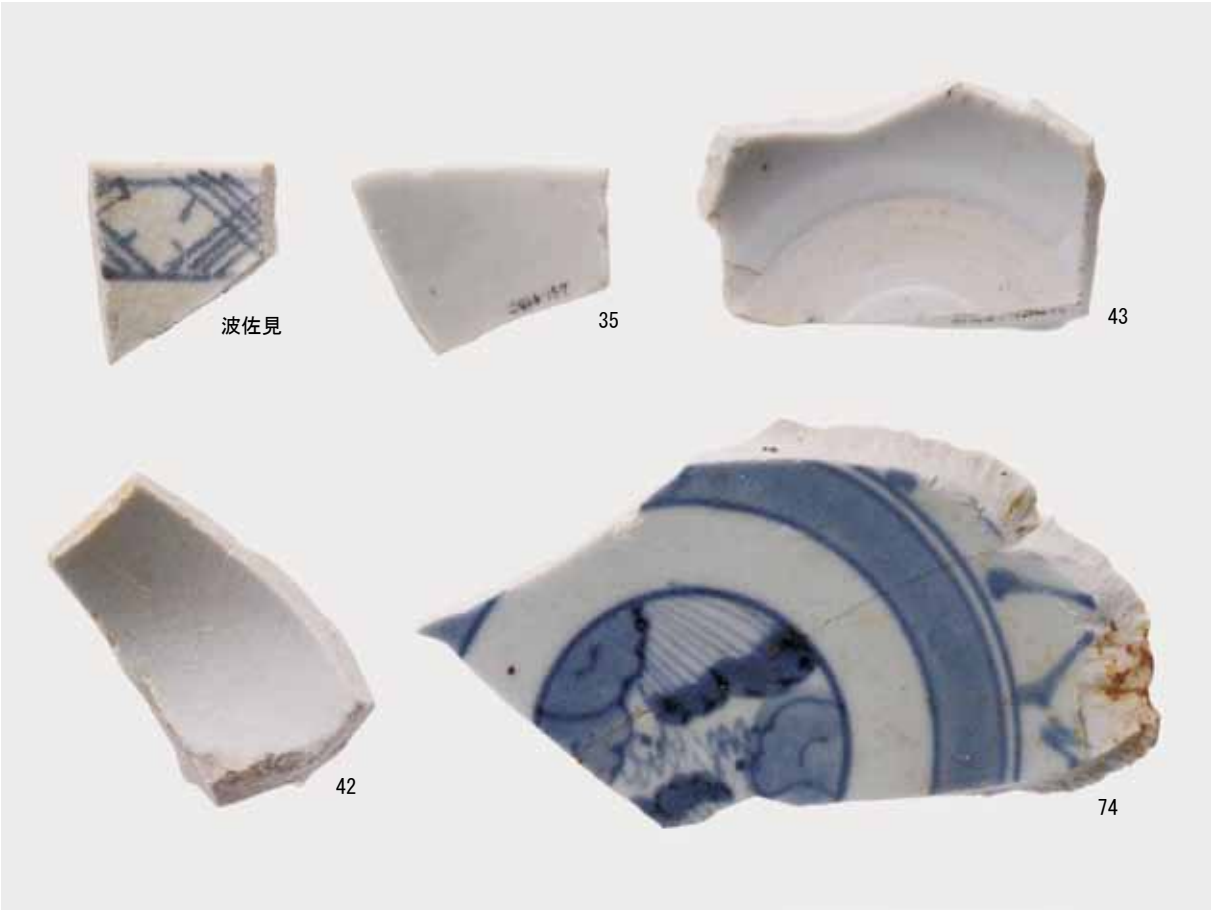
図版28　東・西区、陶磁器1

a．東区、包含層出土陶磁器

b．東・西区、包含層他出土陶器

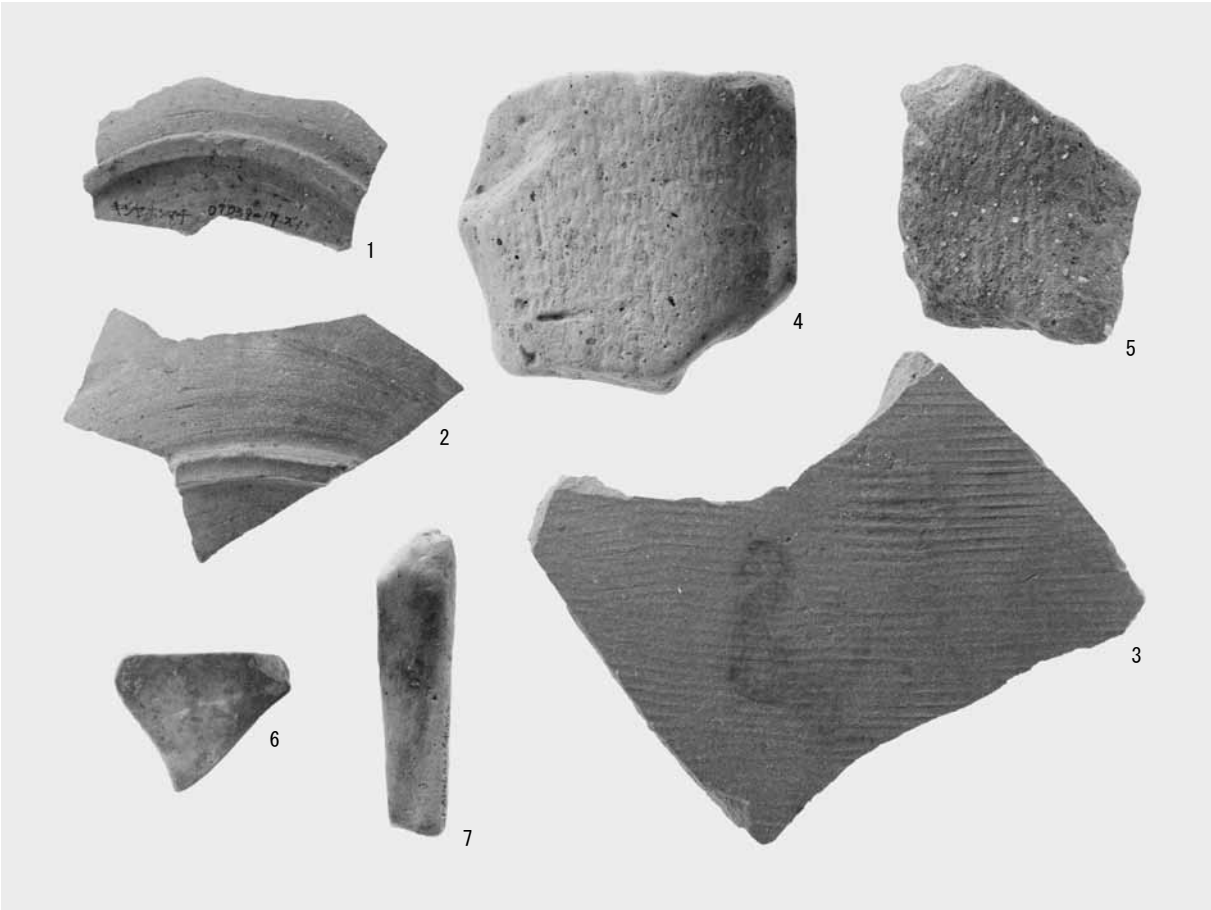
a．東・西区、包含層他出土陶磁器

b．同上(外・底面)

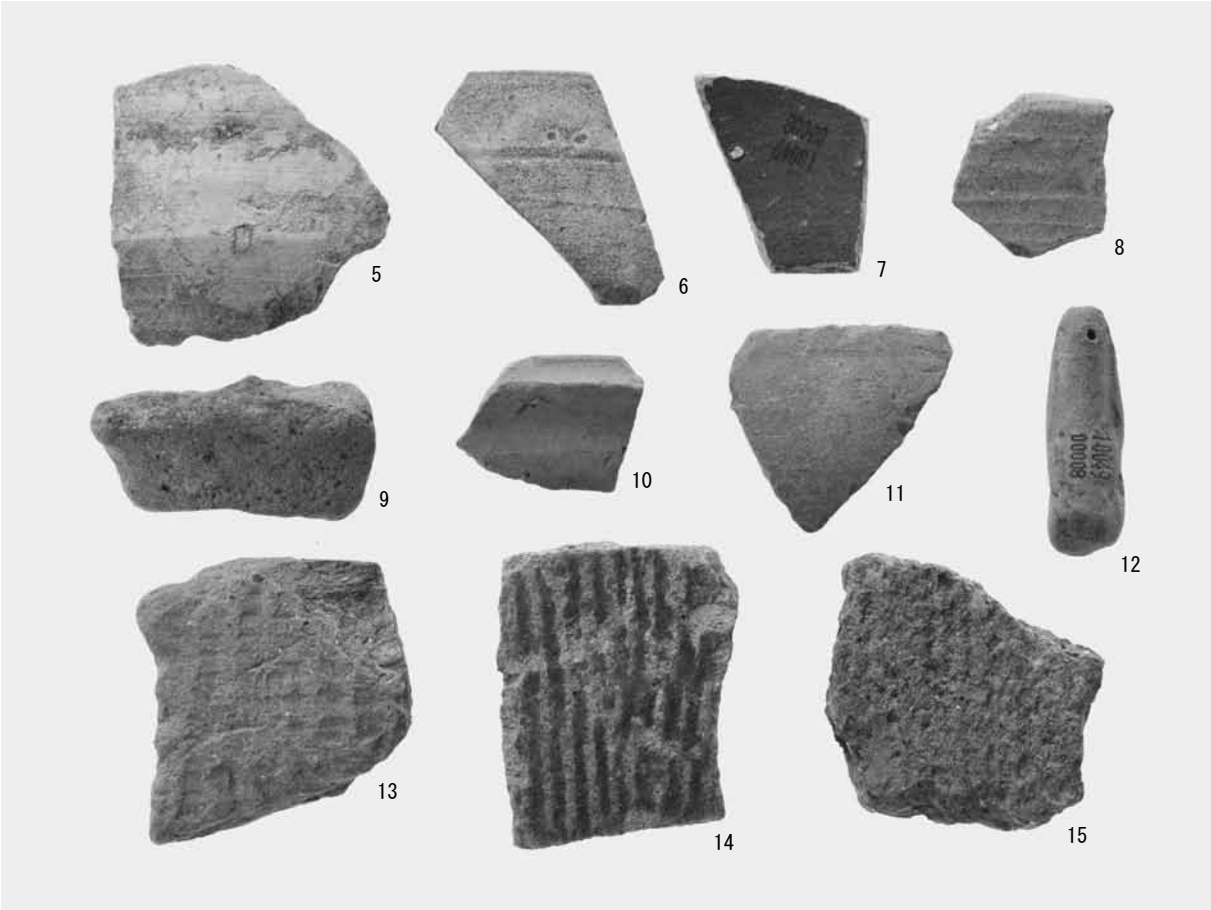


a．東・西区、包含層他出土磁器

b．同上(外・底面)

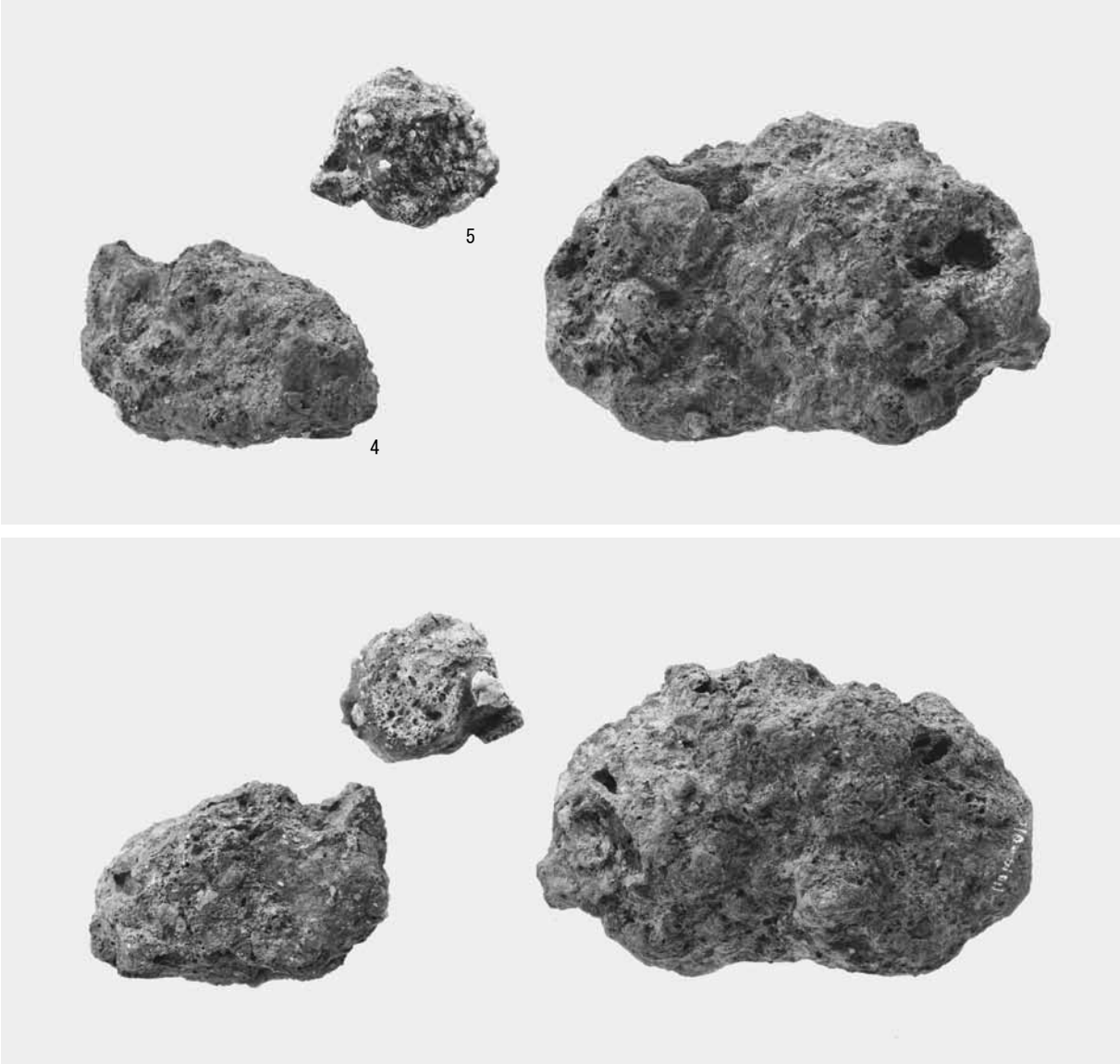


a．平成19年度出土遺物

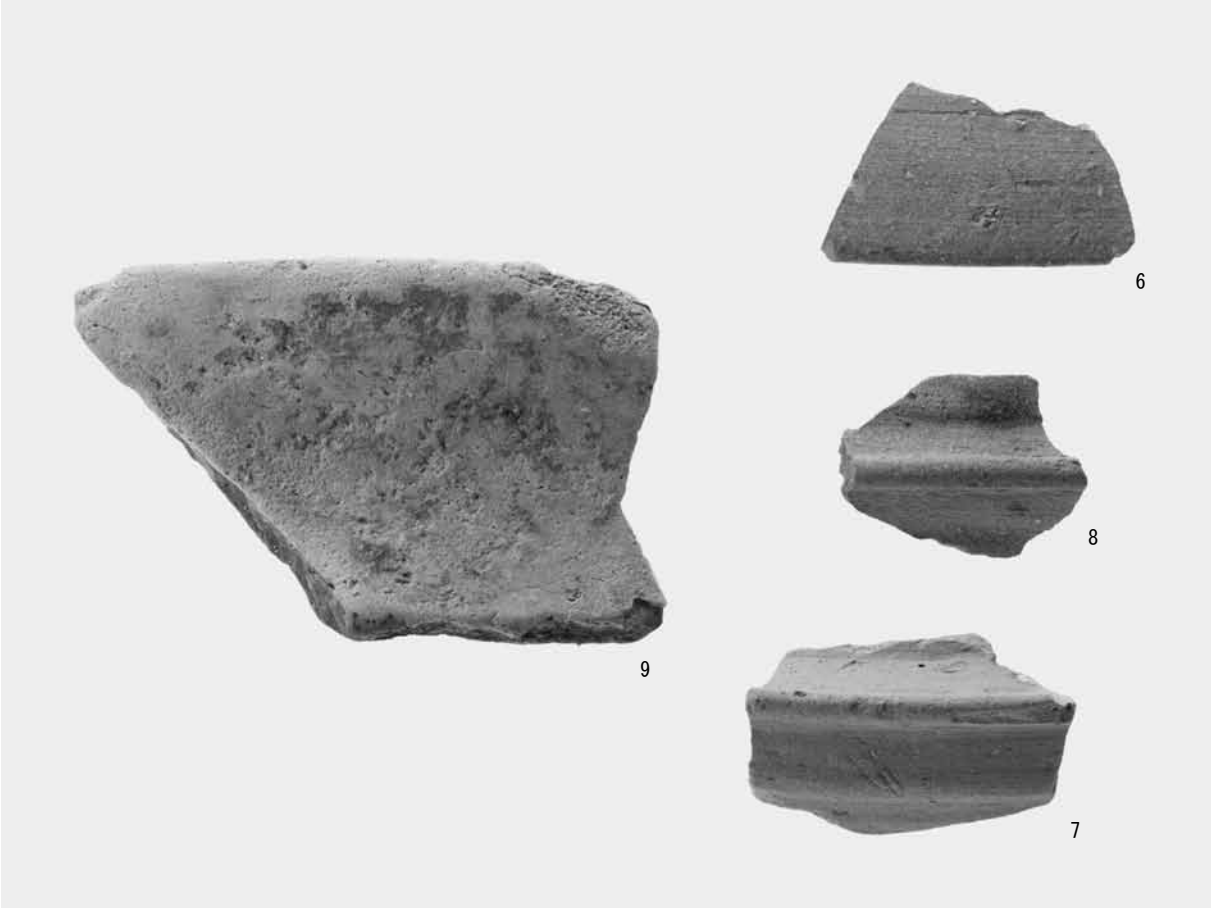


b．平成22年度出土遺物

a．竪穴建物６、柱穴281出土遺物

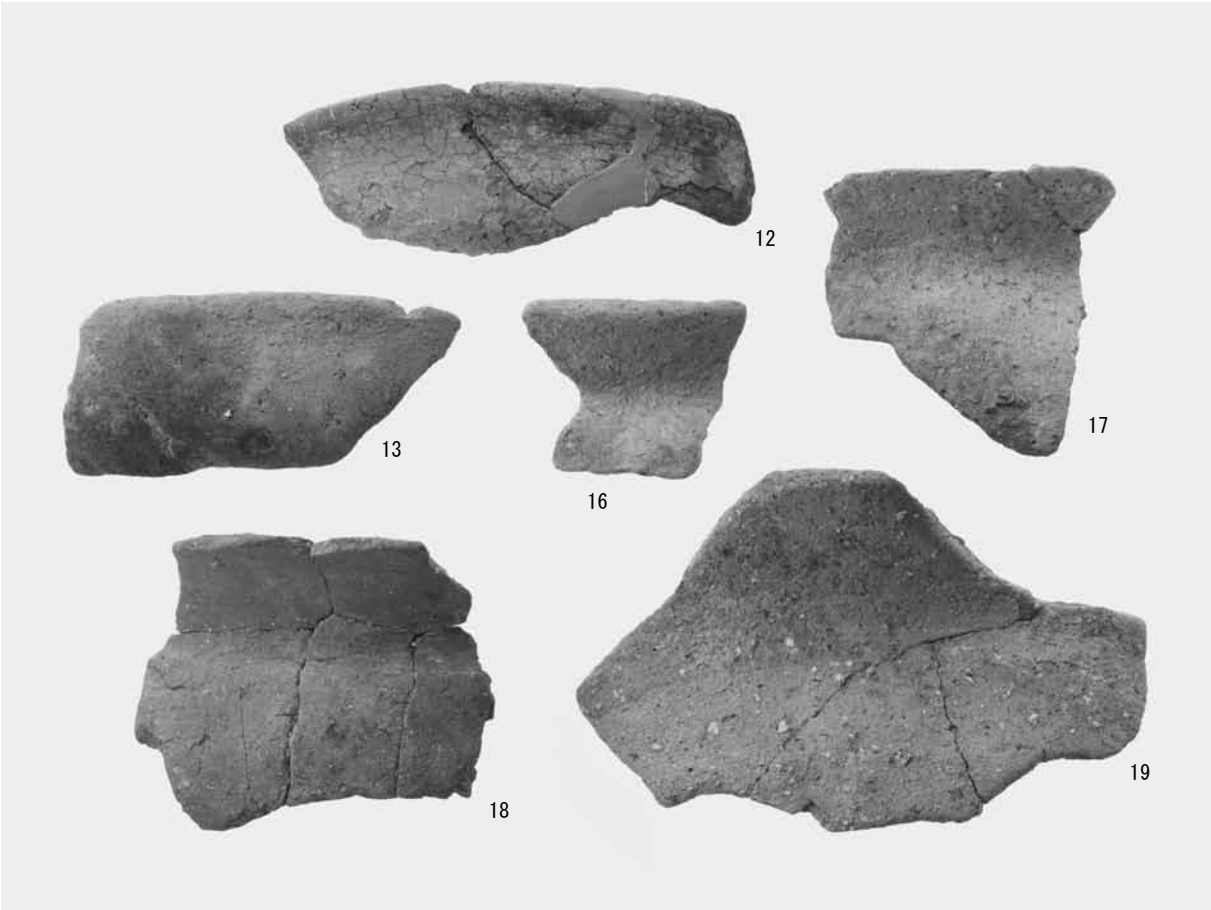


b．竪穴建物６他出土鉄滓（上：上面、下：底面）

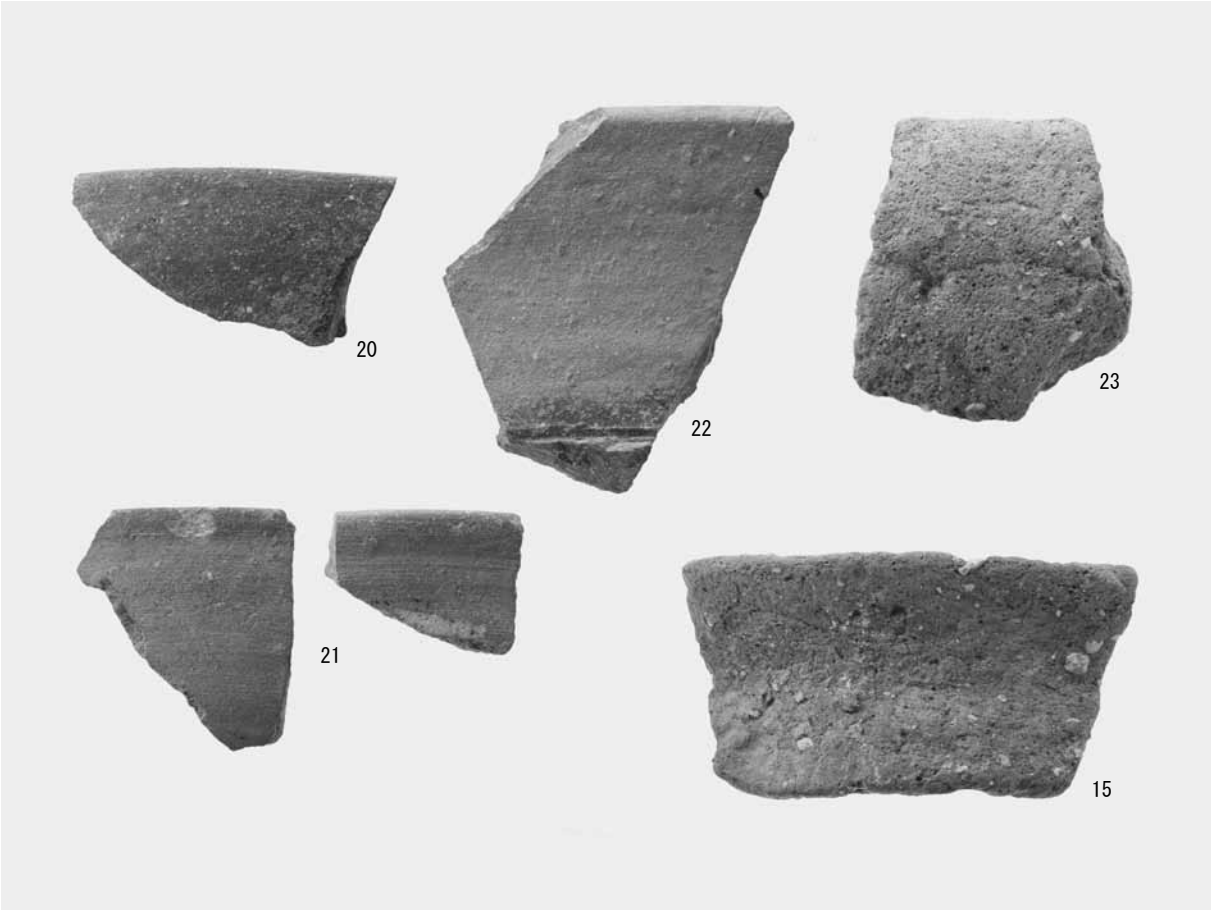


a．掘立柱建物７出土遺物

b．掘立柱建物８出土遺物

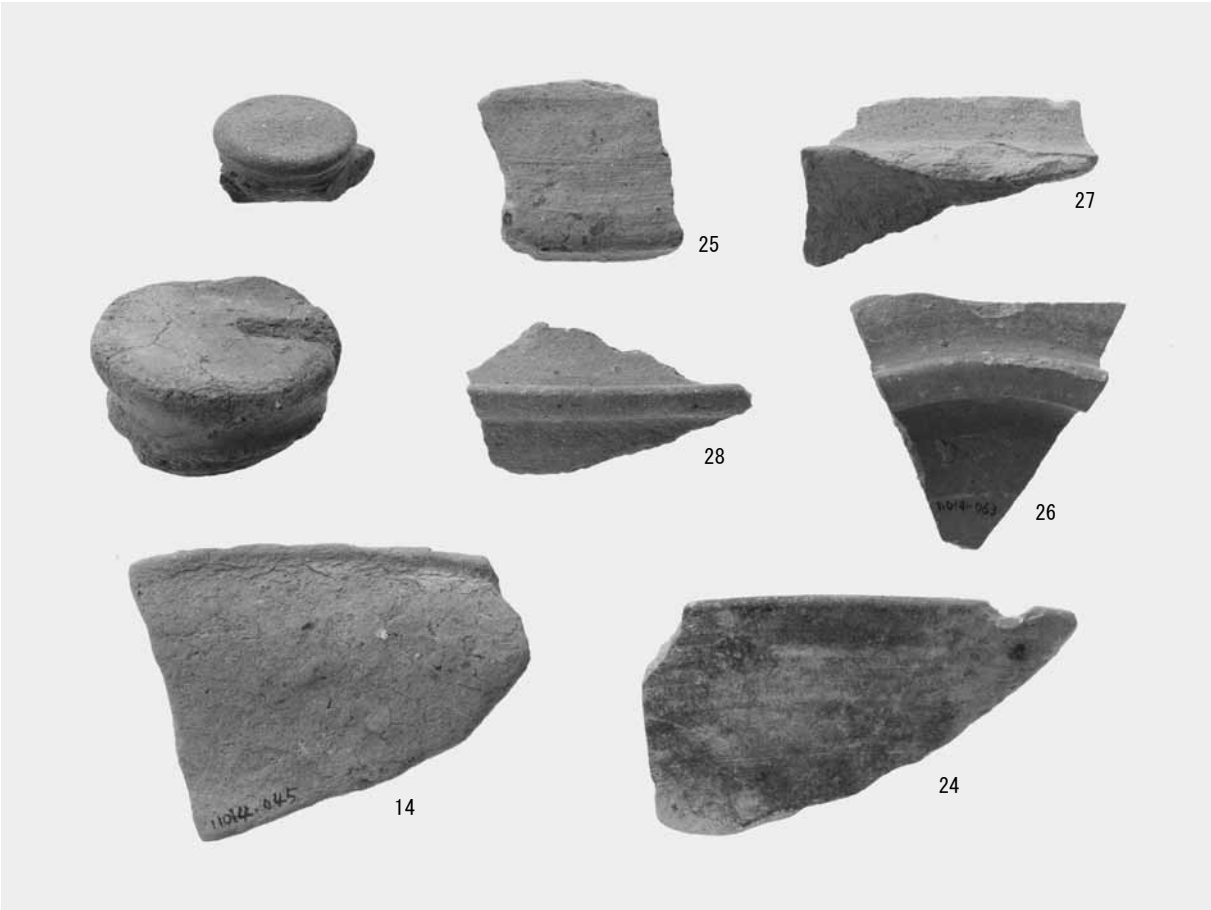


a．溝16出土遺物（1）

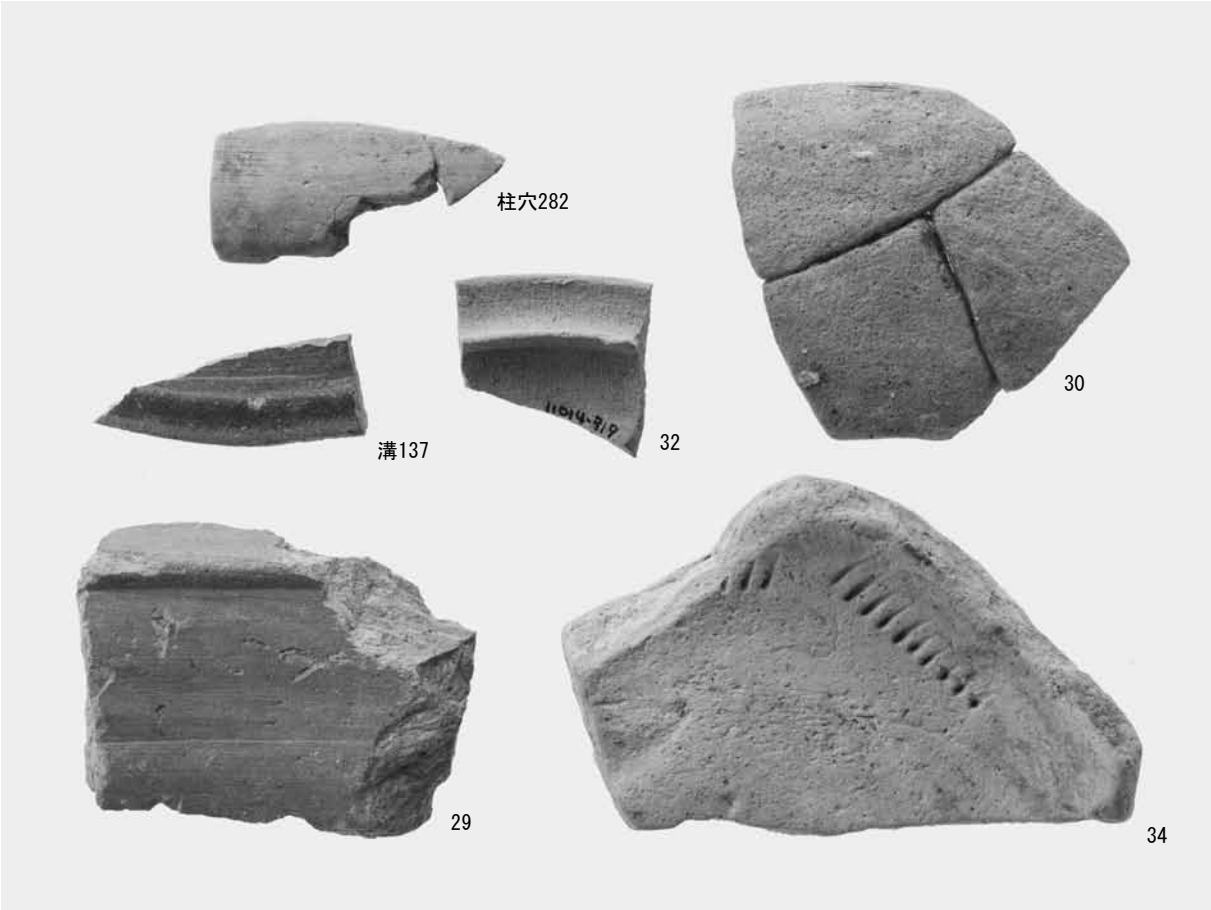


b．溝16出土遺物（2）

図版35　東区、溝16・26他出土遺物

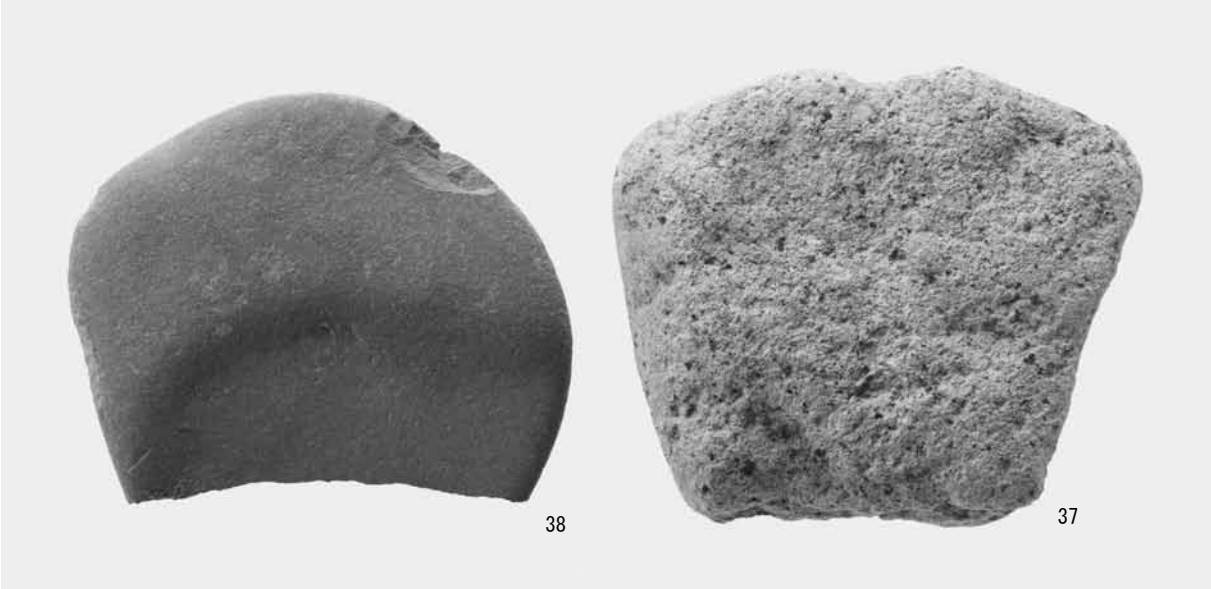


a．溝16・26出土遺物



b．その他遺構出土遺物

図版36　東区、柱穴266出土遺物



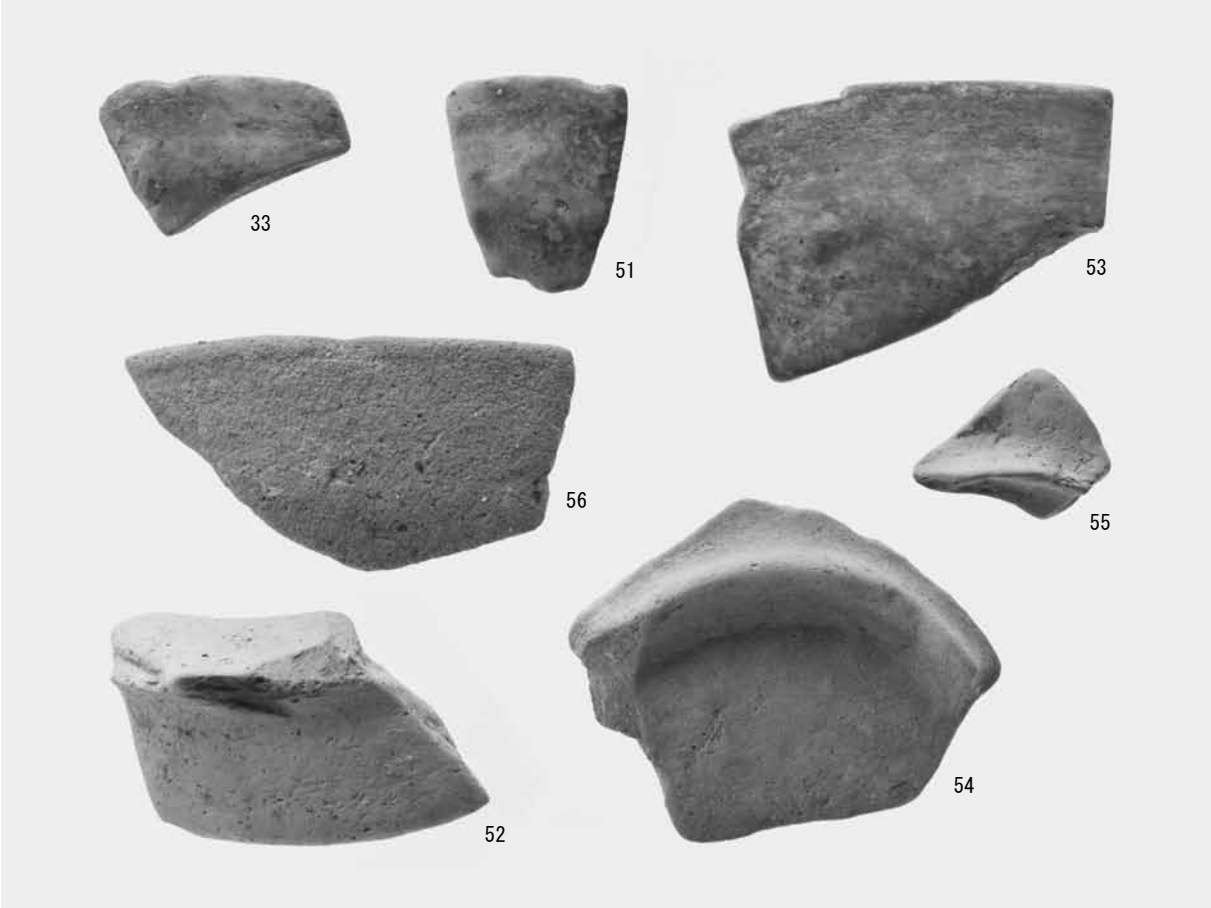
a．柱穴266出土石器

b．同上（裏面）

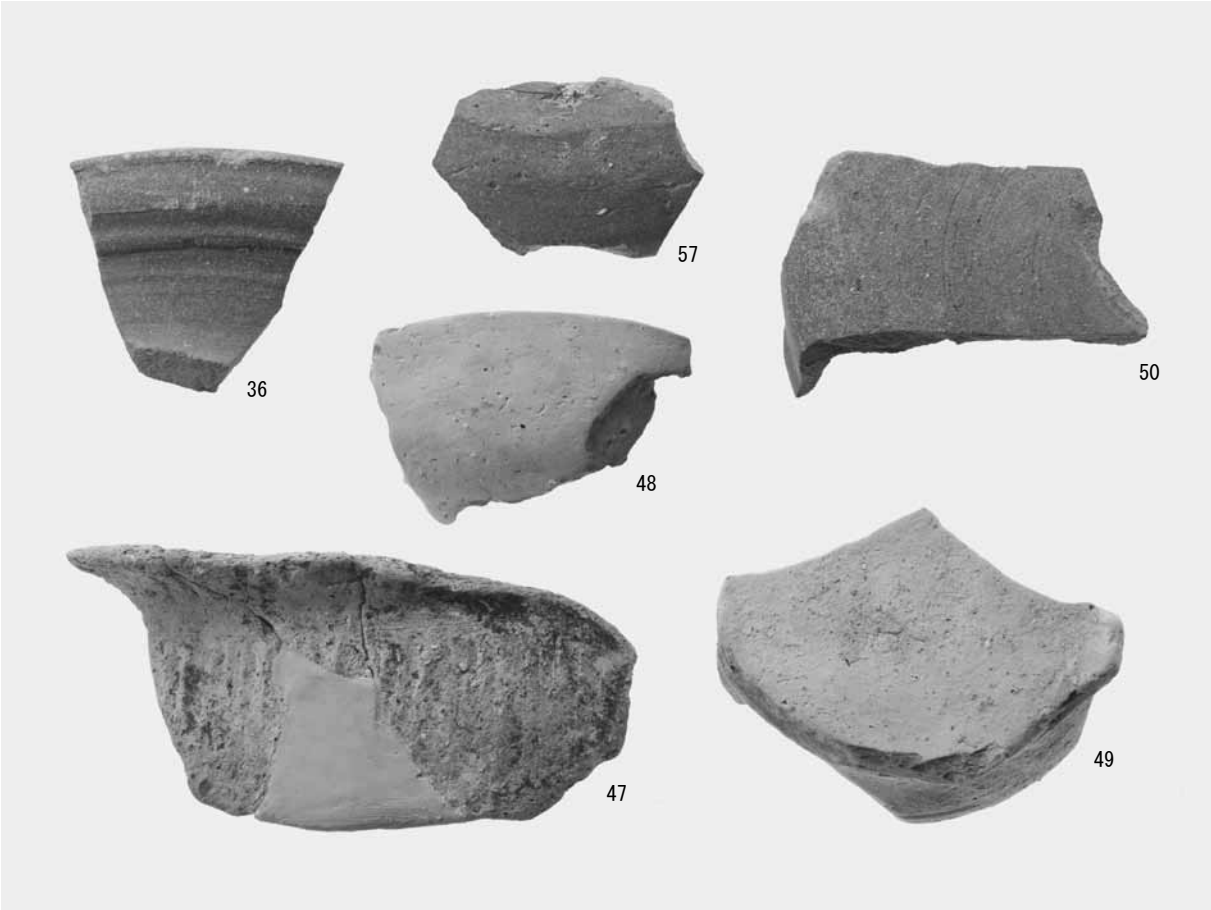
c．敲石38細部

d．石錘37細部

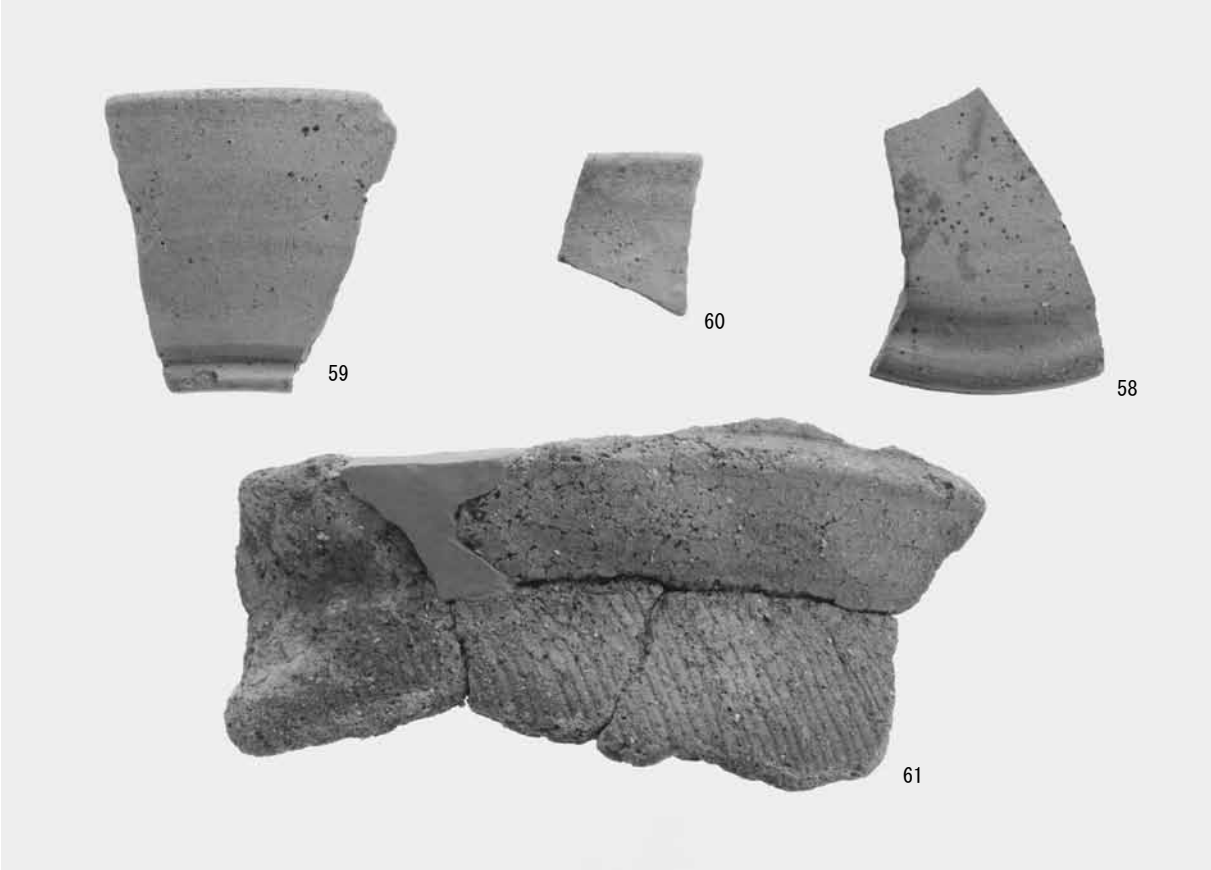
図版37　東区、包含層他出土遺物



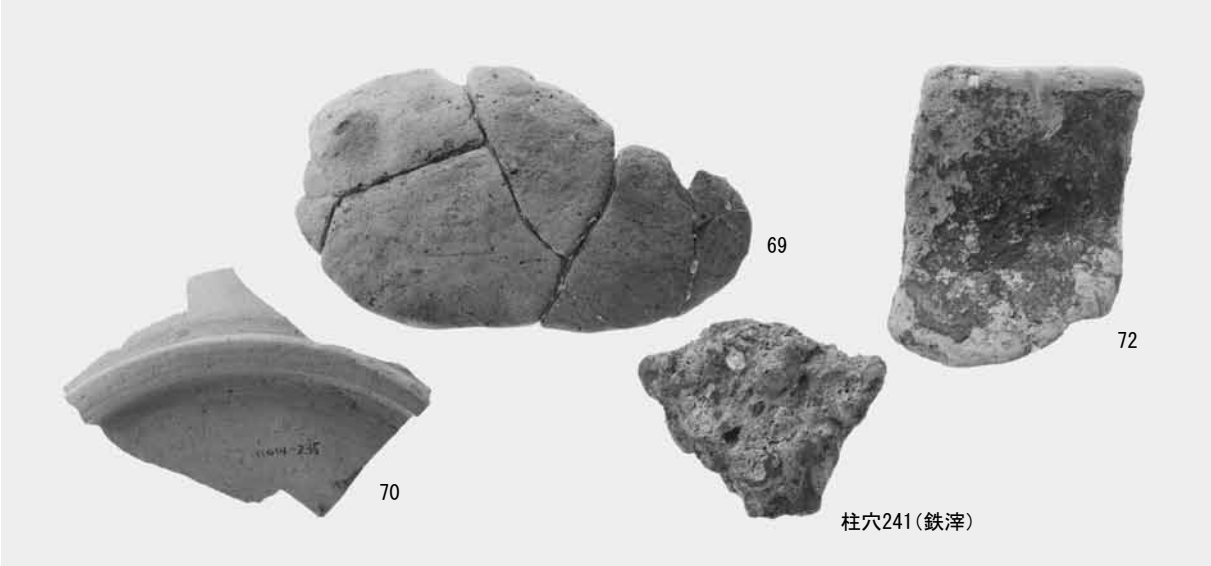
a．溝、包含層出土遺物



b．包含層他出土遺物



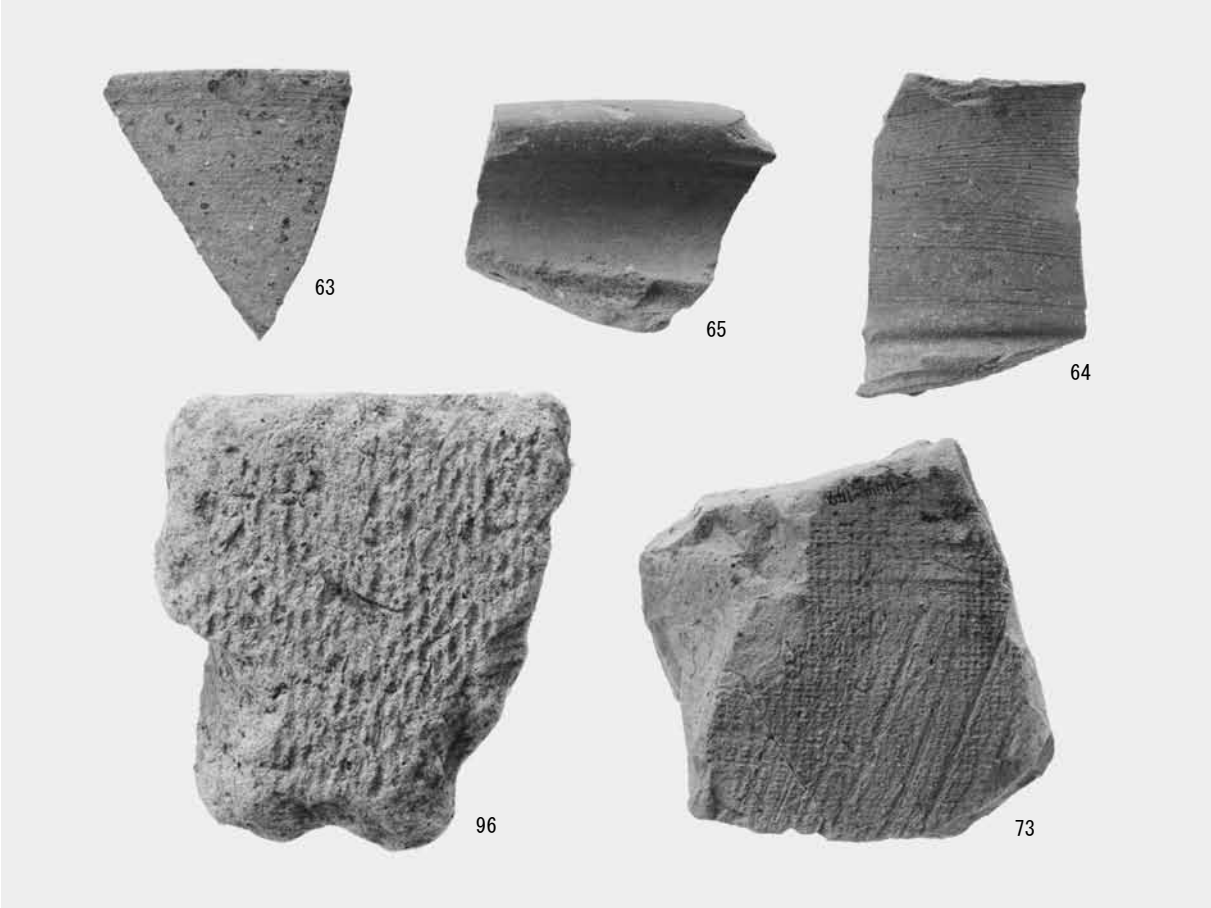
a．掘立柱建物６出土遺物



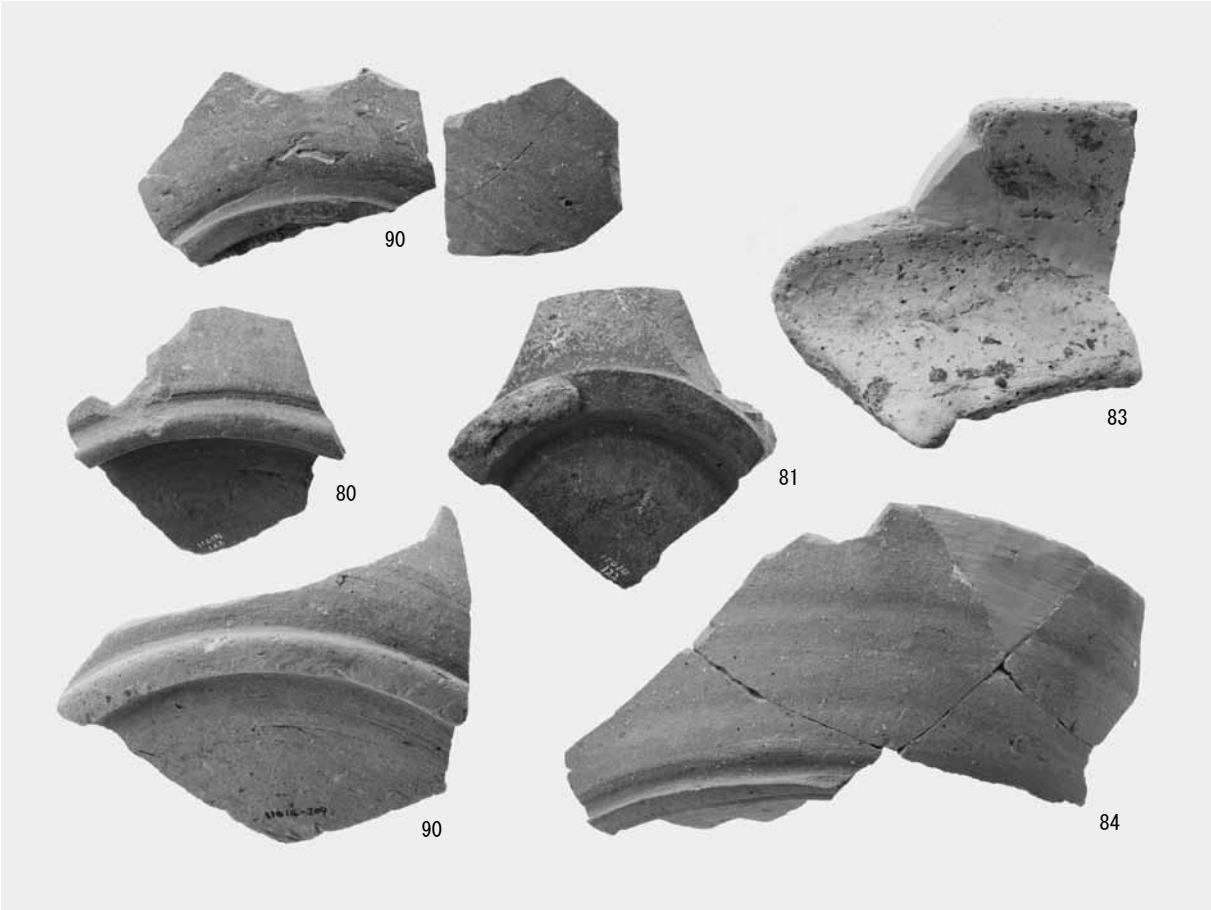
b．柱穴213・233・241出土遺物

c．柱穴126出土遺物

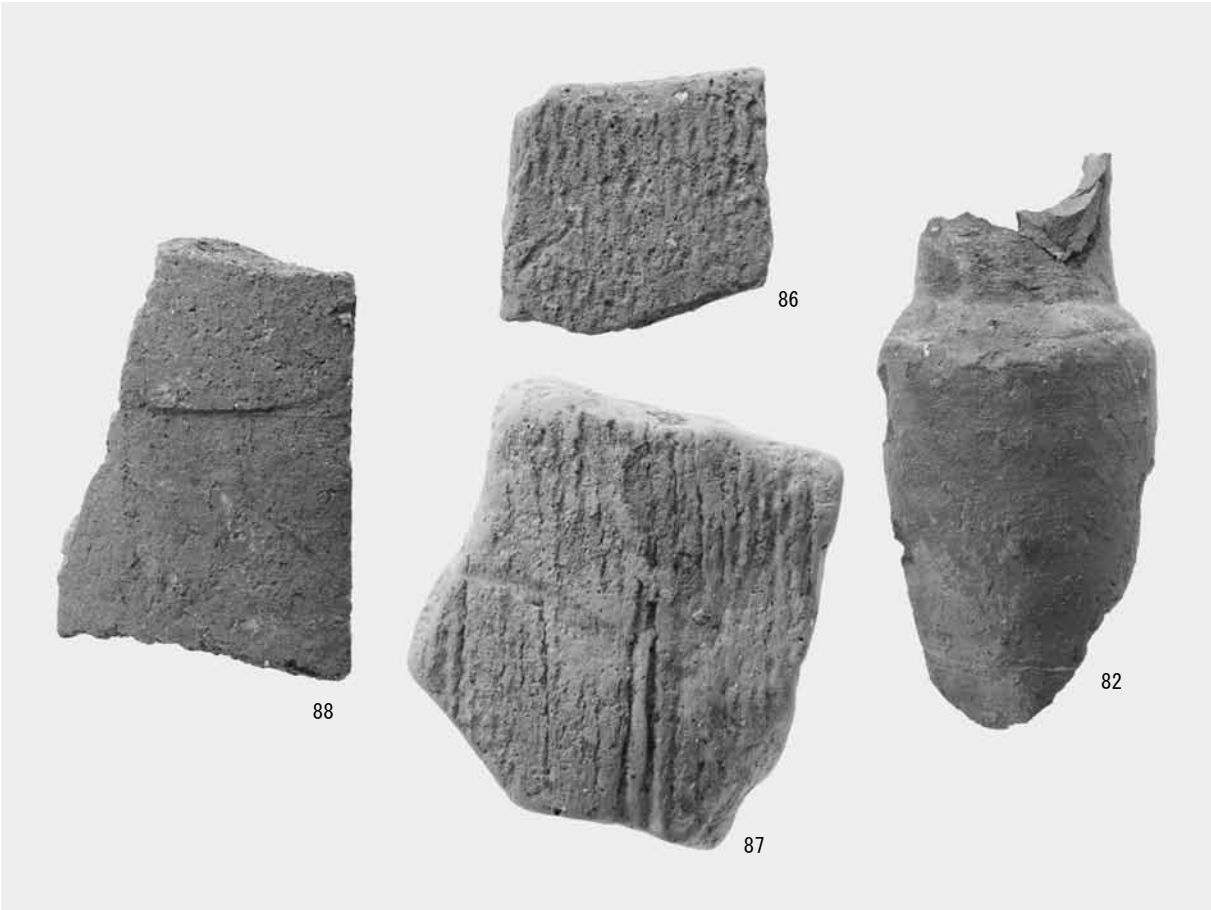
d．柱穴193出土遺物



a．溝229他出土遺物

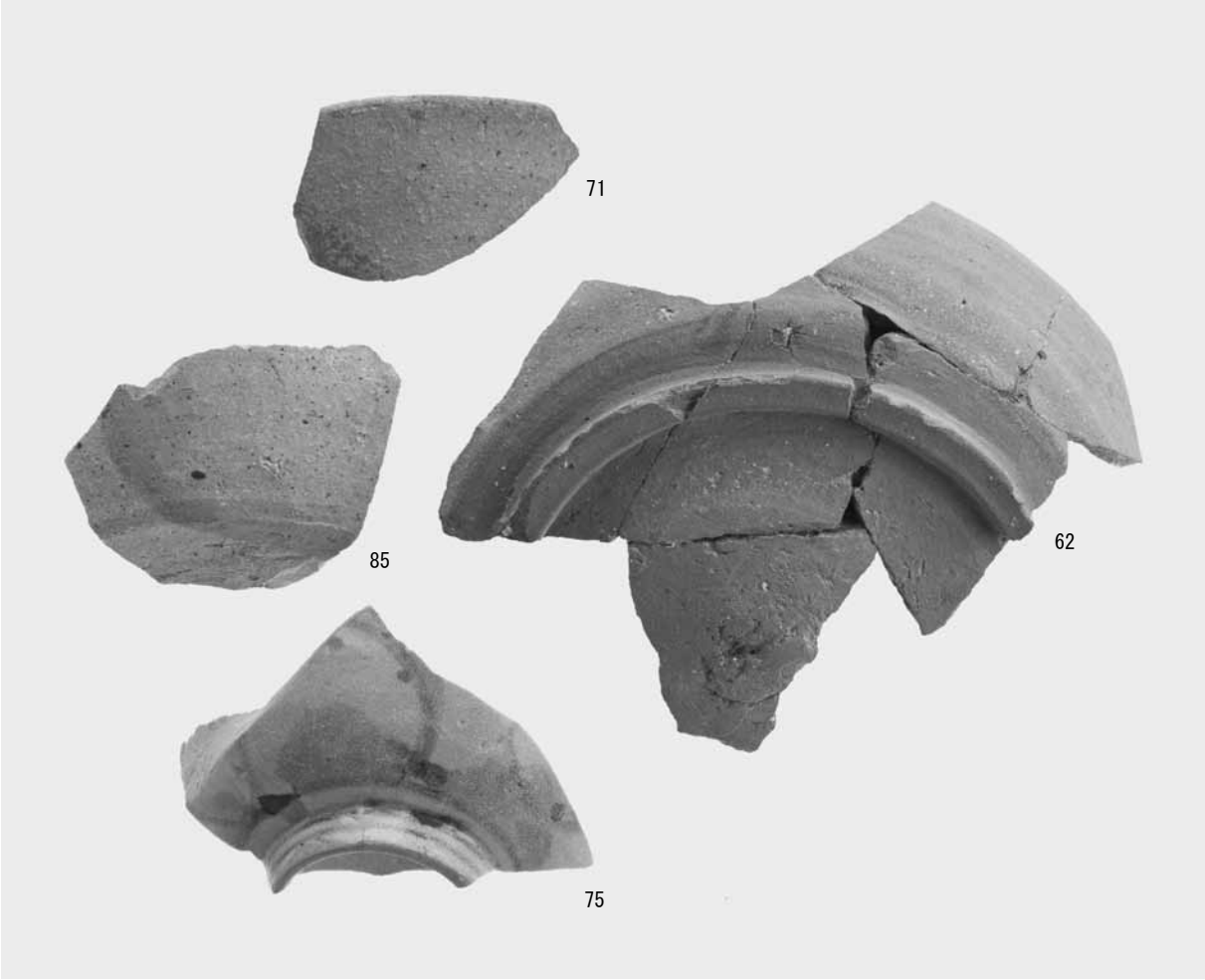


b．包含層他出土遺物

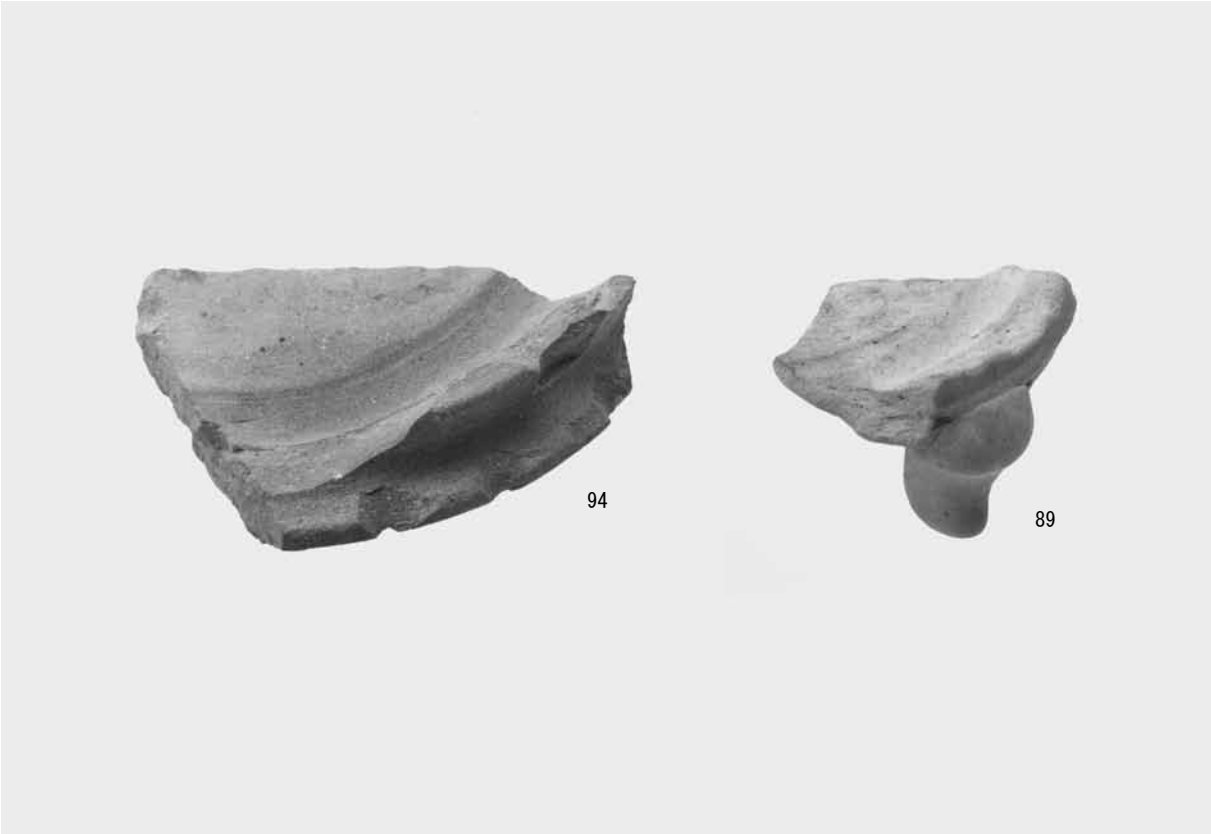


a．整地土出土遺物

b．同上（裏・内面）

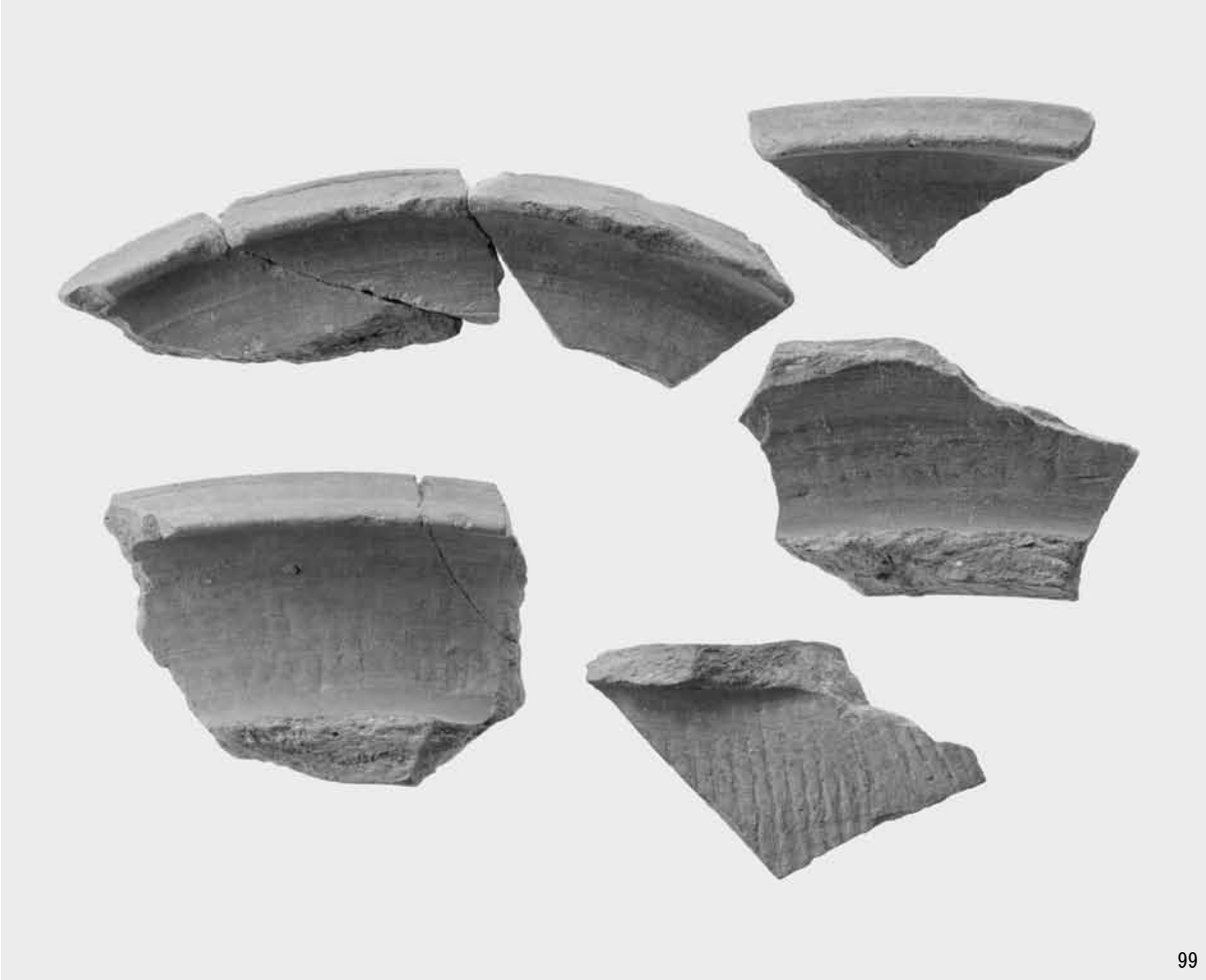


a．各種遺構他出土遺物



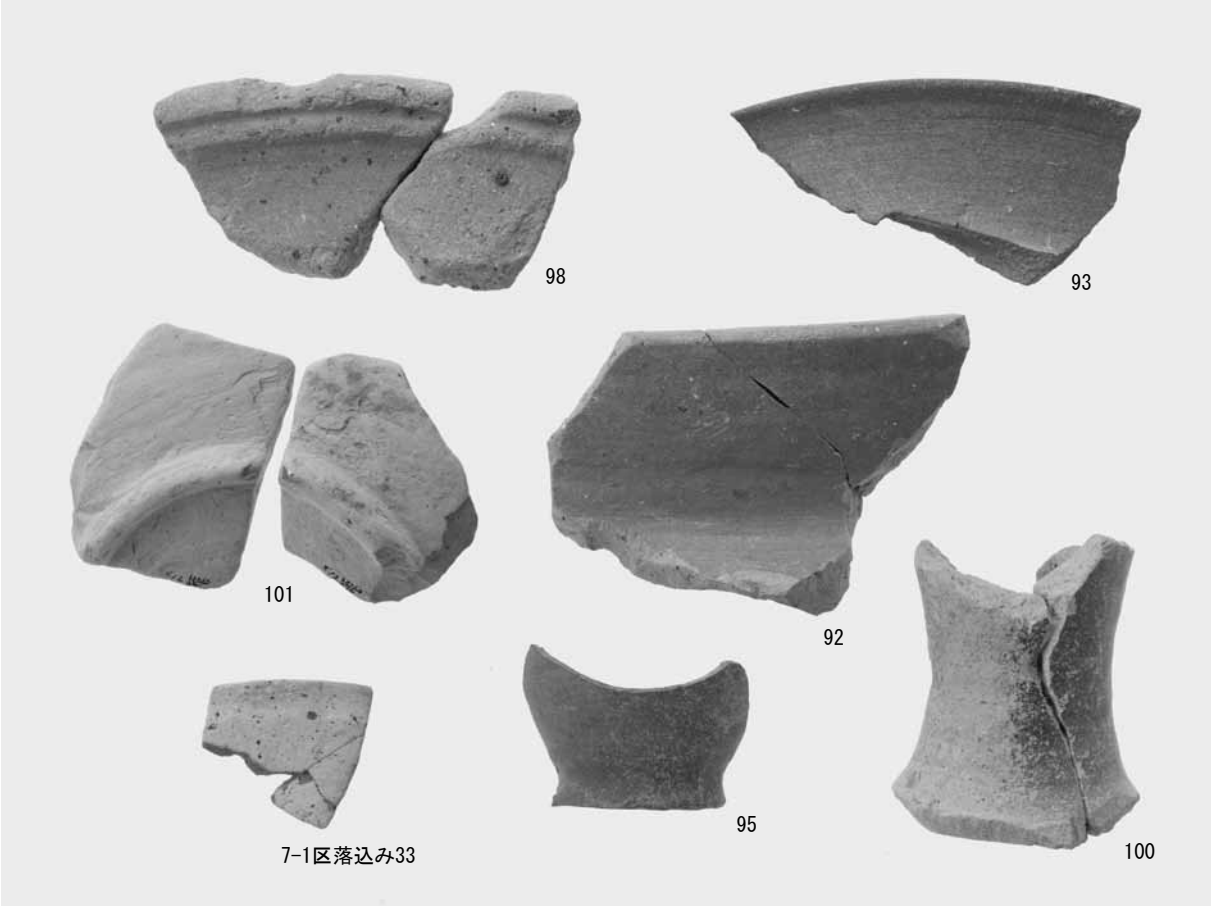
b．包含層他出土遺物

ａ．落込み６出土遺物

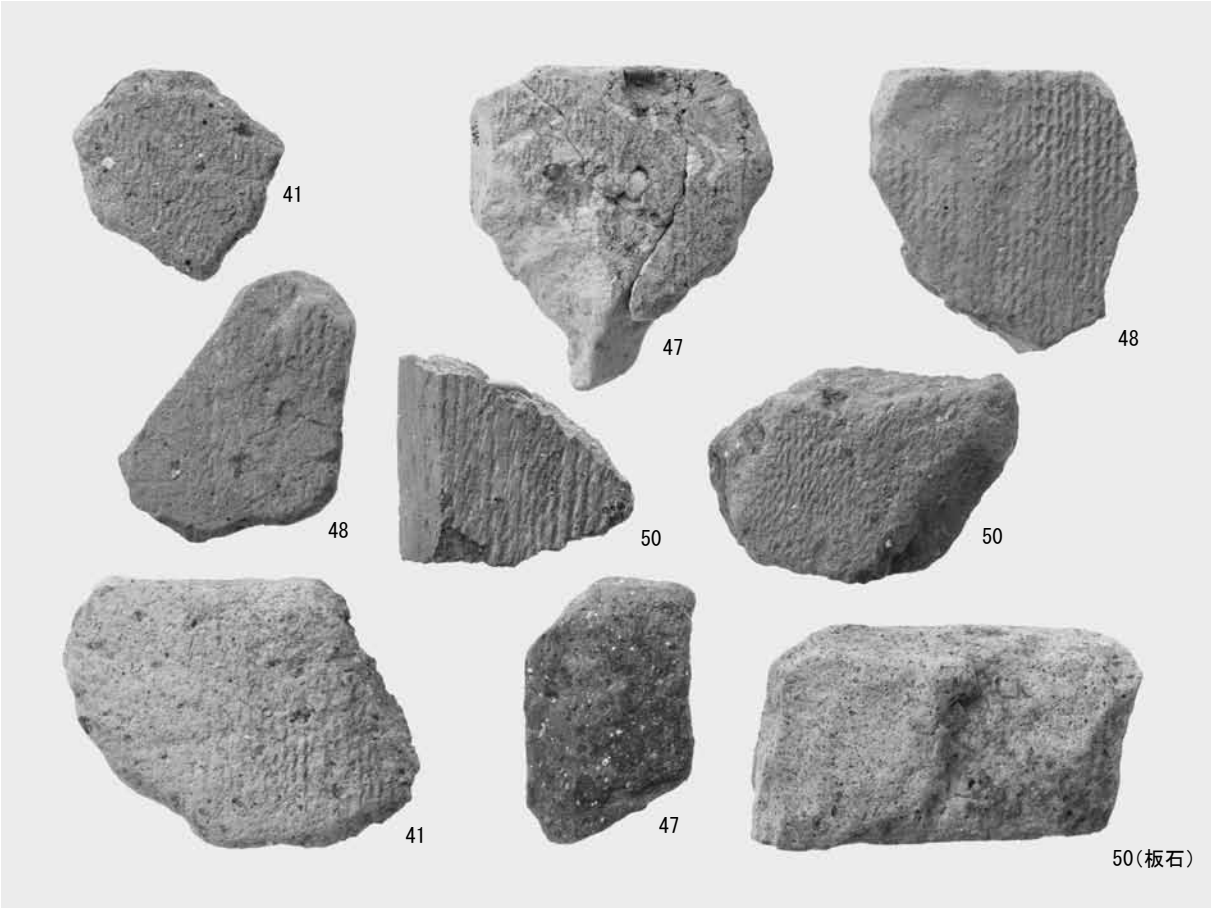


ｂ．落込み41出土遺物

図版43　西区、落込み出土遺物2



a．微低地、落込み出土遺物



b．落込み出土瓦他(番号は落込み)

報　告　書　抄　録

ふりがな	きんやほんまちいせき
書名	禁野本町遺跡
副書名	都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０１３－６
編著者名	山田隆一、岡本敏行、林　日佐子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　　℡　06-6941-0351（代表）
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
禁野本町遺跡（きんやほんまちいせき）	大阪府枚方市禁野本町（おおさかふひらかたしきんやほんまち）	27210	116	34° 49′ 10″	135° 39′ 28″	20071101～ 20071127 20081125～ 20081212 20101028～ 20101224 20110610～ 20120110 20130107～ 20130327	204㎡ 300㎡ 268㎡ 895㎡ 288㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
禁野本町遺跡	集落跡	古墳 奈良、平安 中世	竪穴建物ほか 掘立柱建物、溝ほか 溝ほか	須恵器、土師器ほか 須恵器、土師器ほか 瓦器ほか	

要　約	禁野本町遺跡は、主体が奈良時代から平安時代におよぶ集落遺跡である。百済寺跡の中軸線を基準にした、正方位に近い方形区画や道路側溝、その間に多くの掘立柱建物が確認されており、都市的な景観の広がるエリアと考えられている。 今回の調査で見つかった２条の溝は、その正方位に近い方形区画あるいは道路の側溝と考えられ、また８棟の掘立柱建物も見つかった。これらは、当時の都市的空間の復元にとって、重要な資料となるものである。

大阪府埋蔵文化財調査報告2013－６

禁 野 本 町 遺 跡

－都市計画道路枚方藤阪線拡幅工事に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成26年３月31日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号